

寺。

又曰舟橋町芳林寺禪宗本尊觀自在澤庵和尚開祖、在于漢國町天和三年賢外和尚移建於此所寶永年間松洲和尚止庵號改芳林寺。二世見嚴、三世賢外、四世松洲、五世真嚴。

安養寺

奈良町大字北袋ニアリ、阿彌陀佛ヲ本尊トナシ、淨土宗智恩院末タリ、寺傳ニ平城帝ノ創立ニシテ本ト東城戸ニ在リ、天文元年土寇ノ兵火ニ罹リ、後チ之ヲ再興スト云フ、慶長七年徳川氏ヨリ寺領三十石ヲ寄附セラレ、慶安二年故アリテ堂宇ヲコ、ニ引移ス坊目考ニ據ル

空海寺

奈良町大字雜司ニアリ、地藏石像ヲ本尊トナス、之ヲあなの地藏ト稱ス、言ハ其洞中ニ在ルヲ以テナリ、然ルニ俗ニかなノ地藏ト呼ビ、空海錫ヲココニ留メ、いろは假名ヲ作レリト傳フルハ、あなノ轉訛、かなニ附會セル俗説ナリ、八重櫻ニ、

空海寺といふ有世俗あな地藏といひならはす、一説に文地藏と呼、此こと砂石集に見えたり、今は東大寺の坊におはしましけるとさく、さて此寺を空海寺といふゆらいは弘法大師空海とて東大寺の内に學文しまし、けるころ、北峯の傳教にたのまれ、戒壇堂の土をぬすみとり、山門へつかはさんとし給ひけるを、寺僧見つけ追かけしかは土をうちすて此處へ逃かくれ久しくすませ給ふうち、つれづれの折から石の洞に不動明王をさりつけ給ふ、又一方の地藏は傳教の作といふ。

トアリ、空海竊土ノ傳説果シテ事實ナルヤ否、記録ニ所見ナケレハ、未タ以テ信ヲ措クニ足ラスト雖モ、之レヲ假名地藏ノ俗説ニ比スレハ、較勝レルヲ覺フ、要スルニ當時創立ノ由緒

善鐘寺

ハ詳カナラス、中頃荒廢ノ後チ享保十九年三月僧眞寂ナルモノ本堂惣門庫裏ヲ再興セリ、享保以下坊目考圖會ニ據ル

奈良町大字今在家ニ在リ、觀音ヲ本尊トナス、八重櫻ニ今在家といふ所の石橋をわたり少北へ行坂のあかりたて西かわに有寺をいふ、そのかみは大寺にて有しか今は零落して、いにしへのあととてわづかに残り、閻魔大王と申は稽文會か作なり、南のかたなる地藏薩睡觀世音は比叡山の延曆寺横川惠心院の僧都源信の作二十五菩薩の繪像も同源信の筆といふ、又北の方なる地藏は安阿彌の作として本は此寺より南且過屋といふ在家に有し佛也今一體の地藏井は稽文會か作にて、是もいにしへは北の坂口なる商人の家に有りしといふ、下見ユルモ草創ノ由來詳カナラス。

五劫院

奈良町大字北御門ニアリ、五劫思惟阿彌陀佛ヲ本尊トス、故ニ院號トナシ、本堂ヲ阿彌陀堂ト稱ス、東大寺末タリ、坊目考ニ本尊五劫思惟阿彌陀如來善導大師作、俊乘上人入唐之時得此而歸朝、其後安置於當院、云云、寛永元年阿彌陀堂再興云云ト即此、城内ニ大佛殿再興勸進聖龍松院公慶上人、公慶上人ノ石塔アリ、公慶ハ當國平群郡高山ノ人ナリ、敬阿彌陀佛ト稱シ、權大僧都ニ補セラレ、寶永二年七月十二日東都ニ物化ス、年五十八、翌月十一日コ

善城寺

奈良町大字奈良坂ニアリ、一ニ禪定寺ニ作ル、彌陀三尊ヲ本佛トナス、創立ノ由緒詳カナラス、本ト東大寺戊亥ノ一院ナリ、漸次衰微シ今西福寺境内ナル一字ノ藥師堂ハ其名殘ナリト云フ。

八重櫻曰般若寺を北へ行奈良坂といふところの西側の草堂是なり本此寺東大寺のいのの一院にしていにしへは大寺なりしかいつの頃よりかかやうに零落せり本尊は阿彌陀釋迦樂師の三尊にて雲慶康慶兩作なり今一體のやくしは春日佛師稽文會か作なり

圖會曰又作禪定寺いにしへは東大寺乾の一院也礎石今多く残り今林小路町靈岸寺の末となる……今一村の草堂として祈禱所となる

**隔夜堂** 奈良町大字客養寺ニアリ本尊觀音ハ長谷觀音十分一ノ模像ナリ寛文中中坊美作守時祐ノ建立ニシテ本ト興福寺勸修坊ノ支配ナリ當堂奉加帳所引考曰寛文中々坊美作守時祐隔夜堂建立ト即此任僧ヲ隔夜法師ト稱ス其一夜ハ長谷寺ニ宿シ一夜ハ當寺ニ宿スルヲ以テナリ隔夜ノ勤行今尙之ヲ繼續セリ

**法華寺** 佐保村大字法華寺ニアリ光明皇后ノ創始ニ係リ大日佛ヲ本尊トナス聖武帝諸國ニ國分寺ヲ建テ其僧寺ヲ金光明四天王護國寺尼寺ヲ法華滅罪之寺ト稱スルニ及ヒ大和ノ國分ハ東大法華二寺ヲ以テ之ニ充テラレシコト既ニ東大寺ノ下ニ述フル如シ因テ當寺ヲ國分尼寺法華滅罪寺トモ稱セリ

寺地ハ正ニ藤原不比等ノ舊宅ニシテ即チ平城ノ佐保大路ニ當リ東大寺輦轄門ト相對ス實ニ是レ光明皇后ノ先帝及ヒ考妣ノ爲メニ邸宅ヲ喜捨シ伽藍ヲ創始スル所ナリ事下ニ載スル金版願文ニ見エタリ天平勝寶元年詔シテ墾田一千町ヲ施入セラレ續日本紀大同中ニ至リ寺封五百五十戸ヲ有セリ新抄勅格符抄ニ

法華寺五百五十戸天平勝寶元年二百五十戸天平寶字元年百戸天平神護二年二百戸駿河

ト即是ナリ爾後當寺ノ沿革記録ノ徵スヘキナシ平群郡額安寺古班田圖ヲ案スルニ法華寺庄ト記スル田地數處アリ往時當寺ノ所領ナリシナラン

諸寺緣起集曰法花寺光明皇后御願也皇后者淡海之娘也金堂之大日者善財知識之泥像也高一丈佛後有十一面觀音以白檀造之天井帳錦每坐有金物每間有大蓮花覆之花實鏡也

金堂佛後在如意輪觀音弓削法皇之本尊也  
七大寺巡禮記曰法華寺金堂大日如來善知識知識之泥像高一丈件寺者光明皇后御願天平十三年造又金堂佛後在如意輪觀音弓削法皇之本尊云……又當寺號法華滅罪寺聖

武天皇國則建立僧尼二寺號國分寺仍大和國分者東大寺法華寺也  
觀音堂 安白檀十一面觀音是光明皇后御影云云依唐人所望造之……口傳在之不可思議像也入厨子

學問所 安置立像尺迦嵯峨尺迦口也  
經藏一字 皇后御筆大乘經等在之同法華經等也又與正并袈裟等種々寶物等安之

塔二基 件塔者在中門之東南西  
南大門 顛倒後無建立者也

寺傳ニ據ルニ創立以後嵯峨ノ堪空之ヲ修理シ後チ西大寺ノ與正再興アリシト云フ七大寺巡禮記ニ載スル堂塔ハ與正再興ノ建物ナルヘシ漸次破壊シ僅カニ堂塔各一ノミヲ存セシカ慶長六年豐臣氏片桐且元ヲシテ之レヲ興復セシム即チ今ノ本堂ニシテ舊金堂ノ

殘木ヲ以テ造リシモノト云ヘリ。

舊跡幽考曰再興は北京嵯峨の堪空上人修理せられし後は、西大寺與正井の再興あり、其後又破壊して堂一宇塔一基あり、むかしの金堂の跡は今の堂の前にしていしずゑのこり、此堂の御建立は慶長六年九月御母公の御爲に幕下豊臣公御再興あり、奉行は片桐市正銀箱子銘

徳川氏ニ至リ寺領二百二十石ヲ寄附セラル、而シテ當寺創始ノ本尊ハ善財智識作ノ大日涅槃像ナリシハ既ニ諸寺縁起、七大寺巡禮記ニテ明カナルニ巡禮記ノ書入ニ當寺金堂、本尊丈六尺迦三尊左觀音、四天梵天……大日、不見、給如何ノ文アリ、當時ハ何レノ時代ヲ斥スヲ知ラスト雖トモ、疑ラクハ是亦尋尊ノ加筆ナルヘシ、今ノ本堂ニハ光明皇后ノ御作ト稱スル十一面觀音ヲ本尊トナセリ、此佛像ハ往時觀音堂ノ本佛トナリシヲ金堂佛像失亡ノ後チコレヲ當寺ノ本佛ニ充テタルモノナラン。

舊跡幽考曰本尊十一面觀音菩薩は光明皇后みつからきざみしなり起縁又の説に天竺健達羅國の后のおほせによりて光明皇后の御かたちをうつし奉らんとて來朝せし巧匠のつくりし像なりといへり編年維摩像はむかし此寺にして維摩會あり、その會を興福寺にうつされて後ち西むきにすへ奉りし維摩の像たつみにねぢむき給ひしは、興福寺の會をこひしたひ給ふと見えたり、又五粒の舍利は光明皇后の所持なり……起縁

中世以後興正ノ縁故ニヨリ、律宗、西大寺末タリシカ、今ハ眞言宗金剛峰寺ノ末寺トナレリ、同書曰當代律宗たり、寛元三年西大寺の興正菩薩を師として、此寺の文篋沙尼戒をさつ

かり建長元年慈善等大比丘尼戒をうけつきしより西大寺の末寺とはなりたり。釋書  
○因云今ヲ去ル大凡三百八十餘年即永正七年土中ヨリ金版一枚ヲ掘出ス、銘文アリ光明皇后ノ親筆ヲ鐫スル所ノモノト、其文ニ云、

維天平寶字三年歲次己亥十二月二十三日乙卯菩薩戒弟子皇太后藤原氏光明子道名則眞稽首和南常住三寶、夫聞聖靈湛寂、淨域冲虛、現身現方、爲齋爲益、人天歸命、龍神竭誠、利涉苦流、莫加斯道、故以奉爲先帝及先考先妣、捨居宅、以建伽藍、傾珍財而摸眞容、无逢毗首、思齊憂填之像、不問鷲子、莫擬須達之苑、唯願十方三寶慈悲攝受、所冀聖靈登華藏、利見十佛、考妣縱賞寶坊、開悟三明、其寺所管一針一草、悉施常住、現前三寶、但欲滅生死、罪入佛知見、故制寺名、法花滅罪、仰願像法、天法破戒、无戒一跬、躡我寺院、悉具戒足、遊菩提場、一粒嘗我、供施早得、慧舌辨眞法味、後世惡賊黨壞、此願天神地祇、幸加擁護。以上法隆寺舊記類集第六號ニ詳ニ載ス、但金版今何處ニ存スルヲ詳カニセズ

圖照寺 帶解村大字山村ニアリ、如意輪觀音ヲ本尊トナシ、臨濟宗妙心寺末タリ、後水尾天皇第一ノ皇女梅宮文智女王寛永十八年洛北修學院ニ草庵ヲ結ヒ、勤行ヲ親ラニシ玉フ、是其濫觴ナリ、明暦元年二八島村ニ草庵ヲ結ヒ、今ノ本尊ヲ安置シ、普門山圓照寺ト號ス、世ニ之ヲ八島御所ト稱セリ。  
和州寺社記曰普門山圓照寺は世に矢島の御所といふ、當 延成天皇第一女梅の宮の御庵室にて法名を文智と申奉る、明暦元年北京より此所に移らせ給ひみつから普門山圓照寺と號し給ふ、草庵の内に如意輪觀音を安置し、自ら關迦の水を汲朝夕御經をあそばし……

寛文九年八島ヨリ今ノ處ニ移シ建ツ、爾來尼宮ノ寺院トナリ、以テ今日ニ至レリ、其住持ノ次第ハ圓照寺宮御代々記ニ詳カナリ。

普門山圓照禪寺

文智入道女王 後水尾院第一皇女梅宮後佐和宮御母、太政大臣秀忠公女東福門院、元和五己未六月二十日誕生、寛永十七年庚辰年八月二十八日佛頂國師ニ就テ御得度、御年二十二、同十八辛巳年洛北修學院ニ草庵ヲ結ヒ、圓照寺ヲ創メ玉フ、明曆二丙申年四月五日和州添上郡八島邑へ御移、寛文九己酉年十一月十二日八島村ヨリ山村へ御移、元祿十丁丑年正月十三日薨去、御年七十九、深如海院ト號ス。  
藤宮 靈源院第九皇女御母五條大納言爲庸卿女管中納言局、元祿六癸酉年三月三日御誕生、同十五壬子年正月二十六日御入室、同年十月二十三日薨去、御年十、菩提心院ト號ス。

文應入道女王 同帝第十一皇女乙宮御母ハ今城中納言定淳卿女藤式部局、元祿十五壬午年十一月二十日御誕生、寶永三丙戌年十二月二十一日當寺御山主ニ御定、御年五、同六己丑年五月十一日御入室。  
文晃入道女王 有栖川幸仁親王女櫻町院帝御養女嵩宮御母葉室大納言殿女菖蒲小路、延享三丙寅年誕生、寛延三年庚午年十月十八日御附弟御定、御年五、寶曆六丙子年九月二十七日御入室、同月三十日御得度、御年十一、明和庚寅年七月四日薨去、御年二十五、歡喜心院ト號ス。

大聖寺法内親王 明和七庚寅年九月十三日ヨリ寛政九年丁巳年十月迄、勝妓樂院ト號ス。

文葉入道女王 有栖川職仁親王女淑宮御母平松宰相時章卿養女常盤井天明七丁未年正月十六日御誕生、寛政九丁巳年十月當寺御山主ニ御定、御年十一、同十戊午年正月二十七日御入室、享和元年辛酉年三月二十四日得度、御年十五、文化十三丙子年十月八日光格天皇爲御養女、御年二十八、弘化三丙午年六月二十二日薨去、御年六十、常應心院ト號ス。

福喜宮 伏見邦家入道親王女御母鷹司故入道准后政熙公、天保十五甲辰年正月二十九日御誕生、弘化四丁未年六月二十三日當寺御山主ニ御定、同年九月二十九日御入室、御年四。

海龍王寺 佐保村大字法華寺ニアリ、一角寺隅院ト稱ス、平城宮ノ東北隅ニアリ、故ニ名ク、天平三年光明皇后ノ本願ニ成リ、天平七年留學僧玄昉歸朝ノ後嘗テココニ住ス、故ニ玄昉ヲ以テ開基トナス、事左ノ記録ニ詳カナリ。

緣起曰、人皇四十五代聖武天皇勅裁之靈場、光明皇后御願之仁祠也、往昔伽藍草創之始、贈正一位太政大臣文忠公等、栖息之靈場也、皇帝皇后常幸臨、此砌詔行基法師令開經律講肆、又本願皇后自造十一面大士之像、兼繕寫法文、更改舊殿爲佛閣、薦先考之冥福也、其時院宇未備、不遑僧居、禁闕位東北隅、故俗呼號隅寺、天平三年辛未、搆數字紺殿、封境四至、造寺之間、造佛并之像、安置諸堂、詔諸沙門令居之、賜寺額、尙存、在號海龍王寺、蓋御願之始、帝后誓海

龍神王之故也云云靈龜二年丙辰沙門玄昉等奉勅入唐留學天平七年乙亥玄昉及多治比廣成等歸洛齋經論佛像等來獻尙書帝后歡悅勅藏當寺賜一切經藏宸書之額又賜食封一百戶田一百畝及侍童八人乃令玄昉居當寺

諸寺緣起集曰角寺右京法花寺西方 件寺者光明皇后之御願也玄昉入唐之時求法安穩爲遂皇后之立願所造也而興福寺智尊僧都爲彼寺別當恐盜賊言上長者殿下去永久二年所安置寺家也

和州寺社記曰海龍王寺は世に隅寺といふ法花寺より少し東の方也是は古へ玄昉僧正渡唐し給ひし時祈禱の爲め建給ひし寺なるへし今は戒律宗なり光明皇后の御守り本尊として十一面觀音の靈像御座すと也

爾來經數百星霜遂屬棟葺斜傾于茲嘉禎年中當寺衆首戒惠上人再入法齋與諸檀共振願綱舉百廢也於是正應元年始爲戒律之道場此時又賜一切經藏宸毫之額云云

今西大寺末タリ講堂ハ文珠菩薩ヲ本尊トシ西金堂ハ藥師佛ヲ安置ス創立沿革詳カナラス寺領ハ續日本紀ニ天平十三年三月施隅院食封一百戶トアリテ一百戶永ク當寺ノ定數トナレリ新抄勅格符抄ニ角院寺百戶天平十年施出雲五十戶播萬五十戶ト即此爾後記錄ニ所見ナシ慶長七年德川氏寺領一百石ヲ寄附ス

興福院 佐保村大字法蓮ニアリ阿彌陀佛ヲ本尊トナシ淨土宗智恩院末タリ本ト興福尼院ト稱シ添下郡菅原伏見ノ里ニアリシヲ寛文五年ココニ移シ建ツ事下文ニ詳カナリ其之レヲ尼院ト稱スルハ藤原百川ノ創始セル興福僧院ニ對スル號ナリ彼興福院已ハ添下郡

興福院村ニアリテ即チ當院ノ與院ト稱スル處ナリ

七大寺巡禮記曰興福院大和國平城右京五條三坊内添下郡 件寺者藤原百川大臣建立也金銅藥師如來三尊安之或記云寶龜元年光仁天皇御宇建立之……此寺在招提寺之西

而シテ當院草創ノ由來ハ寺傳ニ往古ハ添下郡伏見里ニアリ弘文院ト謂フ天平勝寶中和氣清麻呂ノ舊迹也長和中圓能法師今ノ本尊阿彌陀佛ヲ念持佛トナシ寺號ヲ以テ一村ノ名トス故ニ興福院トナス今ノ世ニコンブ院ト云フハ此謂ナリ伏見ノ里ハ今ノ尼ヶ辻ナリ則ニ尼ヶ辻ノ西ニ興福院村ト稱スルアリ此村ニ當院ノ興福院ト云フ舊跡アリト云フ就中和氣清麻呂ノ舊迹トスルハ何ニ據ルヲ知ラス疑クハ和氣氏ノ學校ヲ弘文院ト稱スルニ依リコンブキンノ俗訛ニ附會セルナラン圓能ノ事亦記錄ニ所見ナシ

要スルニ當院ハ興福院ノ尼房ナリシヲ以テ興福尼院ト稱スルモノナリ爾後ノ沿革詳カナラス寺傳ニ據ルニ天正年中筒井ノ族窪庄伊豆守ナルモノ堂舎ヲ再建セリト云フモ此事寛文寺社記八重櫻等ニ概見セス案スルニ寺社記ニ

興福尼院は其初秋篠氏の末葉なりしかおさなかりしより淨土を心さし自ら剃髮し春日御作の阿彌陀如來を中尊とし脇士に觀音勢至を安置し上品上生の臺に坐せんと誓ひ給ひし其次興秀尼も同氏たりしか天正年中大和亞相公より領知を寄附し給ひ其後年老果給ひ彼領知なともなかりしに元祖の弟子猶有て道心の聞え世に有りし故時に寛永年中征夷大將軍家光公は昔の領地を改め給ひ新地として下し賜る依之御佛殿を奉造し御位牌を安置して朝夕の勤行怠りなく時に寛文五年の秋征夷大將軍家綱公よ

り奈良の北の方の山腹に靈地を下し賜り、佛殿を建庵を造り、彌勤おこたりなし、境内は方一町有りしか同行の庵なと五六軒有りと見えたり。

トアリ、寺社記ハ添下郡尼ヶ辻ヨリ今ノ處ニ移シ建ツルノ翌年、即チ寛文六年ノ著書ナレハ當時面リ見聞セシ事實ヲ記シタルモノナリ、其信スヘキハ固ヨリ論ナケレト、此書ヨリ僅々十二年ノ後ニ成レル八重櫻ニハ、

興福院とて比丘尼寺有本の名は弘文院とかや申き、元祖興俊比丘尼は秋篠氏の女にておはしけるか世をはかなくやおほえけん比丘尼とならせられ、法花寺に住給ふ所に太閤豊臣秀吉公の御舍弟大和權大納言豊臣秀長卿光明皇后の御忌日に法花寺へ御参有りて此興俊を見給ひ即くして城中に御かへり有て一夜をき本寺へかへさる後一人の女子出来給ひしを養育し成人の後安藝の毛利家の室となし給ふとかや、さて其後興俊は二百石拜領し、一つの庵をしつらひ住年月を送り終に往生し給ふ、後二代目の興秀比丘尼千壽院を取り年月をおくられるか、次第々々年たけ果てたまふてよりさんさんあせはてけるを元祖の弟子に道心堅固の比丘尼有て其名を世にひつてしゆへ、寛永年中に征夷大將軍左大臣從一位源家光公よりそのいにしへの寺領をあらためられ、新地としてくたし給る、是によつて佛殿ごとく造立して御位牌等を安置し奉り、朝夕天下泰平の御祈りをなし、年月を送られける所に寛文五年の秋當 公方様々奈良の北の山はらを領地にくたされ、堅百六十間横三間の新道をも給ひしゆへ佛殿庵等をもあらたに再興せられけるとそ。

ト見ユ、當院ノ事跡記シ得テ詳カナリ、而シテ之ヲ寺社記ノ傳フル所ニ參考スルニ彼此少カ異同アリ、八重櫻ニ最初ノ比丘尼ヲ興俊ト云ヒ、秀長ニ幸セラレ一女子ヲ擧クルノ事ヲ記スルモ寺社記ニハ單ニ秋篠氏ノ末葉ト云ヒ、俗人ノ如ク記シ、且秀長ニ係ルコトヲ載セサルハ蓋比丘尼ノ破戒セシヲ嫌ヒ、故ラニコレヲ隱蔽セシモノナラン、秀長ノ興俊ヲ幸セルハ猶唐高宗ノ則天武氏ニ於ケルカコトク、當時其事ナシト言フヘカラス、況ンヤ秀長ノ政略トシテ封内ノ社寺領ヲ減削スルニモ拘ハラヌ、當院ニ限リ特ニ二百石ノ新地ヲ興フルニ於テヲヤ、必ラス其源因ノ伏在スルモノアリシナラン、他日徳川氏ノ厚ク當院ヲ遇セシモ、亦毛利家ニ於ケル關係ヲ有スルノ致ストコロカ、後考ヲ俟ツ、兎ニ角ニ八重櫻ハ事實ヲ直筆セルモノニシテ、寺社記ハ其面目ヲ憚リ記事ヲ斟酌セシト思ハル、宜ク八重櫻ヲ以テ正トナスヘシ。

正曆寺 五ヶ谷村大字菩提山菩提山ニアリ、善無畏將來ステフ藥師佛ヲ本尊トナス、正曆三年九條關白兼家ノ子兼俊大僧正ノ公家ニ奏請シテ創立スルトコロナリ、依テ正曆寺ト稱シ、其寺家ヲ報恩院ト曰フ、其盛時ニ當リテハ坊舎八十餘ヲ有シ、山邊郡東山中ニ於テ七莊ヲ領セシコト彼郡都祁水分社縁起ニ見エタリ、宜ク參考スヘシ、建保六年月輪禪定ノ子信圓大僧正塔堂ノ顛廢ヲ興復シ、更ニ別院ヲ起シ正願院ト稱シ、圓内二明ノ相宗ヲ傳フ、是ヲ中興ノ本願トナス、延慶中大僧正慈信寺領備中國金岡莊ヲ額安寺ニ寄進シ、其ノ伽藍ヲ再興セシコト彼寺ノ古文書ニ見ユ、康正元年伽藍火災ニ罹リ烏有ニ屬シ、文明八年之レヲ建立セシカ永正四年火災ニ遭ヒ、焦土トナリシモ幸ニ本佛ハ其難ヲ免レタリト云フ。

和州南都菩提山寺并舍利傳記曰吾伽藍權輿之時義遠哉張平子曰夫人在陽時則舒在陰時則慘此率乎天者也處沃土則逸處瘠土則勞此繫乎地者也寔相茲勝收在陽南而處沃土者也聞說一條院聖代之昔正曆第三載秋八月十有二日子夜之漏聲漸點寅之天霜髮一僧在寢御之枕頭奉告言丁此帝城之南離有菩提之山我來化雖由數期而創萬代人不知焉以不知故無一字也冀朝廷於此山關精舍而請致天下之安靜也斯處告止而其人不見祇異香滿紫宸闕中昭耀而如不辨夙夜帝即欣然心切也其翌十有三日早徵公卿有司等任聖夢之靈瑞令宜而立朝使左大辨藤原顯正急出洛而赴奈良古都猶子以到當山矣此時而曾不覩人跡雖有不便之感遂而於山阿巖窟底有物相僑窺之生身藥師如來儼然也又其間諸佛神鎮列矣又如來兩足際有一金函以玉篋也即抱詣京師獻天子々々大悅而開之則有三軸之書卷繙之則有過現未來之記文叡慮愈奇異而傾信嚮矣況復這醫王者龍樹菩薩之所造金銅之如來也元正天皇養老元歲次丁巳北天竺善無畏三藏與虛空藏共持而來朝矣也如云釋書無畏齋毗盧舍那經入我國時乏資稟藏和之久米寺而去後七十年遭靈感得此經也得之則高野大師也今吾尊亦送二百七十餘載此御宇而夢真儀不為奇哉爰法興院攝政殿下遺子兼俊僧正時得有驗之名忝承詔命而蚤開山而草創安如來而成得經營以為唯密真言之一家便以僧正之院曰報恩山曰菩提是則夢僧示于朝廷之謂也厥後文治之間被移因內二明之法文致相宗之經藏矣月輪禪定以為永大乘門室之所知也依之建保六年禪定賢息信圓大僧正顯廢之堂舍盡興復之功故為中興之本願更建別院曰正願是也嗚呼不圖康正元稔始羅畢方之災至文明第八冬十月偶遂堂宇供養之

化儀山僧雖開法喜之眉去永正卯歲重見回剩山裡有凶徒損自不借他手為之片瓦亦不殘掃地盡矣就中本尊一佛劫火亦不得燒滅僉感尊之無恙耳然則本尊之加被恰適於諸餘矣蓋各礎破堅囊推願穀耶仍勸進之趣大綱之文如件敬白

所謂菩提山傳記ハ永正燒失後ニ於ケル伽藍ノ再興ノ勸進狀ナリ慶長七年寺領三百石ヲ寄附セラル寛永六年正月本堂燒失セシモ亦本尊恙カナカリシト云フ此時再建ノ勸進狀ハ左ノ如シ

和州南都菩提山寺大衆等敬白

請特蒙十方縑素之助緣致本堂一字再興成海內之諸願狀

夫當寺者依正曆聖夢之靈瑞而法興院攝政殿下遺子兼俊僧正于時得有驗之名忝承詔命而開深山而構佛閣安如來而挑法燈酌小野之餘派而傳醍醐之上味為唯密真言之靈地者也厥後文治年中被移因內二明之法文仰相宗之奧義依之建保六年月輪禪定之賢息信圓大僧正顯廢之堂舍盡興復之功故為中興之本願爾來顯密二宗宛如車兩輪至于澆季之今勤行不退之道場也祈天下之安靜處不圖今年正月一日之曉天佛前之一燈帶大風吹起火焰本堂一時焦土矣憶是天災歟魔軍障歟嗚呼悲哉可憐片瓦不殘掃地盡矣雖然本尊一佛金銅藥師如來劫火亦不得燒滅僉感尊之無恙耳也此尊古來龍樹菩薩之所造善無畏三藏之御將來云良有以加旃黑谷法然上人之付弟蓮光藏佛牙於此堂是則不消滅光相嚴然希有哉可貴可貴依之衆僧等扣十門之檀門勸四衆之奉加各自持修造之斧宜飾遷座之牀聞說一塵積而為山一滴朝而為淵然則貴賤上下信心之施主不嫌一紙不耻半錢可有施入

者也若爾者現世享無比之樂來世免三途之報功德水之餘波遍及含識仍勸緣之趣大概如斯。

寬永六年己巳正月 日

大衆等敬白

元祿五年當寺ヨリ奈良奉行所ニ差出セシ明細帳原書ニハ社寺ニ改之帳ト題ス

眞言一宗

一御朱院寺領三百石和州添上郡菩提山正曆寺

一開基一條院勸願寺正曆年中之御草創開山者兼俊僧正法興院攝政殿下遺子也。

伽藍

一本堂 本尊藥師如來龍樹菩薩所作善無畏三藏之御將來

一灌頂堂 本尊大日如來

一地藏堂 千體佛

一如法經堂 每日三時不退御祈禱

一三重塔 本尊釋迦如來多寶佛

一鐘樓 一字

一施餓鬼堂 本尊阿彌陀如來

一寶藏 一字

神社

一鎮守一社 春日大明神

末社土公神善女龍王牛頭天王  
辨財天神伽井明神石荒神  
財天關八幡吉野權現熊野權現

一六所明神春日八幡權現善女龍王  
白山權現善女龍王

末社 新宮

一峯辨財天 一社

寺家

院家 報恩院

● 大福院

● 福壽院

● 金藏院

● 寶藏院

● 成身院

● 靈山院

● 經藏院

● 迎接院

● 多聞院

● 光幢院

● 蓮花院

● 拾玉院

● 興善院

● 西福院

● 德藏院

● 明王院

● 威德院

● 文珠院

● 西音院

● 珍藏院

● 西方院

● 知足院

● 普門院

● 妙觀院

● 釋迦院

● 橋之院

● 北之坊

● 松之坊

● 時之坊

● 寶光院

● 吉祥院

● 東遍照院

● 地藏院

● 彌勒院

● 佛光院

● 岸之坊

● 中之坊

● 藏之坊

● 杉本坊

● 岩之坊

● 前之坊

● 寶珠院

● 金剛院

● 前之院

● 竹林坊

● 梅之坊

● 下之坊

● 淨瑠璃院

● 藤之坊

● 谷之坊

● 角之院

● 轉經院

● 上之坊

● 三藏院

● 寶幢院

● 多樂院

● 金剛幢院

● 光蓮院

● 西遍照院

● 大門之坊

● 一心院

● 花藏院

● 實相院

● 東之坊

● 成就院

● 安樂院

● 浦之坊

● 椿之坊

● 奧之坊

● 南之坊

● 西之坊

● 滿藏院

添上郡

三七五



觀音院 小坂坊 新坊 持寶坊 十輪院 辻之坊  
 坂之坊 淨土坊 櫻之坊 東橋之坊  
 寺數合八十三株

右菩提山中古年久不知行仁罷成候處 大權現樣慶長七年壬寅之年御黑印頂戴寺領三百石被爲 下置候右之坊跡ニ寺領割付只今至無懈怠尤祈禱之寺役等相勸申候以上

元祿五年壬申六月二十一日

菩提山

年 預  
 沙汰 人

御奉行所

ト以テ當時ノ狀況ヲ見ルヘシ、但寺家八十三ハ全ク株數ヲ記セルモノニテ、元祿ノ頃ハ黒點ヲ付スル四十餘坊ノミナリ、而シテ報恩院一タヒ無住トナリシヨリ、京師仁和寺ノ塔中菩提院家ヨリ之ヲ兼帶セシヲ以テ彼ノ院ヲ本寺トナセシカ維新後、更ニ仁和寺ヲ本寺トナス、近年衰頽シ復タ舊觀ヲ存セス、  
 本稿既ニ成リ、將ニ淨書セントスルニ臨ミ、寺僧大原秀全一卷ノ記録ヲ袖ニシ來リ曰フ、此書ハ近時新ニ發見スル所ノモノナリ、幸ニ取ルヘキアラハ之ヲ收メヨト、受ケテ之ヲ展スルニ應永ノ縁起ト古文書ノ寫本ニシテ、共ニ本稿ノ闕ヲ補フニ足ルヘキモノナレハ左ニ

之ヲ掲載ス。

菩提山正曆寺原記

抑大和國添上郡菩提山龍華樹院正曆寺之相尋其濫觴人皇第六十六代一條院天皇永祚元年春三月二十三日始而南都春日社行幸座ス其夜當巽方放金光明有叡覽藤原道長卿從三位權中納言右衛門督ニテ供奉參向詔道長卿後御堂令見其所玉フ則道長卿奉勅而望巽維從而到其光所有山峻高深谷遠腰穿崖岸之形老檜垂枝古松布葉青苔滑巖峙而無樵跡益瑞光道長卿所誘感情凝眸怪而徐々登臨ス然ルニ兩個之獼猴爲山路之知邊分入レハ奇靈勝地嶺風月常住宿真如之影ヲ嶺嵐說實相山遠谷深豁カナル靈香薰雲仙樂響天無夢現爰忽然ト白髮老翁乘白鹿出現而告勅使曰吾ハ是レ春日ノ神也神護景雲法相ヲ護ラントシテ三笠山ニ遷リテ後常ニ此ニ往來シテ擁護ス此山者佛法清淨之靈地也此處ニ建精舍天皇歸依渴仰玉ハ玉體安穩群臣堅固汝藤氏之一門倍榮昌風雲順時蒼生康樂ナラン而ラハ則法燈永至于慈尊三會之曉無斷絕王道久與日月不朽德可增榮亦復往半腹可禮汝ハ俊傑ナリ、歸而奏セヨ、此旨言終而隱テ不給見道長卿仰靈感而尋其光、至處忽光明赫々トシテ清地水涌出湛々而涵瑠璃其池中ヨリ九頭龍之身ヲ現ハス勅使是方便示現之形全ク本地之眞身ニアラス、仰願ハ慈悲之玉體ヲ顯ハシ玉ヘトアリケレハ、龍形水底ニ入ケレハ忽チ池中ヨリ藥師龍樹菩薩出現アツテ降香華而光明連レテ山谷ノ土石之皆金色トハナレリ、殊勝銘膽道長卿感淚洗面歸命頂禮歸而奏玉フ其赴天氣不斜有叡感則兼俊大僧正詔ヲナン給ヒ資財ヲ賜ハリテ、良工ニ命シテ正曆元年大伽

藍造立着手正曆二辛卯歲全就正曆年度依テ爲御願寺與勅號ヲ下シ給フ則兼俊大僧正  
ヲ爲開基于時九條右大臣師輔公第九子從一位太政大臣爲光公正曆三年夏六月十六日  
薨去壽五十有一歲 一條院天皇甚惜玉ヒ封相模國諡恒德公其息男左近衛中將道信卿  
至孝哀毀過禮喪畢而不得除服乃泣涕而詠和歌以述其哀情

カキリアレハケフスキステツフジコロモ

ハテナキモノハナミタナリケリ

トアリテ道信卿正曆五年逝去道信卿ハ爲關白兼家公猶子兼家公ハ爲光公之舍兄ナリ  
就中 一條帝之國母ハ兼家公之御女ニテ兼家公祝髮法興院殿御歲六十二歲ニテ正曆元  
年七月二日薨去 天皇春日明神ノ託宣及兼家公道信卿之菩提追悼之叙慮深座而伽藍  
益莊嚴美麗ヲ加ヘ給フテ山號ヲ菩提山ト詔ヲ下シ賜ヘリ本尊ハ淨瑠璃藥師龍樹并脇  
侍日光月光十二神ヲ奉安置就中池中出现降香華有由緣將復入佛供養之刻紫雲變黷而  
本堂側櫟大樹藥師龍樹菩薩來臨光明赫々花降異香薰四方其奇瑞最モ著ク殊ニ龍華會  
日佛生 正當ナルヲ以テ則稱龍華樹院ト坊舍八十六坊僧衆六十口寺領資產二千貫文並下  
行錢一千八百貫文被寄之附受年々歲々寺納ス將復四至封疆不入守護使最モ山林竹木  
伐採殺生禁制之被宣下則春日明神ヲ勸請アツテ爲護法神ト給フ然後人皇七十四代  
鳥羽院帝保安三年夏五月 天皇御惱之刻醫藥不奏其効依之關白忠通公依奏上正曆寺  
ノ本尊藥師佛遷シ内裏ニ菩提山住侶參内藥師經讀誦上ノ御病痾即チ御平愈坐ス是全  
ク醫王像ノ佛瑞ナリ帝歡喜不淺伽藍創立ヨリ爾來既ニ一百三十年餘ノ經星霜故詔而

加修營玉ヲ如來ノ奇瑞依最新也康治元年秋八月三日九條忠通公當國室生山御參詣之  
刻菩提山ニ入御アツテ禮如來ヲ玉フ 二條天皇ハ九條兼實公ノ依言上御信仰之餘ニ  
忝モ御宸筆ノ勅額ヲ下賜リ八十代 高倉院馭宇治承四甲子年南都大衆 高倉宮二品  
以仁親王之御迎ニ參候ス平相國清盛苛リ之右官別當右衛門督親雅勸學院雜色二人瀬  
尾太郎兼康ヲ補大和國之檢非違使因茲大衆起而猿澤之池端ニ首ヲ斬懸ケタリ平相國  
益憤而興福東大兩寺三千五百餘騎之衆徒ヲ可亡トテ同年冬十二月二十八日頭中將中  
宮亮通盛之兩將其勢五萬餘人ノ軍兵ヲ率テ奈良北口ニ火ヲ懸ケ忽伽藍燒亡此刻正曆  
寺モ爲兵火炎上雖然不思議成哉本尊ハ出テ猛火ノ中ヲ遙峯飛去テ燒不給故佛德天ニ  
曜テ大衆星ノ如ク諸山ノ僧侶雲ノ如ク集會四方貴賤老若男女群參而本尊ヲ敬禮ス養  
和元年正月清盛ノタメニ寺領被沒收是前年平軍推寄之刻菩提山衆徒出勢南都ニナス  
之故也然而文治三年鎌倉右幕下更壹千貫文ノ寺產被相寄然後人皇八十四代 順德院  
帝馭宇建保六年九條殿始祖攝政關白太政大臣兼實公殿月輪息男南都興福寺別當職一乘  
院大乘院兩法務信圓大僧正經奏聞再建全就故ヲ以テ信圓大僧正ヲ菩提山正曆寺ノ中  
興爲開基ト大僧正御母者中納言國信卿ノ女ナリ曆代法相偷迦之大淨利則興福寺別院  
之爲靈場朝ニハ講法華夕ニハ誦最王經表都卒内宮開七々之精舍造營信圓大僧正者  
天兒屋根尊ヨリ第四十代依爲裔孫正曆寺中興後南都春日社ニ菩提山住侶交々一百日  
參籠讀經奉法施年々歲々無退轉爲恒例今尙然就中法性寺關白忠通公息男關白太政大  
臣基房公落飾後菩提山正曆寺ニ通世アツテ寛喜元年冬十二月二十八日薨去號ス菩提

院殿ト基房公御弟九條關白兼實公與御在世之刻御連枝相並ンテ左右大將タリ然後九條攝政關白洞院教實公第二息男大乘院尊信大僧正證誠攝政關白圓明寺實經公一家第六息男大乘院慈信大僧正之兩門主大乘院法務ニ而興福寺別當兼菩提山正曆寺別當職タリ正中元年冬十二月九條關白房實公依奏聞ニ從帥宮後醍醐菩提山住侶之内十口ニ權律師ノ官ヲ下賜ヒ天皇御宸筆ノ紺紙金泥法華經納之玉ヲ應永三年秋八月興福寺東大寺座論大衆雙方及鬪爭故ニ從正曆寺言上ス九條關白左大臣殿依御扱和談春日神木自上山城玉水遷座是全ク菩提山寺衆徒ノ効也菩提山正曆寺者法相三論ノ淨刹殊更一條院順德院兩帝御勅願ニ而代々天皇之繪旨院宣官符等不知其數復九條殿下ハ累世有御因緣其他三公九卿之請祈夫不違枚舉雖然別卷ニ謄書之部類一昨應永十四年十一月朔日爲山火寶庫之内灰燼歎息不少也法流相承而無退轉奉禱寶祚延長武將永久一天泰平四海靜穩五穀饒豐除災無疾之基ヲ靈區興福寺ノ別院其由緣蓋以如此萬世不朽紀誌所如件

維時 應永十六己丑龍集夏四月如意日

興福寺住侶總珠院傳燈大和尚位尊胤

(三條天皇繪旨)

被繪命 大和國菩提山正曆寺之事

先帝勅願殊法相大乘之法利也自今以降以彼寺永可爲御願寺之處被仰下畢彌以國家安

寧懇祈可抽丹誠之條繪言如斯

天氣執啓如件

長和壬子元歲正月廿一日

左大臣道長

奉

(鳥羽院帝勅宣)

興福寺別院菩提山正曆寺者 一條順德之二帝之勅願兼俊信圓兩僧正之虛應地歷代凝繪言之處也然伽藍經星霜及破壞今般佛閣再營之早勸諸國縉素奉加可令修造功仍錄所狀謹請 官裁者 宣奉 勅依請

保安三歲七月朔日

左中辨

奉

興福寺別院

(右大將賴朝卿教書)

大和國 菩提山正曆寺

右件寺領一千貫文地令寄附畢以彌國家安寧四海泰平之基可抽丹誠者 院宣如是悉々可領承之狀執達依如件

文治三丁未年五月二十一日

源朝臣在列

添上郡

三八一

(鎌倉殿制札)

與福寺之別院大和國菩提山寺往反之武士不可狼藉之狀依 仰執達如件

建保六年十二月二十二日

陸 奥 守

(順德院帝官符)

大和國添上郡

菩提山龍華樹院正曆寺

右件寺四至內殺生伐木禁制之處甲乙人並近鄉土民等亂入四至封疆殺生伐木之事被

官符向後令禁斷且亦不入守護使之處條者 天氣如是仍執達委知之

承久元年六月晦日

藏人右中辨藤原

奉

與福寺別當御房

(信貴山御籠城 二品護良親王令旨)

高氏直義以下凶徒追討之事所被成御教書畢馳參當城可抽粉骨於忠戰者恩賞可被成下

置候速令着到之條者 二品親王 台命如此悉々以狀

元弘三年六月

左衛門佐藤原

奉

菩提山寺衆徒中

(後醍醐天皇勅旨)

當御願祈事近日殊可抽懇祈於其寺四至之內停止甲乙人等亂入狼藉可專佛法紹隆者

天氣如是依而執達如件

建武二年十一月十五日

左 少 辨

奉

正曆寺住侶中

弘仁寺 五ヶ谷村大字虚空藏ニアリ、虚空藏菩薩ヲ本尊トナス、弘法大師ノ草創ニテ本ト東

大寺末タリ、東大寺要錄末寺曰虚空藏寺在大和國添上郡弘法大師之建立ト即此、東大寺古

文書ニ延喜十九年當寺都維那注進文原書今東大寺ニ亡シアリ、其文ニ曰ク

虚空藏之山寺

注進寶物并寺廻山六十町事

一間四面堂一字 皆金色虚空藏菩薩一體長八尺

如意一面 香爐一口 錫杖一枝 鉢二口 花瓶二口 磬一口 金鼓一口 鐘一口

幡四流

山六十町

四至

限東ハ四條九里十四坪 東子午畔ヲ 限南ハ少倉山 限西ハ願興寺東横道ヲ 限北ハ和爾川

添 上 郡

右件、寶物并山、四至依東大寺政所、仰注進、抑此伽藍者、弘法大師以大同二年、比於明星零落、地被建立、處无、止靈驗山、既瑞相之砌、大師結界地也、仍且爲後代注進如件

延喜十九年十一月十六日

維那法師覺如

トアリ、此レ東大寺政所ノ下知ニヨリ注進スル所ノ文書ナリ。寺傳ニ草創ノ年代ヲ弘仁五年ニ依ルモ其注進文ニ據レハ大同二年ニ草創セシナリ、願フニ大同弘仁相距ル遠カラサレハ大同二年ヲ以テ基ヲ開キ弘仁五年ニ成功セシニヨリテ弘仁寺ト號スルカ。境内ニ明星堂アリテ明星菩薩ヲ安ス、此レ明星零落ステフ處ニ就テ建立セルモノナラン。寺傳ニ足利ノ頃ハ寺祿二百五十石ヲ有セシモ元龜二年織田氏ニ沒收セラレ同三年松永ノ兵燹ニ罹リ伽藍燒亡セルヲ寛永六年僧宗全本堂ヲ再建ス即チ現在ノ堂宇ナリト、今ハ眞言宗金剛峯寺末タリ。

不退寺 佐保村大字法蓮寺ニアリ、觀音菩薩ヲ本尊トナシ十五大寺ノ其一ニ居ル、今西大寺末タリ。寺傳ニ平城帝大同四年祚ヲ嵯峨帝ニ讓リ平城ニ幸シ萱葺ノ殿ヲココニ造リテ徒御ス之ヲ萱御所ト稱ス、上皇ノ皇子阿保親王及ヒ其子在原業平相承テコレニ居ル、承和十四年業平詔ヲ奉シ舊宮ヲ以テ精舍トナシ自作ノ觀音ヲ安置シテ不退轉法輪寺ト稱スト云フ。

和州社記曰不退寺は在原業平朝臣の本願也其前は平安城にて嵯峨天皇に御位を譲り給ひ此所にかやの御所を造らせ移り給ふ崩御の後第三の皇子阿保親王住み給ふ女

后は桓武天皇第八の皇女伊豆内親王と申奉り業平朝臣の御父母なり……舊迹幽考曰不退轉法輪寺は濫觴さたかならず業平朝臣の建立にしてみつから觀自在井をつくりすへ給ふといひ傳ふる説あり……此地は平城天皇の住給ひし宮なりといひつたへたり然は平城天皇は大同四年平安城にて御位を春宮にゆつり給ひてならの都に遷幸のよし續日本後紀に見えたり此所なるへし。

眞如法親王佛事料を奏し給ひしかは勅許ありて不退超昇の兩寺に施入ありしよし三代實錄に見えり。

爾後沿革詳カナラス、慶長七年德川氏寺領五十石ヲ寄附セララル。

阿闍寺 舊迹幽考ニ法華寺の鳥居のたつみわつかにへた、りて田の中に松の一本ありし所そ阿闍寺の跡なり三語集當代はとりぬもなく松も見えずト記シテ彼光明皇后溫室ヲ造ラシメ千人ノ垢ヲ流シ給ヘル時阿闍佛癩人ト化身シ來リシ故事ヲ載セ以テ當寺ノ創始ナリトスルモ、案スルニ類聚國史ニ桓武天皇天應元年六月辛亥大納言正三位兼式部卿石上朝臣宅嗣薨云々宅嗣寶龜十一年轉大納言加正三位捨其舊宅以爲阿闍寺々内一隅特置外典之院名曰芸亭如有好學之徒欲就閱者恣聽之仍記條式以貽於後其略云……其院今見存焉臨薨遺教薄葬薨時年五十三時人悼之ト見ユ是レ其創始ナルヘシ又南都興善院町ニモ同名ノ寺アリ自ラ其由緒ヲ異ニセリ。

圓成寺 大柳生村大字忍辱山ニアリ、眞言宗阿彌陀佛ヲ本尊トナス。草創ニ異説アリ、一ハ寛辨僧正ト云ヒ一ハ唐土ノ虛漚和尚ト云ヒ或ハ聖武天皇ノ本願ト云フモ孰レカ是ナルヲ

知ラス。

和州寺社記曰忍辱山坊領二百三十五ヶ寺圓成寺は後白川院の御宇寛辨大僧正の開基し給ふ本堂の本尊は阿彌陀如來增長の御作なり其脇に二重の塔あり本尊は大日如來運慶の作也……山内は南北一里東西は十八町も有よし。

舊迹幽考曰もろこしの虚瀧和尚の開基なり當山智恩院の位牌帳にあり圖會曰當寺は聖武帝の御願にして本願は阿彌陀佛定朝の作也延喜の比益信和尚花洛よりこゝに移住し圓成寺と號しける文正の比兵火にかゝりことくけふりとなりしを榮弘阿闍梨再建せり

然リト雖モ後白河帝以前ノ記録ニ當寺ノコト所見ナケレハ寛辨開基ノ説是ニ近シ爾後

ノ沿革徴スヘカラス徳川氏ニ至リ寺領二百二十五石ヲ寄附セラル。

**白毫寺** 東市村大字白毫寺ニアリ阿彌陀佛ヲ本尊トナス往時岩淵千坊ノ一ナリシカ後チ

西大寺末タリ天智天皇ノ本願ニヨリ勤操僧正ノ開基スル所ト云ヒ其地藏堂ノ本佛ハ小

野篁ノ作ニシテ閻魔堂ノ閻魔ハ菅原道真朝臣ノ作ナリト傳フ。

白毫寺略縁起廣大和名曰高圓山白毫寺は天智天皇の御願本尊は阿彌陀如來春日の御

作なり閻魔堂の佛像は菅丞相の御作地藏菩薩は小野篁の作なり八重櫻之

七大寺巡禮記曰白毫寺件寺者在春日山之南方山本尊者阿彌陀又在炎魔堂此王者口傳

云北野天神御作云云件寺者石淵千坊之其一院内云云彼石淵者弘法大師之勤操僧正住

處也。

和州寺社記云白毫寺は天智天皇の御願勤操僧正の開基にて律宗也本堂の本尊はあみ  
た如來にて春日の御作なり。

爾後沿革詳カナラス寺傳ニ中世伽藍雷火ノ爲メ燒失セシヲ建長中西大寺ノ興正之ヲ再

興セシヨリ彼寺末トナレリト慶長年中ニ至リ徳川氏寺領五十石ヲ寄附セラル。

**帶解寺** 帶解村大字今市ニ在リ地藏菩薩ヲ本尊トナス世ニ帶解地藏ト稱ス草創ハ舊迹幽

考ニ

帶解寺の地藏尊は文徳天皇の皇后染殿ソノノノキヤ后御産平かならず醫陰兩道の妙術もかなはず

有驗の高僧秘法もしるしなし一夜后の御夢に和州添上郡に裙帶クニの地藏尊ありなどこ

れを念じ給はぬやと告たりさめて後御願丹心ニにありしかは皇子御誕生ましましきし

かありければ帶解寺と號して御建立あり。

ト見ユ染殿后ノコトハ人口ニ膾炙スル所ナレトモ正シキ記録ニハ曾テ見サル所ナレハ

疑クハ寺僧ノ講説ナラン南都藥師院氏所藏寺社拾要記第二ニ當寺ニ係ル一節アリ左ニ抄

出シテ參考ニ供ス曰ク

天明四年八月五日夜滯留於帶解寺也地藏院々主緣起一卷持參其趣ハ染殿后女御願

起春日大明神依神託御建立春日御自作有之本堂五間ト見エタリ本尊地藏彫色也

一當堂中興正保三年秀意上人建之。

一緣起奥書淨專教寺小比丘遠川トアリ。

一彼寺涅槃像一幅張傳主筆ト云也然ルニ令修補時軸ノ中ニ有書付與國三年南都法

橋俊專筆元是於宇陀井足庄内岩井寺出來其後標本梯本寺長享三年求之云云又享保十  
八年帶解寺ニ買求之今ハ岩井寺ハ無之井足村ニ岩手垣外ト云字アリト云院主演說也  
大安寺廢 已廢シ址大安寺村大字大安寺ニアリ初メ聖德太子道場ヲ平群ノ熊凝ニ起シ名

ツケテ熊凝精舎ト曰フ今ノ遺跡舒明帝之ヲ百濟河畔ニ遷シ其規模ヲ大ニス所謂百濟  
大寺是ナリ今百濟村ニ其舊蹟アリ天武帝更ニ之ヲ高市郡ニ移シ高市大寺或ハ大官大寺ト  
稱セリ規模ノ宏大ナリシハ今其趾ニ存スル礎石ノ絶大ナルニヨリ以テ推知スヘシ同郡  
小山ニアリ徑六尺餘柱口四尺五寸先年當時飛鳥川原ノ兩利ト共ニ三大寺ト稱セラル元明  
極原神宮造營ノ際コレヲ用ヒ今ハナク當時飛鳥川原ノ兩利ト共ニ三大寺ト稱セラル元明  
帝和銅中郡ヲ平城ニ遷スニ及ヒ當寺隨テ移リ左京六條三坊即今ノ地ニ伽藍ヲ造營シ更  
ニ大安寺ト名ツク言ロハ天下大平萬民安樂ノ義ナリト又東大西大兩寺ニ對シ南大寺ト  
モ稱シ平城七大寺ノ其一タリ創立ノ由緒及ヒ其封戸等ノ事流記資財帳七大寺巡禮記等  
ニ詳カナリ

大安寺伽藍緣起流記資財帳天平十九年勅奏曰初飛鳥岡基宮御宇天皇之未登極位號曰田村皇  
子是時小治田宮御宇太帝天皇帝ナリ古召田村皇子以遣飽波葦垣宮令問既戸皇子之病勅  
病狀如何思欲事在耶樂求事在耶復命蒙天皇之賴無樂思事唯臣伊ハ助熊凝村始在  
道場ノ始ハ立仰願奉爲於古御世々々御宇天皇將來御世々々御宇天皇此道場乎欲成大  
寺營造伏願此之一願恐朝廷讓獻止奏支天皇受賜已訖又問三箇日間田村皇子私參向飽  
波問御病狀於茲上宮皇太子命謂田村皇子曰愛哉善哉汝姪男自來問吾病矣爲吾思慶可  
奉財寶然財物易亡而不可永保但三寶之法不絶而可以永傳故以熊凝寺付汝宜承而永傳

三寶之法者田村皇子奉命大悅再拜白曰唯命受賜而奉爲遠祖並大王及繼治天下天皇御世  
々々不絶流傳此寺仍率將妻子以衣齋爨土營成而永與三寶皇祚無究自後時天皇臨崩之  
日召田村皇子遺詔皇孫朕病篤矣今汝登極位授奉寶位與上宮太子讓朕熊凝寺亦於汝毛  
授耶利此寺後世流傳勅支仍即天皇位十一年歲次己亥春二月於百濟川側子部社乎切排  
而院寺家建九重塔入賜三百戶封號曰百濟大寺此時社神口而失火燒破九重塔並金堂石  
鷗尾天皇時崩賜時勅太后尊久此寺如意造建此事爲事給耳爾時後岡基宮御宇天皇明帝  
造此寺司阿部倉橋麻呂穗積百足二人任賜以後天皇行幸筑紫朝倉宮將崩賜時甚痛憂  
勅久此寺授誰參來止先帝侍問賜者如何答申止憂賜爾時近江宮御宇天皇帝ナリ奏久開  
伊ハ開ハ天智帝御諱也髻墨刺肩負鏹腰刺斧奉爲奏支件天皇奏久妾毛我妹等炊女而奉造止奏支  
爾時手拍慶賜而崩賜之以後飛鳥淨御原宮御宇天皇帝ナリ武二年歲次癸酉十二月壬午  
朔戊戌造寺司小紫冠御野王小錦下紀朝臣訶多麻呂二人任賜自百濟地移高市郡始院寺  
家入賜七百戶封九百三十二町墾田地三十萬束論定出舉論六年歲次丁丑九月朔丙寅改  
高市大寺號大官大寺十三年天皇寢膳不安是時東宮草壁太子尊奉勅率親王諸王諸臣百  
官人等天下公民誓願賜久大寺營造近今三年天皇大御壽然則大御壽更三年大座支以後  
藤原宮御宇天皇帝ナリ統朝延爾寺主惠勢法師乎令鑄鐘爾後藤原朝廷御宇天皇帝ナリ武九  
重塔立金堂作建并丈六像敬奉造之次平城宮御宇天皇天平十六年歲次甲申六月十七日  
九百九十四町墾地入賜支  
三代實錄曰元慶四年冬十月大和國十市郡百濟川邊田一町七反百六十步高市郡夜部村

田十町七反六百三十步返入大安寺先是彼寺三綱申牒稱昔日聖德太子創建平群郡熊凝道場飛鳥岡本宮天皇遷建十市郡百濟川邊施入三百戶號曰百濟大寺子部大神在寺近側舍怨數燒堂塔天武天皇遷立高市郡村號曰高市大官寺施入七百戶和銅元年遷都平城聖武天皇降詔預律師道慈令遷造大安寺

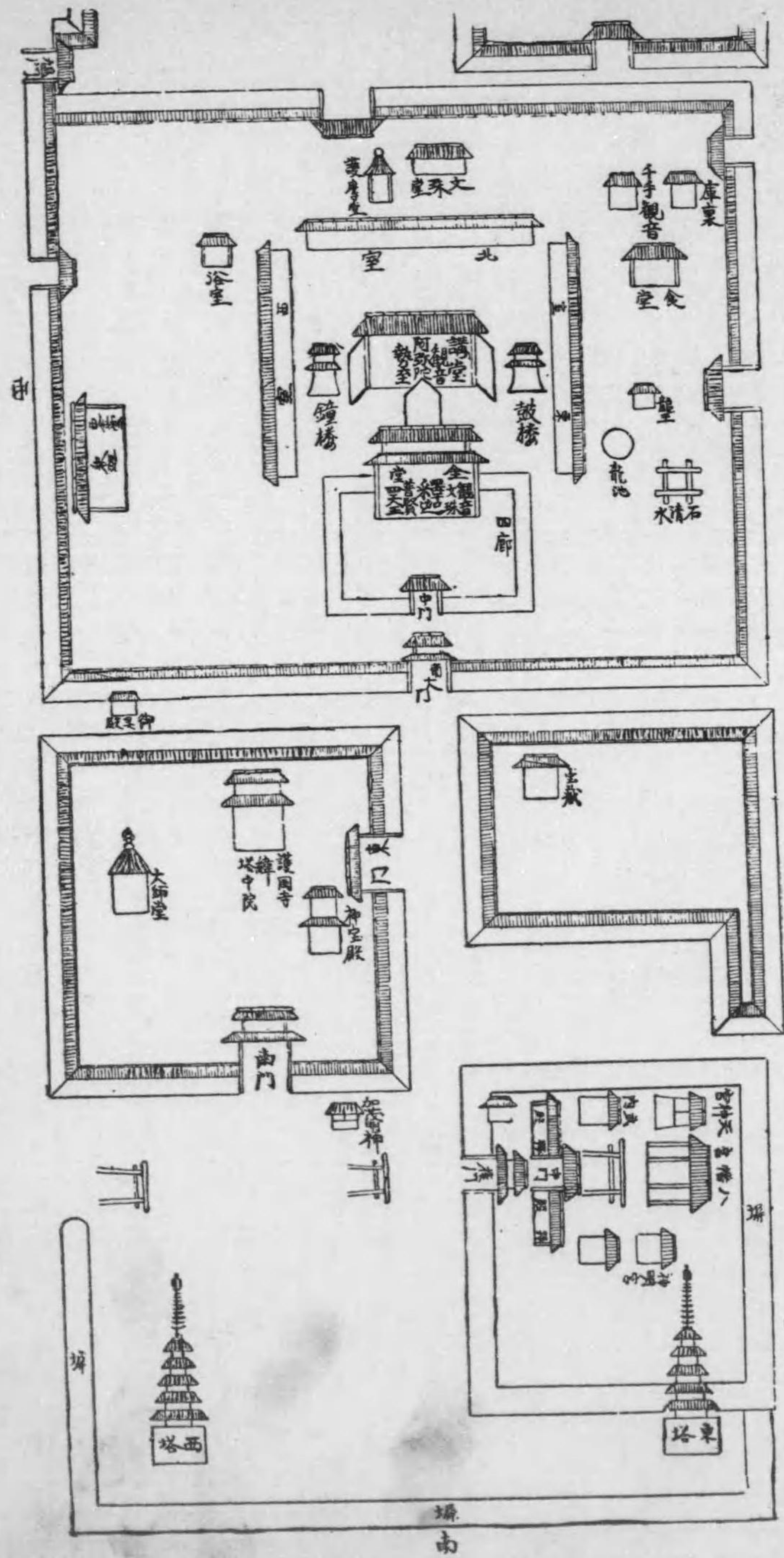
新抄勅格符抄曰大安寺千五百戶  
癸酉年施三百戶丙戌加施七百戶天平寶字五年正月加五百戶信濃五十戶武藏百戶下乃百戶丹波五十戶播磨五十戶備後五十戶

堂 塔

創立ノ規模ハ天平ノ流記資財帳ニ載スル所ヲ以テ概見スヘシ。大宮氏所藏ノ伽藍ノ古圖即チ第一圖ハ其盛時ノ規模ニシテ彼祇園精舎ニ式レルモノナルヘシ。廣大和名勝志ニ附録セル古圖即チ第二號ハコレヲ第一圖ニ比スルニ棟數稍々減スルモ亦寬仁以前ノ伽藍ナルヘシ。寬仁以後ノ規模ハ七大寺巡禮記ニ據リコレヲ徵スヘシ。曰ク。

大安寺 大和國平城左京六條三坊添上郡

金堂 五間四面天智天皇即位三年七月勅造百濟大寺天武天皇即位十一年移百濟大寺建大和國高市郡改名大官大寺元明天皇即位四年和銅大官大寺移立於平城京元正天皇即位二年靈龜以大唐西明寺圖造大安寺聖武天皇即位六年天平改造大官大寺於大和國添上郡左京六條三坊天平十七年十一月改大官大寺名大安寺天下大平萬民安樂之義也俗曰南大寺本尊丈六尺迦如來解文惠替主動之造云云……等身金銅藥師如來本佛之在左方件像者傳敎大師本尊也自行長和尚手相傳也大唐智者大師之本尊也





云云又云阿彌陀口傳在之等身木像千手觀音此像者弘法大師御佛云云……  
 件寺者上宮太子之御願也太子入滅後推古天皇相承而造始者在攝州熊凝村云云舒明  
 天皇百濟川邊遷立件寺改熊凝之名云百濟其後爲神火燒失皇極天皇又改造之天智天  
 皇御時造丈六尺迦像開眼供養……天武天皇移造高市地名云大官大寺……元明  
 天皇和銅三年又遷奈良京聖武天皇相承而造之高僧道慈爲求法大寶元年入唐養老二  
 年歸朝其時奏天皇而以大唐西明寺圖建之又天平元年以道慈爲律師云云口傳云中  
 竺舍衛國祇園精舍者兜率天摩尼寶殿造之大唐西明寺者祇園精舍建之日本大安寺者  
 西明寺造之云云後一條院寬仁年西塔并講堂食堂寶藏經藏鐘樓等凡二十餘院拂地燒  
 失但本佛并大師造之佛奉取出了今所拜見尺迦者非昔佛云云於昔佛者燒失乎。  
 講堂 五間四面本尊丈六阿彌陀三尊四天像高四尺許件像不可思議也但炎上以後無此  
 堂者本尊安金堂也。  
 東塔一基 七重本尊者勝曼夫人出家體也一比丘立天人後以左手押天人頂右手取利刀  
 安夫人頂上也像不可思議也堂中繪金岡筆跡也炎上以後無建立。  
 西塔一基  
 八幡社 件社者東塔之口、  
 三面僧坊、  
 文珠堂 件堂者在金堂北去二丁許也本尊文珠四天等在之四天者弘法大師以香造之、

大湯屋 件湯屋者金堂在戊方釜者弘法大師鑄之釜文者藥師十二神云云每月在湯不退轉者也

寶藏 件寶藏納寺家寶物在八幡大井弓矢尺迦如來石體婆羅門僧正持來佛舍利大唐天台大師袈裟同天台寶藏之八舌鑑等也于今人奉拜見之於袈裟鑑者依秘之不出之云

南大門 安金剛力士在額文號大安寺 西大門 在額文號百濟寺

東大門 在額文號大官大寺 北大門 在額文號南大寺各築垣之中心在、  
トアリ、寛仁中伽藍燒失後即チ治安三年七月ニ至リ再建ノ用材柱十六本淀ヨリ引キ檢非違使通貞等之ヲ督衛セシコト野府記ニ載スル大安寺杣司ノ解文ニ見エタリ、乃チ知ル七大寺巡禮記ニ記スル伽藍ハ治安再興ノ建物ナルヲ爾後後花園院ノ御宇震災ニ罹リ、堂塔僧坊多ク顛倒シ隨テ修理ヲ加ヘシモ、復タ舊觀ヲ見ル能ハサリシナラン、慶長中或僧當寺ニ詣テラレシニ、諸佛像二間四面ノ草室ニ委積セラレ、本尊片々ニ破損シ佛面ハ庭中ニ放棄セリト云フ、荒廢モ亦極レリト謂フヘシ、寛文ノ比盲人阿誰ナルモノ靈場ノ廢絶セシヲ歎キ、觀音像一軀ノ遺レルヲ修補シ、爲メニ二間四面ノ堂ヲ建テ之ヲ安置シ、以テ大安寺ノ遺跡ヲ存セシト云フ。

舊迹幽考曰人王百三代後花園院の御宇大地震に堂社僧坊あれ果ぬれば、修理の勸進あり勸進それよりおのつからに絶はて、けるとなり……慶長年中淨家の和尚大安寺にまうてられしに諸像二間四面の草室にかさねをき、本尊も分々にわかれ、佛面は庭の芝生のしきものとなせり、或和尚拾來て住簷にをかれしよし述作の書に見えたり。

廢亡をしらすわつか一ひかしにやなりけん寛文年中ナリ阿誰といふ盲人あり、靈跡の絶なをなけき、觀音の像一軀のこらせ修補しわつかに、二間四面の堂を建立して大安寺のしるしとなせり。

和州社記曰略上何比よりか衰微して諸佛の像も散々になりわつか二間四面の草庵にして往來旅人の休み所となり哀れなり。

眉間寺 佐保村大字法蓮ニアリ、和州社記ニ眉間寺寺領百石 天平勝寶八年丙申五月二日聖武天皇御年五十六年にして崩御したまひ、此所に葬り奉り、傍に寺を建て今に廟有二重の塔有本尊は地藏并靈寶には聖武御所持の舍利同受戒の持衣宸筆の宸勝王經有毎年五月二日東大寺の諸僧會合して法事あり、本堂のうしろの方に光明皇后の廟あり云云宗旨は戒律僧也ト見ユ、コレニ據レハ當寺ハ聖武帝崩御ノ後山陵ニ就テ伽藍ヲ創始セルナリ然レトモ佐保山眉間寺住持次考南都藥師ニ、院氏藏夫當山者人王四十五代勝寶感神聖武皇帝御本願御母公爲大皇太后藤原宮ノ宮ハ氏誤寫天 平勝寶六甲午年御建立靈場也。

開山行潛僧都

東大寺緣起曰當山建立者勝寶六年七月八日也眺望寺今云眉間寺

村上天皇御宇天德二年四月二日眉間之舍利出現奏聞之稱眉間寺賜勅額

中興本願行明上人

寶永記曰長祿年中歎當寺退轉拂荆棘曳舊土却松柏自運土勸十方檀那助緣文正中迄

十ヶ年而堂塔房舍成就

トアルニ據レハ、天平勝寶六年七月八日聖武帝其大皇太后藤原氏ノタメニ草創スル所ニシテ本ト眺望寺ト稱セシヲ、後チ天德二年四月本佛ノ眉間ヨリ舍利出現ステフ傳説ニヨリ眉間寺ト號セシナリ、宜クコレヲ以テ正トナスヘシ。但平城坊目遺考ニ東大寺要錄撰葺中見ナケラハコ 寺今廢ス

谷森種采云什物等出して見せらるゝに、先ツ聖武天皇の御影いとふるく殊勝なる繪にて、鏡臺に八稜鏡をかけて打むかひ給へる御像なり、絹いたく損ねよくせずは粉にもなりぬへし、四聖の圖として大掛ものあり、四聖とは聖武天皇婆羅門僧正行基良辨とならへて畫きたるなり、上に色紙四枚を押して四句の文をかけり、其文は文章博士菅原朝臣長衡の作文にて書は東南院二品尊鎮法親王かき給ひ、畫は美濃法橋觀盛のかきたるなりとそ聖武天皇講式一卷奥書に此本願講式爲眉間寺常住物申入東南院二品法親王之間忝所被御筆也更不可出寺外者也康曆元年歲次己未五月二日佛子賴慶とあり伏見院筆の往生講私記いな書一卷奥書に德治三年二月二十一日書之とあり、御書いとうるはしト此等ノ什寶今何人ノ手ニ入りシヤ其所在詳カナラス。

石淵寺

舊迹幽考ニ高圓山の東に此寺の跡あり俗に石淵といふト見ユ、此ノ寺ノ事跡ハ八重櫻ニ開山は弘法大師の御師匠贈僧正勤操にておはします、そもこの僧正と申は三論の名德にて獨虚の觀を心の内につゝみ……世に明星の化身といへり、此寺もとは千坊有て數々靈像おほかりしが、次第〳〵に零落し今はくさむらはかりなり、此所より白毫寺鹿野

苑といふ所へ行くトアリ之レニ據レハ勤操俗姓秦氏大和國高市郡ノ人ノ開基ニシテ其盛時ニ當リテハ一千ノ堂坊ヲ有セシナリ、然ルニ何レノ頃ニヤ在リケン、天地院ト恨ヲ結ヒ兵ヲ起シ共ニ燒失ノ後再興ナカリシト云フ。

舊迹幽考曰廢亡は古老傳へていふ、天地院に見あり岩淵寺の僧なにのゆへにやありけむ、兒をやいはにかけてその身も若艸山の西の麓にしてをなまくらにそうせける、此事天地院の法師等遺恨やすからず、或はやなくいをおひ、或は三尺をよこたへて、三笠山の東の山道をへて岩淵寺にをしよせんとす、石淵寺にはかくと聞てさらは逆よせにせんといつ、此法師等は西の大路をへてよせける程に、兩陣道をたかひて人もなき寺にたかひによせたり、関をつくり火をはなちて兩寺おなし時にそけふりとなるそれより兩寺はなかく絶にけり、天地院の跡は東大寺のうしとら若艸山のひかしにあり、かの兒法師も若艸山の西のふもとに塚につきけるか、おろ〳〵火の出てたゝかふことありければ俗に逢火の塚とそ申。

一説ニ當寺ト相亡ヒシハ天地院ニアラス伴寺ナリト、其説ニ云フ古書其書名ヲ逸セリ蓋大宮氏藏天地院緣起若あり、是を考ふるに天喜元年は今を距ること八百六十年前にして岩淵寺の僧より燒きたるにあらす、兩寺の滅亡は伴寺永隆寺と岩淵寺となり、此伴寺を幽考に天地院と誤りしならんトアルモ、天地院天喜元年ノ燒失ハ勿論岩淵寺ノ爲メニアラス、且再興ノ有無緣起文ニ所見ナケレハ果シテ此ノ時廢亡セルモノト斷言スヘカラス、況ンヤ東大寺要錄天喜後

ニ現ニ天地院ヲ載スルヲヤ、天喜燒亡後之ヲ再興シタルコト甚明カナリ、而シテ其伴寺ト當寺ト相攻ムルノコトハ何ノ書ニ記スルヤ未タ嘗テ所見ナシ、故ニ今幽考ニ傳フル所ニ從フ。址白毫寺ノ東南十五町許ノ處ニアリ、ガラソト字スト云フ。

**葛木寺** 一ニ妙安寺ト稱ス、聖德太子建立七伽藍ノ一ニシテ、本ト葛上郡朝妻ニアリ、故ニ葛木寺ト字ス、寶龜中ノ童謠ニ所謂葛城寺即此。

上宮法王帝說曰太子起七寺四天王寺法隆寺中宮寺橘寺蜂丘寺池後寺葛木寺

太子傳曆曰葛木寺又妙安寺

天王寺障子傳曰上宮太子造立寺塔八所 妙安寺世人名爲葛木尼寺

大和志曰葛木寺在葛上郡朝妻村寶龜中童謠云云即此

和銅中都ヲ平城ニ遷スニ及ヒ當寺亦隨ヒ移ル、日本靈異記ニ聖武天皇ノ御事ヲ記スル條ニ勅信ヲ云フ、使夜行於京中其半夜之時諾樂京葛木尼寺、前南、墓原有哭泣聲、ト見ユルハ即チ當寺ヲ謂フ、寶龜十一年雷火ニテ金堂及塔燒失ス。

續日本紀曰寶龜十一年正月庚辰大雷災於京中諸寺其新藥師西塔、葛木寺塔并金堂皆燒盡

爾後再興ノ事記錄ニ所見ナキモ新抄勅格符抄ニ葛木寺五十戶天平寶字七年施播磨五十戶トアレハ大同ノ頃尙盛ナル伽藍ナリシヲ見ルヘシ、已廢ス址詳カナラス。

坊目遺考ニ葛木寺址ハ木辻村西南京終領耕田中にあり、新元興寺中門堂懸板記錄曰奉寄進水田事

合二段者 字葛木所當二石十一合五夕升

歲末百五十文

在左京五條壹里廿六坪内

四至限東限南限領地限西限際限北村領

右寄進狀如件

德治三年戊申三月十八日

尼妙法在判

これを考に葛城寺地は五條に係るもの歟トアリ、是ニ近シ、但同考ニ豐浦寺葛木寺ヲ以テ本元興寺鳥寺ノ別名トスルハ大ニ誤レリ、說彼寺ノ下ニ述フ。

**伴寺** 川上ノ上方ニアリ、東大寺要錄末寺ニ永隆寺字伴寺右寺大伴安麻呂大納言之建立也飯高天皇代養老二年奈良坂、東阿古屋谷立永隆寺同五年辛酉三月二十三日奈良坂、東谷般

若山之佐保河東山改遷立之、寺已廢ス。

**普光寺** 東大寺要錄末寺曰普光寺又廣右寺在大和國添上郡奉爲平城後太上天皇以天平勝寶五年八月二十日正二位廣岡夫人公所建立也、以天平寶字四年三月六日入定額寺ト已廢

址詳カナラス。□□村大字廣岡ニアリシナルヘシ。

**大宅寺** 七大寺巡禮記ニ大宅寺號難波皇子寺伴寺者難波皇子建立寺也、云々堂塔少々相殘今在之者也ト已廢ス、志ニ廢大宅寺在白毫寺村西トアルモ址詳カナラス、大宅ハ本ト地名ナリ、大宅郷已廢ノ後チ大宅寺郷ヲ存スルハ當寺ニ因メルノミ、事既ニ大宅郷ノ下ニ述フ。

派上郡

三九七

願興寺 東大寺要錄末寺ニ願興寺右和銅元年歲次戊申奉爲天武天皇御腦除愈小野中納言爲忠建願興寺字山口寺在大和國添上郡上津和邇ト已廢シ址詳カナラス延喜十九年ノ古文書ニ虛空藏山寺ノ四至ヲ記シテ限ハ西願興寺東横道トアレハ今ノ和邇ノ東山口ノ地ニアリシナルヘシ

八島寺 志ニ八島寺八島村又名山階寺元亨釋書曰延曆二十五年山階地建八島寺勅天下分州租入別倉運納八島寺每歲置度者一人薦崇道天皇也弘仁五年八月大和國八島寺有嘉禾一莖十八穗延喜式八島寺料一萬束即此ト山陵廻リ日記ニハ八島村……崇道天皇の社の西旁に八島寺とよふ小庵あれとも古の八島寺の跡は藤原村の田の字に大門堂ノ前なといふ名残りたるわたりなりとぞト見ユ藤原亦古へ八島郷内ナレハ山陵廻リ日記ノ説是ニ近シ

香山堂 天平勝寶八年東大寺古圖ヲ案スルニ春日山頂上巽方即チ能登川水源ノ上方ニ香山堂ヲ載セタリ草創ノ事記録ニ所見ナシ

服寺 行基先妣ノ爲メニ喪中ニ之ヲ造ル故ニ服寺ト名ケタリト云フ已廢ス案スルニ康正二年神殿庄算田帳ニ間田奈良百姓分……一反 福寺ノ明春房ト見ユ當時尙存在セシカ將タ廢絶シテ在家ノ名トナリシカ詳カナラス今奈良町ニ福寺池アリ是其址

神野寺廢 春日山本宮嵩ノ南高嶺ニアリ舍人親王ノ女某先考ノタメ創始スル所ト云フ已廢ス

八重櫻曰本宮山又は本宮か嶽ともいへり此南に高嶺といふ有一名を高嶽ともいふ此内に神野社一の宮二の宮三の宮等ありいづれも東向なり此三ツの宮よりはるか南へゆきて神野寺のあと有石塔など少々残れり是は仁皇四十代の帝天武天皇の御皇子一品舍人親王天平七年霜月乙丑日行年六十にして薨し玉ひしを……御姫君父の御わかれを悲みたまひ翠の髪をそり落し柴の庵をむすび神野寺と號し年久しくおはしまし臨終正念に往生とけさせられしところなり

和州十五郡衆徒國民郷士記曰添上郡古市家清原氏舍人親王末孫也舍人廂所ハ春日山ノ内高峯山ニ有リ……

圖會曰高嶽本宮嶽の南にあり寛文記云三ツ宮あり舍人親王の姫君此所にて出家し神野寺と號し住し給ひし其遺跡なり

四恩院廢 春日野ノ野田ノ東口ニアリ興福寺ノ一院タリ草創詳カナラス其十三層ノ塔婆ハ白河法皇ノ建立スル所ニシテ文明十一年燒失シ同十七年コレヲ再興ス

元要記曰十三重塔婆白河院御建立也春日五社垂跡奉安置云云  
異本合運圖曰文明十一己亥年十一月二十二日十三重塔并院内悉燒馬借沙汰云々同十七乙巳年四月十一日十三重塔柱立云云  
明和燒失後再興ナシ

大慈山寺

大柳生村大慈山ニアリ、興廢詳カナラス。東大寺見性院文書引志所ニ依本寺衆徒之教命、任例甲兵二騎發向於延曆寺之事、承知之狀如件、建保二年六月十日、大慈山寺、里本寺年預御房ト見ユレハ本ト東大寺末タリ。

成身院

一ニ中川寺ト稱ス、東里村大字中川ニ在リ、故ニ名ツク、愛染明王ヲ本尊トナス、忍辱山ノ僧實範藤原顯實ノ子供花ヲ竟メントシテ、中川山ニ入り其勝地ヲ見官家ニ請ヒ、精舎ヲ建立シテ成身院ト名クト、事元亨釋書ニ見ユ、爾後沿革詳カナラス、東大寺雜集錄ニ、

一 中川寺成身院本寺也法相眞言天台

彌勒院、清淨院、地藏院、瓦坊、東北院、佛眼院、十輪院、藥師院、三藏坊

西念寺 大念佛宗

一 藥師十二神在之藥師者木津鹿背山西念寺ニ在之由藥師佛足裏ニ中川山ト書付在之

由村老申傳云

一 中山寺緣起一卷在之

一 正五九月荒神供料 五升

一 三石餘地方 成身院

右者地頭ノ寄附也

鐘 銘

成身院鐘大治四年四月七日鑄造匠多治比賴友也唯願以此善根修功法俗聞聲人畜乃至群生共成佛道矣既經三十六年破損仍長寛二年歲次甲申七月二日乙酉有緣合力以尊智

上人鑄直之

トアリ、已廢ス、但鐘ハ有名ノ物ニシテ銘文ハ既ニ集古十種金石榻本考ニ收メラル。

城 壘

多聞山城 奈良坂ノ西ニアリ、三好氏ノ臣松永久秀ノ築ク所ナリ、周圍七丁餘高サ八間アリ  
 シト云フ。久秀威ヲ負ミ筒井ヲ滅シ大和ヲ平吞セントスルノ志アリ、天文二十年筒井順昭  
 卒シ主幼ナク國疑フ、久秀コレヲ奇貨トシ以テ其志ヲ遂ケント欲シ管テ大和河内ノ堺信  
 貴山ニ城キ國內ノ豪族ヲ麾下トナシ、之レヲ守ラシメ永祿十年東大寺ノ衆徒ト謀リ更ニ  
 城ヲ佐保山ニ築キ是レヲ多聞山城ト名ケ信貴城ト倚角ノ勢ヲ張リ却テ主家ヲ凌クノ志  
 アリ、三好氏之ヲ惡ミ十年十月細川某ヲシテ志貴城ヲ綴セシメ別ニ兵ヲ分チ南都ニ入り  
 大佛殿ニ屯シ將ニ當城ヲ陷レントス、松永之レヲ聞キ夜半襲撃シ大ニ之レヲ敗ル、大佛殿  
 ノ燒失ハ實ニ此役ニアリ、松永新勝ノ勢ニ乘シ筒井ヲ攻メント欲シ十二年三月麾下古市  
 菅田、高山、岡及ヒ東大寺ノ僧兵ヲ以テ當城ヲ守リ山僧社祝等ヲ以テ信貴城ヲ守ラシメ自  
 ラ諸將ヲ率ヒ筒井ト並松ニ會戰シ大ニ之ヲ敗リ順慶ヲシテ僅カニ身ヲ以テ免レ宇陀ニ  
 棲マシメタリ、元龜二年七月松永井戸國秋ヲ辰市ニ攻ムルヤ順慶爲メニ兵ヲ出シ終ニ之  
 レカ爲メニ敗ラル、是時ニ當リ織田氏兵ヲ西シ先ツ京師ニ入り天下ニ號令セントスルノ  
 志アリ、乃チ佐久間明智ノ二將ヲシテ筒井松永ノ和ヲ成サシム、後松永織田氏ニ叛クニ及  
 ヒ信長其子信忠ヲシテ細川明智ノ二將ヲ督シ順慶ヲ鄉導トシテ之ヲ討セシム、天正五年  
 十月出テ、法隆寺ニ陣ス、松永ノ麾下海老名等片岡城ヲ守ル、順慶攻メテ之ヲ屠リ進ンテ  
 信貴山城ヲ陷レ遂ニ當城ニ及ヘリ、是ニ於テ松永氏亡フ、信長山岡景隆美作ヲシテ當城ニ

在番セシム、十二月信長命シテ城ヲ壞チ其地ヲ順慶ニ與フ、後チ順慶之ヲ北小路城主飯田  
 直宗ニ與フ、直宗拓キテ農田トナス、俗ニ飯田開ト字スル地即此ナリト云フ。郷土記、大和軍

北小路城

奈良ノ北小路ニアリ、飯田氏コレニ據ル、氏ハ清和源氏ニシテ世々コ、ニ住ス、頼  
 直ハ出羽守ト稱シ直基入道シテ春ノ子ナリ、松永久秀筒井ヲ滅シ大和ヲ平吞セントスル  
 ヤ順慶昭聘ヲ飯田父子ニ通シ好ヲ修メ其二女ヲ頼直ニ妻ハシ姻戚タラシメ以テ松永ノ  
 勢威ヲ殺ク、時ニ天文十三年正月ナリ、爾來飯田氏筒井ノ麾下ニ屬シ功勞ヲ累ネ二萬石ヲ  
 領ス、天正五年九月卒ス、長子直宗次郎嗣ク、天正十三年筒井氏伊賀ニ移サレ豊臣秀長代リ  
 テ大和ヲ領スルニ及ヒ直宗弟能直新八ヲ招致シ幕下タラシメントス、兄弟二人義トシテ  
 肯ンセス、秀長怒リ北小路城ヲ攻メントス、大和ノ諸士交々救解シ事遂ニ止ム、是ニ於テ直  
 宗城地ヲ致シ身ハ角振集社邊ニ隱遁シ後チ剃髮シテ宗恩ト號シ風月ヲ以テ自遣ル、同年  
 四月病ンテ死ス、年三十九、弟能直ハ興福寺德藏院ニ牢居シ後亦病死セリ、飯田氏ノ正統コ  
 コニ亡フ、秀長井上定利通稱源吾、南都奉行ニ命シ城地ヲ夷ケシム、其舊址内侍原ノ西北ニアリテ俗  
 ニ飯田殿辻子ト字スト云フ。大和諸將軍

郷土記曰飯田出羽守頼直清和源氏正流父ハ直基入道春宗、南都北小路ニ住、同甚次郎基次故有ニ  
 十月信貴ニテ亡フ、同春覺入道、同勘十郎入道行心、同三郎次郎直宗基次カ嫡也、同新八郎  
 能直、飯田家旗紋ハ四半ニ古文字、麾下高間氏三千石、内侍原氏二千五百石、北市二千  
 五百石、上田氏千五百石、石井氏五百石、合一萬石都合二萬石

添 上 郡

順慶葬式目錄曰飯田新八郎能直南都

中坊氏宅址 奈良町ニアリ坊屋敷ト稱スル地是其址ナリト云フ坊目考ニ坊屋敷町……  
 當所ハ中坊左近秀行舊宅也慶長十八年癸丑五月十一日子息中坊飛彈守左近將監秀政南  
 都奉行職に命せらる因茲守護の廳舎を造營す時人稱して中坊屋敷ト號す後ち中の字を  
 略して竟に坊屋敷といふ正徳享保の比迄奈良の俗刺史館を中坊といひしとなり是中坊  
 父子南都に住居相續長久なるかゆへなりト即チ此中坊秀國ハ奈良町ニ住シ一萬千五百  
 石ヲ領シ麾下ニ超昇寺大輪田常福寺秋篠二條法華寺ノ諸士アリ子秀行簡井定次ニ從ヒ  
 伊賀ニ赴キ其家老トナル嬖臣桃谷河村等ト權ヲ爭ヒ志ヲ得ス去テ駿河ニ走リ定次ノ失  
 德ヲ訴フ簡井氏國除カルニ及ヒ更ニ德川家康ニ仕ヘ吉野郡ニ於テ三千五百石ヲ賜ハ  
 リ從五位下飛驒守ニ敍セラレ後伏見ニ於テ刺客ノ爲メニ命ヲ隕ス子秀政衛門左近ト稱  
 シ父ノ敍爵ヲ襲フ慶長十八年五月南都奉行ニ任セラル在職十九年ニシテ子時祐衛長兵  
 職ヲ繼キ美作守ト稱ス寛文四年卒ス正徳享保ノ際南都奉行ニ中坊美作守秀廣千石ナル  
 モノアリ蓋時祐ノ孫ナラン郷士記大和諸將軍傳南都奉行譜等ニ據ル  
 辰市城 辰市ニアリ井戸氏コレニ據ル郷士記ニ辰市平城井戸若狹守ト即此氏ハ一ニ井上  
 ヲ稱シ本姓大神ニシテ大物主神ノ苗裔ナリ後チ簡井氏ト連姻スルニ及ヒ簡井流藤原氏  
 ヲ冒ス尋尊僧正長祿四年正月十一日一記ニ井上若狹公參神妙旨仰之トアルヲ御兵士引付ニ  
 衆徒國民等給分之事……井上分羽津里庄下司九條庄御米……右年貢諸公事等無其沙  
 汰一向如私領致知行……ト見エテ其下章ニ郡使相催方……井上狹若

安公……トアレハ當時井上玄安ナルモノ南都大乘院領羽津里庄城上等ノ下司職トナ  
 リ遂ニ武威ヲ負ミ土地ヲ押領シツ、アリシナリ後チ井戸藤辰アリ藤辰以後ニ係ルコト  
 郷士記ニ載ス曰ク

辰市家又井上、梅、花、大物主、神之胤  
 ○簡井諸記曰井戸氏ノ領村并城地ハ式下郡結崎井戸村當村ニ井戸ノ井添上郡辰市杏  
竹林ノ内ニアリ  
 村トモ西三條村トモ云兩村ニ在之同斷山邊郡田部別所村平尾山同斷添上郡森本村  
 井作右衛門居之  
 又曰式下郡結崎村御高貳千貳百貳拾七石餘此内結崎井戸村ト云フアリ井戸氏先祖  
 ノ地也井戸左近住村慶長ノ比

井戸藤辰  
 ○慶長高付帳簡井諸記所引曰八拾九石貳斗餘文錄改高吉野郡井戸藤辰入道  
 大和郷士記同上曰井戸氏吉野郡井戸村八十九石二斗餘、井戸兵衛先祖井上ニ作ル大物主神苗裔也  
 井藤々虎 井戸藤賀  
 ○簡井諸記曰簡井氏一家衆辰市井戸家紋梅井戸藤虎春日社石燈籠銘ニ享祿二年井戸藤  
賀同云天正二年十一月十一日丹後庄藤賀  
 井戸春辰 井戸春政  
 ○同日井戸春辰永祿五年井戸春政郡山城主辰巳氏宮内春政トモアリ  
 井戸十郎大夫



○諸將軍傳曰和州添上郡辰市城主知行三千石後チ良庵ト號ス麾下三橋稗田高田等口  
千石 筒井諸記曰井戸十郎大夫國秋後號良庵氏

井戸若狹守

○順慶葬式目錄天正十三年十月記ニ井戸若狹守山邊郡  
筒井諸記曰井戸若狹守良弘慶長十七年正月七日逝去添上郡大

良弘慶長十七年正月五日尊靈 井戸雄安

井戸左馬介 井戸三十郎當家三 井戸新右衛門二千石 井戸新介

同惣珠院長光坊

○同記ニハ南都興福寺惣持院甚光房ニ作ル

同金體寺行譽

○同記曰正運社行譽光公上人寛文三年卯三月遷化南都十輪院南側淨土宗金體寺ノ中又曰

南都十輪院町金體寺行譽光公上人寛文三年卯三月遷化行年七十歲也

井戸十大夫甲府ニテ家老中村四郎兵衛・森岡内匠・松岡宗林・松澤理兵衛

見ユ將タ所謂森本ノ村井氏ノコトハ筒井諸記ニ

井戸氏族 村井作右衛門和州添上郡森本村井氏子孫子今存在仕候

ト見ユ其家老中村氏ハ郡山御領分御明細帳筒井諸記所引御代官御役所附帳ニ

文祿御役高

一 山邊郡磯上村七百拾八石五斗貳升

元和九年已後 藤堂様御領分

初代 中村源介

法名西阿 天文三年四月卒

二代 同 刀禰

法名西遠 慶長元年四月卒

三代 同 藤四郎

法名西念 慶長八年八月卒

四代 井戸若狹守内 中村四郎兵衛

法名西念 子孫子今相續仕居候

トアル即チ是ナリ子孫今尙存セリ。

(筒井諸記曰)

山邊郡田部別所村

井戸氏城地



御宗印三石五斗七升

添上郡光明寺

御宗印

井戸良弘墓アリ

大光明寺ヨリ田部別所村迄南江二十五町ト云フ

筒井眞法印ノ墓

井戸氏良弘

井戸若狹守雄安

慶長十七年正月五日逝去

五輪塔位牌大光明寺ニアリ

添上郡

横田壘 治道村大字横田ニアリ横田氏コレニ據ル郷士記ニ横田平城横田治部ト即此氏ハ

本姓物部ニシテ天孫降臨ノ時隨從セシ二十五部ノ其一ナル横田物部ノ苗裔ナリト云フ

國民郷士記曰横田治部天孫降臨二十部横田物部横田隼人久勝

同異本曰松倉一族横田喜右衛門横田治部横田物部横田隼人久勝

後チ筒井氏ノ子某蓋順興ノ子ナルヘシ入テ横田ノ家ヲ繼クニ及ヒ藤原氏ヲ冒シ松倉ト稱シ遂ニ

其臣下ニ屬シ森島ノ二氏ト共ニ筒井ノ三老ト稱セラル同家ノ略系ハ筒井諸記ニ見ユ曰

和州筒井流藤原姓世横田家ト云元ト島山家臣ト云フハ誤也

父筒井氏某 母横田物部姓也

松倉彌七郎藤原政秀

室ハ阿州島山氏ノ族小野方綱ノ女

和州添上郡 横田領主

松倉權左衛門秀政 横田領主

松倉右近丞勝重 宇智郡二見領主

女下部姓藤原治部少輔ノ二男 松村仁左衛門直豐ノ妻

女森縫殿佐好高ノ妻

松倉豐後守重政 元和元年肥前島原城主

初名孫七郎トモ九市郎トモアリ

○郷士記曰政秀筒井三老ノ内元ハ一族知行七千石順昭ニ仕フ

○同日權左衛門天正十四年三月

○同日勝重ハ政秀ノ長子ニ定次ニ從ヒ伊州ヘ引越名張城代トナル則チ彼地ニ病死ス生年六十歳隱下五條左馬助二見雅樂河原城大學石上采女布留織部筑紫市ノ本合三千石餘

○同日重政ハ勝重ノ長子始メ九耶市ニ後伊州ヲ去テ宇智郡二見ニ住シ又說慶長十三名張ヲ去テ和州五條ニ五千石ヲ賜ヒ大阪一亂ニ功有テ肥前島原ニテ六萬石ヲ給リ慶長和州高付帳曰七百五十一石一斗六升二合

女五條大納言殿御簾中

松倉十左衛門重宗 和州二見下ノ村居住

法名西庵宗浦居士

女久世九右衛門妻

松倉長門守勝房

肥前島原城主六萬石領之 寛永十四年吉利支丹一揆起ルニ付切腹

添上郡横田村當村中ニ元和已前城地并圓證寺跡礎ニ相分リ不申候

但近年十ヶ年以前大念佛宗ニテ當村惣寺筒井山順興寺ト名付候壹ヶ院御座候過去帳其外古

キ物無御座候 當村徳右衛門家地之内蔵林御座候其中ニ五輪塔大小五ツ

天文

殘リニ基不詳

松藏頼秀

西道禪定門

琳光尼

山村壘 帶解村ノ山村ニアリ郷士記ニ山村平城山村新入ト即チ此新入ハ用明帝ノ皇孫山

村王ノ苗裔ナリ

郷士記曰山村新入久米ノ王子窪轉經院宗恩山村氏

按スルニ續日本紀ニ神護景雲元年十一月參議從三位治部卿兼左兵衛督大和守山村王

薨池邊双槻宮御宇橘豐日天皇々々子久米王之後也ト見ユ山村王ノ子孫コ、ニ住シ因テ

山村氏ヲ負ヘルナルヘシ降ツテ足利ノ季世ニ山村氏大乘院領大宅寺庄ノ下司タリ是

レ新入ノ先人ニシテ即チ亦山村王ノ子孫ナルヘキモ事跡ヲ詳カニセス

尋尊僧正記曰長寛四年正月二十七日大宅寺御米并秋季夫賃二年分一向無沙汰之由昨

二見村 松倉豐後守

○郷士記曰二男重左衛門重宗名張ニテ二千石 慶長和州高付帳曰二百九十九石五斗四升六合

下ノ村 松倉彌七郎

添上郡椿尾山ノ圖

元龜元年築之  
筒井順慶公城山  
字櫻欄山

東西三十丁餘  
南北二十八丁餘

當山高御年貢

三十五石餘村高ノ内ニ

籠ル

井ノ廻リ八間餘

御座候



筒井椿尾氏岩山石塔法  
名之内

覺順房 宗 祐

行口房 道 祐

道 清 天正十四

道 清

世俗ニ當城主ノ石塔ト云  
フ文字相分不申候事

右之外文字相分リ兼  
申候也法名之數凡二  
十二三御座候

古老ノ傳ニ云

當城ノ破城ハ九月十三日

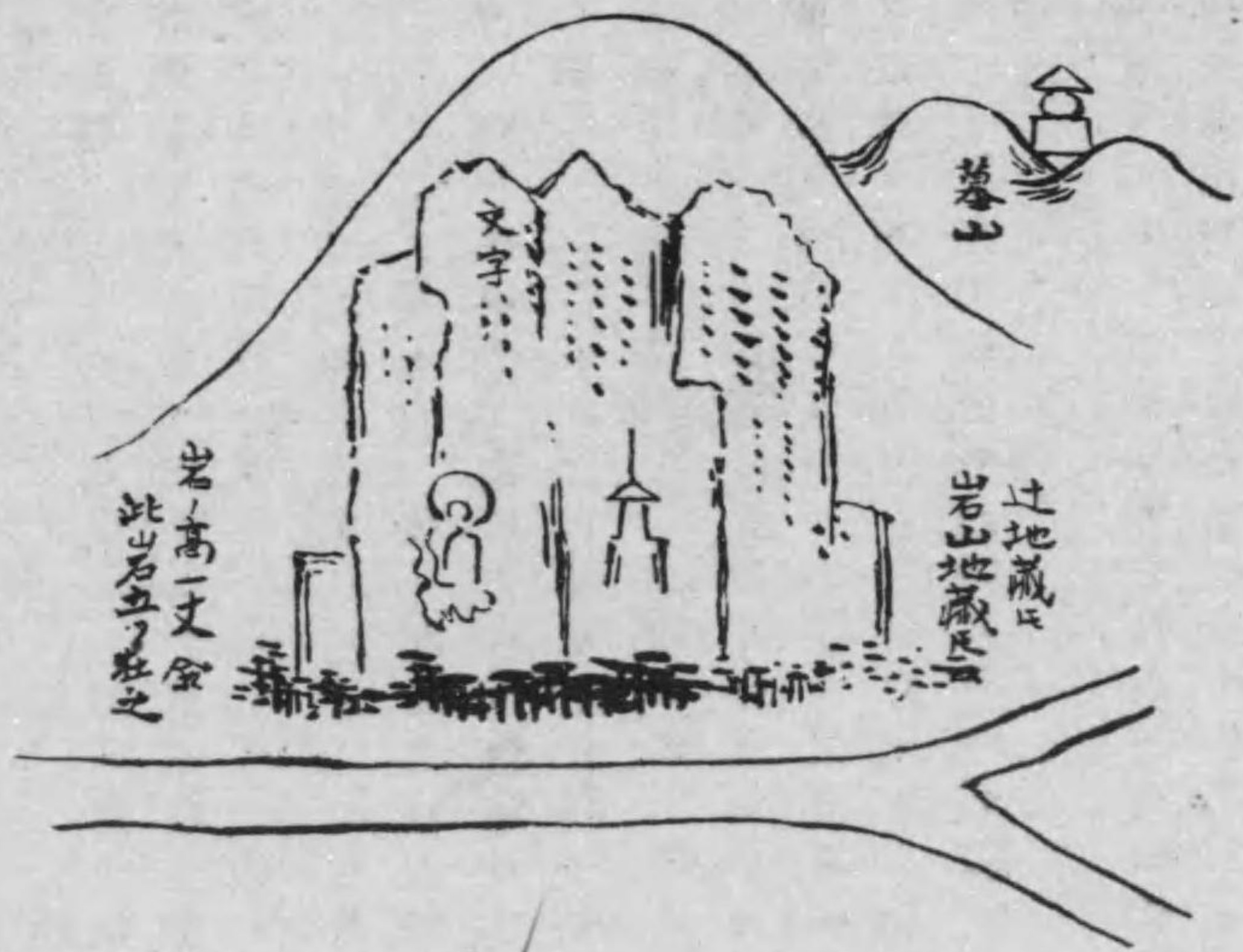
ト云フ年代ハ不知候

當村中ニ往古書物無御

座候ニ付委敷儀相分リ

不申候事

戊二月三日  
筒井七郎



日以使日請申入候召定

之了……寛正六年十

月十九日大宅寺春季夫

賃五百文山村昨日沙汰

御兵士引付曰古市山村分

大宅寺下司并別給分米

山村料惣下司

大乘院領段錢日記享徳二年曰

大宅寺庄 下司山村給主

古市

窪庄クボ 帶解村大字窪ノ庄

ニアリ窪庄氏コレニ據ル

郷士記ニ窪庄平城窪庄道

久ト即此

令市イノイチ 帶解村大字今市ニ

アリ今市氏之ニ據ル郷士

記ニ今市平城今市四郎左

衛門又云今市家紋ハ梅今

市掃部亮同四郎右衛門同肥前同市右衛門同興福寺法輪院專初坊同久四郎同久右衛門同與力神田主殿内匠、秋田源兵衛、池田是レナリ。

米谷壘 五ヶ谷村大字米谷ニアリ、米谷氏コレニ據ル、郷士記ニ米谷山城、米谷大郎入道宗慶又曰フ米谷宗慶、米谷肥前守、米谷重兵衛、米谷作藏、米谷彦右衛門ト見ユ。

椿尾壘 五ヶ谷村大字北椿尾ノ櫻欄山ニアリ、志ニ櫻欄城在北椿尾村、筒井順慶保之トアル、即此、然ルニ郷士記ニハ椿尾山城、椿尾道家トアリテ椿尾氏ノ據ル所トナセリ、思フニ氏ハ筒井家ノ一族ニシテ管テ之ニ築キシヲ後チ順慶之レヲ保チシコトモアリシニヤ、後考ヲ待ツ、筒井諸記ニ本壘ニ係ル圖說アリ、前掲ノ圖ヲ參照セヨ。

古市城 東市村大字古市ニアリ、古市氏之ニ據ル、郷士記ニ古市山城、古市播磨守ト即此、氏ハ本姓清原ニシテ舍人親王ノ苗裔ナリ、世々古市ニ居リ因テ氏トス、藥師院文安三年二月十日記ニ古市ト彌勒院ト合戰トアリ、彌勒院ハ筒井光宣永壽坊ナリ、御兵士引付ニ衆徒國民等給分之事、古市分 福島市下司以下悉皆 高田庄之内、切田十八石、河口ノ内本莊料藤澤名半分 坪江ノ内、狭川法用ノ内六十貫トアレハ是レヨリ先キ古市氏ハ大乘院領福島市等ノ下司職ニ補セラレシナリ、畠山義就ノ大和ニ走ルヤ、幕府殊ニ教書ヲ古市ニ下シ、政長ヲ援ケシム、

尋尊僧正記曰、文正元年九月一日、御奉書當國面々、江被成候、畠山政長書狀相副之、畠山左衛門佐事、近日出張和州、越智邊之趣、方々注進到來之上者、任先年之治、罰可發向候、早合力、政長軍勢可被抽忠節之由、所被仰下也、仍執達如件。

文正元年八月二十八日

肥前守判  
散位判

古市 殿

文正元年八月二十八日

以テ其勢力ヲ想知スヘシ、然レトモ其世系記録ニ所見ナシ、胤信以後ハ郷士記ニ古市家原清氏舍人親王ノ末孫也、舍人廣所ハ春日山ノ内高峰、本ニハ高山ニ作ル、有古市安房守胤信、古市播磨守澄胤、古市安房守胤繼、古市播磨守胤重、同民部少輔胤慶、天文十年、古市九郎兵衛、同丹後守、同彦三郎、古市七郎左衛門、同五左衛門、同左近胤重、同西之坊、三井寺ノ圓満院坊官、同西光院、松永ニ組シ、天正五、改易信貴ノ城、亡滅、後山籠ス。同主計佐胤宣、同興福寺發志院善性房法印、同新發意院胤慶、直宗、同家老、正左衛門、國波彌九郎、中彌兵衛、花房外記、山本孫九郎、苑田喜太郎、吉岡仁兵衛、邑知源内。ト見エ、後チ松永ニ屬シ共ニ滅亡スト云フ。

藤原壘 東市村大字藤原ニアリ、藤原氏コレニ據ル、郷士記ニ藤原平城藤原道順ト即此、筒井諸記ニ廣瀬郡箸尾之族、箸尾氏、藤原道順藤原村ト、之レニ據レハ本ト箸尾氏ノ支族ニシテ

横井壘 同村大字横井ニアリ、別所氏之ニ據ル、郷士記ニ横井平城別所道三ト即此。

鹿野園壘 同村大字鹿野園ニアリ、園波氏コレニ據ル、郷士記ニ鹿野園平城園波彌九郎ト即此、氏ハ古市家ノ麾下ナリ。

狭川壘 狭川村ノ狭川ニアリ、狭川氏之レニ據ル、郷士記ニ狭川山城、狭川甲斐又曰フ狭川甲斐守、永祿二年、狭川新介、狭川新左衛門元祿年中、狭川兵助ト是ナリ。

添上郡

須川壘 東里村ノ須川山ニアリ、同記ニ須川辰巳之助須川山ニ須川兵庫ト見ユ。

水間壘 東山村ノ水間ニアリ、天正ノ頃水間氏コレニ據ル。氏ハ物部伊葛弗連ノ苗裔ナリト云フ、郷士記ニ水間山城水間民部又曰ク水間民部少輔水間文兵衛水間太兵衛宇摩志間ヨ

別所壘 同村ノ別所ニアリ、別所氏コレニ據ル。氏ハ山田家ノ與力ニシテ、子孫吉見氏ヲ稱スト云フ、郷士記ニ別所平城別所監物又曰ク、別所宮内少輔別所兵部少輔別所清右衛門、開書

覺書ニ別所村ハ水間別所殿ト云別所ト云人有ヨシ其子孫清右衛門ト云繪書明曆萬治ノ比ノ人也今ハ吉見氏ト云フト見ユ。

若槻壘 平和村ノ若槻ニアリ、郷士記ニ若槻平城若槻讚岐守トアリ。美濃ノ庄壘 同村ノ美濃庄ニアリ、同記ニ美濃庄平城美濃庄喜内トアリ。

大安寺壘 大安寺村大字大安寺ニアリ、向井氏コレニ據ル。同記ニ大安寺平城向井左門又曰ク向井信濃、向井左門、向井治郎兵衛、向井十郎兵衛、向井源左衛門ト即此。

八條壘 大安寺村ノ八條ニアリ、西氏コレニ據ル。同記ニ八條平城西嘉右衛門ト見ユ。樸本壘 樸本村ノ樸本ニアリ、菊田氏コレニ據ル。郷士記ニ樸本平城菊田掃部又曰ク菊田藤

倉庄壘 同村ノ倉庄ニアリ、中山氏コレニ據ル。同記ニ倉庄山城、中山賀藤治ト見ユ。長井壘 明治村ノ長井ニアリ、長井氏コレニ據ル。氏ハ桓武帝ノ苗裔ニシテ筒井家ニ屬ス、同

記ニ長井平城長井伊豆守又曰ク長井伊豆守桓武天皇十六代孫同西殿、同順胤、同但馬守胤

高樋壘 五ヶ谷村大字高樋ニアリ、高樋氏コレニ據ル。郷士記ニ高樋山城高樋薩摩ト見ユ、氏

其出ツル所ヲ詳ニセス、或ハ云フ高向氏ニシテ、武内宿禰ノ子蘇我石川ノ苗裔ナリト云フ。大和國名鑑舊軌圖法隆寺曰高樋薩摩城跡、建内ノ子蘇我石川ノ子孫高向氏也。

世々コ、ニ居リ豪族ト稱シ、子孫連綿寶曆中ニ至リ斷絶セシト云フ、筒井諸記ニ、  
一和州添上郡高樋村 五百十九石三斗三升高樋入道何某同軍平同庄兵衛右高樋氏寶曆  
仕候ト即此。

舊蹟

春日率川宮 開化帝ノ皇居ナリ、廣大和名勝志ニ趾跡考云平城、俗大概謂率川子守神社爲皇居、不然於御陵者在率川坂本、寺內禁闕之舊址者當野田村春日里也、凡稱春日率川之古地、阡陌考之東當野田三笠山下、西高天町坂岡坂本南北大路山之上、與福寺三條大路、北東大寺前二條大路是春日野續春日率川地也、開化皇居本朝上古而公私未備華美、雖皇都爲萬物質、就中佛法未入吾國、無與福東大元興等之伽藍及春日神社等三笠山下已西春日野渺々然而四圍平原誠可爲究竟之帝都乎……ト見エ、宮址ノ封域概知スヘシ、然レトモ年代ノ久キ地形變遷シ、今之レヲ認ムヘキ處ナシ。

平城宮 神武帝中州ヲ平定シ、大鼎ヲ樞原ニ奠メ給ヒシヨリ、歷朝ノ遷徙一ナラスト雖トモ、帝都多ク當國ニアリ、當時宮室ノ制今得テ考フヘカラス、要スルニ樞原宮ノ制ニ倣ヒ、地ヲ掘リ柱ヲ立テ葛繩ヲ以テ棟梁ヲ結ヒ、葺クニ茨茅ヲ用ヒ、千木ヲ以テ之ヲ縮メシモノナラシ、質朴ノ狀以テ想フヘシ、宜ナリ、遷都ノ頻繁斯クノ如クニシテ、人民絶テ怨嗟ノ聲ナキコト、然リト雖トモ、雄略帝ノ時木工闕難御田ナルモノ始メテ樓閣ヲ起スト云ヘハ、當時宮室ノ構造ニ幾分ノ改善ヲ加ヘラレシナラン、況ンヤ帝嘗テ野ヲ變シテ文トナサントスルノ志ヲ抱キ、數々使テ海外ニ遣リ以テ其ノ技藝ヲ求メシニ於テヲヤ、佛法ノ東漸スルヤ、美術ハ其莊嚴ニ發達シ、七堂伽藍ハ輪奐トシテ魯般ノ技ヲ累ネ、既ニ人目ヲ眩射シツ、アリ、李唐ノ交通ニヨリ彼ノ長ヲ取り、我カ短ヲ補ヒ以テ舊來ノ面目ヲ改メシハ、既ニ已ニ首卷ニ

述フルカ如シ、是時ニ當リ車服器玩ノ制モ亦往日ノ如クナラサルニ獨リ萬乘ノ威嚴ヲ示スヘキ宮室ノミ舊株ヲ墨守スルノ理アラシヤ、其之ヲ改メ以テ規模ヲ大ニスルハ、必然ノ勢ナリトス、見ルヘシ、舒明帝ノ時既ニ太極殿ノ設ケアリシヲ、大化ノ改新ニ京坊ヲ分チ、之レカ令長ヲ置キ畿甸ノ封疆ヲ定メ、更ニ博士高向玄理僧旻ニ命シテ八省百官ヲ制セシム、玄理等久ク唐朝ニ留學シ、彼憲章ニ精通スルモノナレハ、其制度ハ勿論彼レニ倣ヒシナリ、故ニ阿部内麻呂ノ薨スルヤ、帝爲メニ朱雀門ニ幸シ哀ヲ擧ケ玉ヘリ、朱雀門ノ名稱ハ即チ彼レヨリ取レルモノナリ、齊明帝ノ時高麗ノ使者熊皮一枚ヲ齎ラシ其價ヲ稱リ綿六十斤ヲ以テ沽却セントス、市司咲テ避ケ去ルト案スルニ大寶令ニ東西市正ハ兼テ沽價ヲ知ルト、以テ其職制ノ由來スル所已ニ久キヲ知ルヘシ、依是觀之京城宮室ノ改制ハ三韓ノ交通ヨリ始マリ、大化ノ改新ニ成レルモノトスルモ亦大過ナカルヘシ。

持統帝高市郡藤原ニ都ス、是ヲ藤原宮ト號ス、文武元明ノ二朝コレニ依ル、元明帝和銅三年都ヲ平城ニ遷ス、是ヲ平城宮ト號ス、九條ノ大路ヲ通シ之ヲ左右ノ二京ニ分チ規模頗ル大ナリ、續日本紀ニ、

和銅元年二月戊寅詔曰遷都之事必未遑也、中略、方今平城之地、四禽叶圖、三山作鎮、龜筮並從、宜建都邑……九月戊寅巡幸平城觀其地形、乙酉至春日離宮、十月庚寅遣宮內卿正四位下犬上王奉幣帛于伊勢大神宮以告營平城宮之狀也、乙丑遷菅原地民九十餘家給布穀、二年八月八日辛亥車駕幸平城宮、九月車駕巡撫新京百姓、十月癸巳勅造平城宮司若彼墳壠見發掘者隨即埋斂勿使露弃、普加祭將以慰幽魂、十二月丁亥車駕幸平城宮、三年正月壬

子朔御大極殿ニアリ藤原宮三月辛酉始遷都于平城以左大臣正二位石上朝臣麻呂爲留守五年十二月己酉東西二京始置史生各二員

ト見ユ之ニ據レハ遷都ハ和銅元年ニ計畫シ三年三月ヲ以テコレニ遷御セラレシナリ其京城ノ建物ハ同書ニ

靈龜元年正月甲申朔天皇御大極殿受朝、其儀朱雀門左右陳列鼓吹騎兵二年正月戊寅朔廢朝雨也宴五位以上於朝堂養老五年九月乙卯天皇御內安殿遣使供幣帛於伊勢大神宮十二月己卯太上天皇崩于平城宮中安殿七年正月丙子天皇御中宮神龜二年十一月己丑天皇御大安殿受冬至賀辭

ト見エ朝集堂ハ後チ招提寺ノ講堂トナリ元亨羅城門ノ址ハ添下郡ニ存シテラセイト字セリ平安ノ大内裏ハ本ト平城ノ規模ニ率由セシモノニシテ坊保條里ノ分割大概コレニ異ルトコロナシ以テ其規模ノ宏大ナルヲ推知スヘシ然ルニ延曆七年都ヲ山城ノ長岡ニ遷セシヨリ平城古京トナリ漸次荒廢シ道路拓カレテ田畝ニ變シ終ニ以テ今日ノ形勢トナレリ

三代實錄曰貞觀六年十一月七日庚寅先是大和國言平城舊京其東添上郡西添下郡和銅三年遷自古京都於平城於是兩郡自爲郡邑延曆七年遷都長岡其後七十七年都城道路變爲田畝

蓋平城ノ京ハ添上添下二郡ニ跨リ西部ハ右京ニシテ即チ西京ナリ東部ハ左京ニシテ東京ト稱ス延曆以後荒墟ニ屬シ復タ舊觀ノ見ルヘキナキモ三條五條六條七條八條九條京

終ハ町村名ニ存シ大宮大極殿内裏及ヒ朱雀羅城等ノ小字モ其間ニ殘レリ讀者子細ニ平城ノ宮址ヲ知ラント欲セハ北浦定政ノ平城宮大内裏敷地坪割細圖ヲ見ヨ

春日離宮カスガノミナト續日本紀ニ和銅元年九月戊寅巡幸平城觀其地形乙酉至春日離宮ト即此其創始ヲ詳ニセス光仁帝ノ御父施基皇子嘗テコニ居ル因テ春日宮御天皇ト追號セラル宮址分明ナラス案スルニ萬葉集ニ靈龜三年九月施基皇子ノ薨シ玉ヘル時或人ノ奉

リシ歌ヲ載セテ

あつさ弓 手にとりもちて丈夫の ともや手はさみたちむかふ

高圓山に春野やき 野火と見るまてもゆる火を

いかにと問へは玉鉾の 道くる人のなくなみた

ト見ユ高圓山ハ東市村大字白毫寺ニアリテ俗ニ白毫寺山ト稱スルモノニシテ所謂大宅春日ノ地ナリ山南ノ尾岬ニ尾上宮ノ舊跡アリト云フ

舊迹幽考曰高圓山……此山に白毫寺あり燒春日といふ所あり南の尾さきに鹿野園寺ありそのうへの岡を尾上の宮のふる跡といふとかや

尾上宮ハ高圓離宮ニシテ即チ春日離宮ナルヘシ萬葉集ニ天平寶字二年二月依興各思高圓離宮處作歌

高圓の尾の上の宮はあれぬとも たしき君のみなわすれめや

其他古歌ニ高圓の尾上宮ト連詠セシモノ甚多シ、而シテ古ヘ春日ト稱スル地ハ頗ル廣ク高圓山及ヒ大宅等ニ互レリ、故ニ高圓尾上離宮ヲ春日離宮トモ稱シ、或ハ單ニ春日宮トモ稱セシナラン、一隅抄ニ施基皇子宮地稱春日宮、白毫寺村宅春日之地ト以テ證スヘシ。

佐保殿 拾芥抄ニ佐保殿淡海公家又冬嗣大臣家ト見ユ、藤原不比等ノ第宅ナリ、往時春日祭ノ上卿社參ノ途當殿ニテ饗儀アリシコト、江家次第ニ見エタリ、春日ノ文書ニ奉去 佐保殿役事 合二段字柳原 在山邊郡南郷十三條四里十一坪南邊 右於此地者件課役勤仕事自往古其例無之仍向後彌舊例不可有其役者也仍爲後日之沙汰勸子細之狀如件 文永八年二月日信立 花押トアリ、山邊郡南郷ニ於ケル佐保殿ノ領地ハ今朝和村ノ佐保庄ナルヘシ、殿已廢シ址詳カナラス、或說ニ法蓮ノ佐保田ナルヘシト云フ、果シテ然ラハ佐保田ハ佐保殿ノ轉訛ナランカ後考ヲ俟ツ。

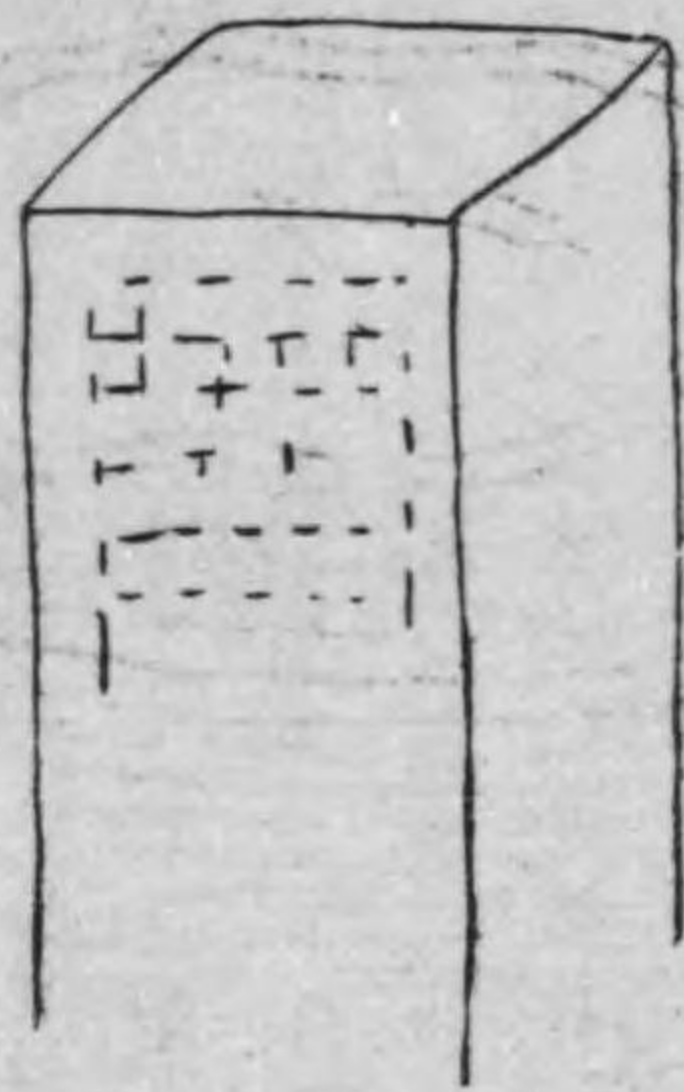
### 陵 墓

奈保山東陵 元明帝ノ山陵ナリ、奈良町大字奈良坂ノ西、雅良峯ノ東南ニアリ、碑石アリ、高三尺許、廣二尺一寸餘、厚一尺五寸、練石ヲ以テ造ル、俗ニ函石ト稱ス、銘ニ曰フ、

大倭國添上郡平城之宮、取字八洲、太上天皇之陵、是其所也。

養老五年歲次辛酉、冬十二月癸酉朔十三日己酉葬。建碑ノ由來續日本紀ニ載ス、就テ見ルヘシ、中世山陵荒圯シ、碑石ヲ奈良坂村奈良豆比古社ノ側ニ遷シ立テ、其形ノ似タルヲ以テ函石ト稱セリ、今ハ兆域ニ復立セリ。

山陵廻日記曰、奈良坂村春日社の北傍に箱石とよふ石立てり、その石のさま方にして、箱に似たれば、さはよふなりけり、其石の高地上より三尺許、廣さ二尺一寸五分、厚さ一尺四寸六分あり、石の面に彫れる文字ありとは見ゆれと、石の



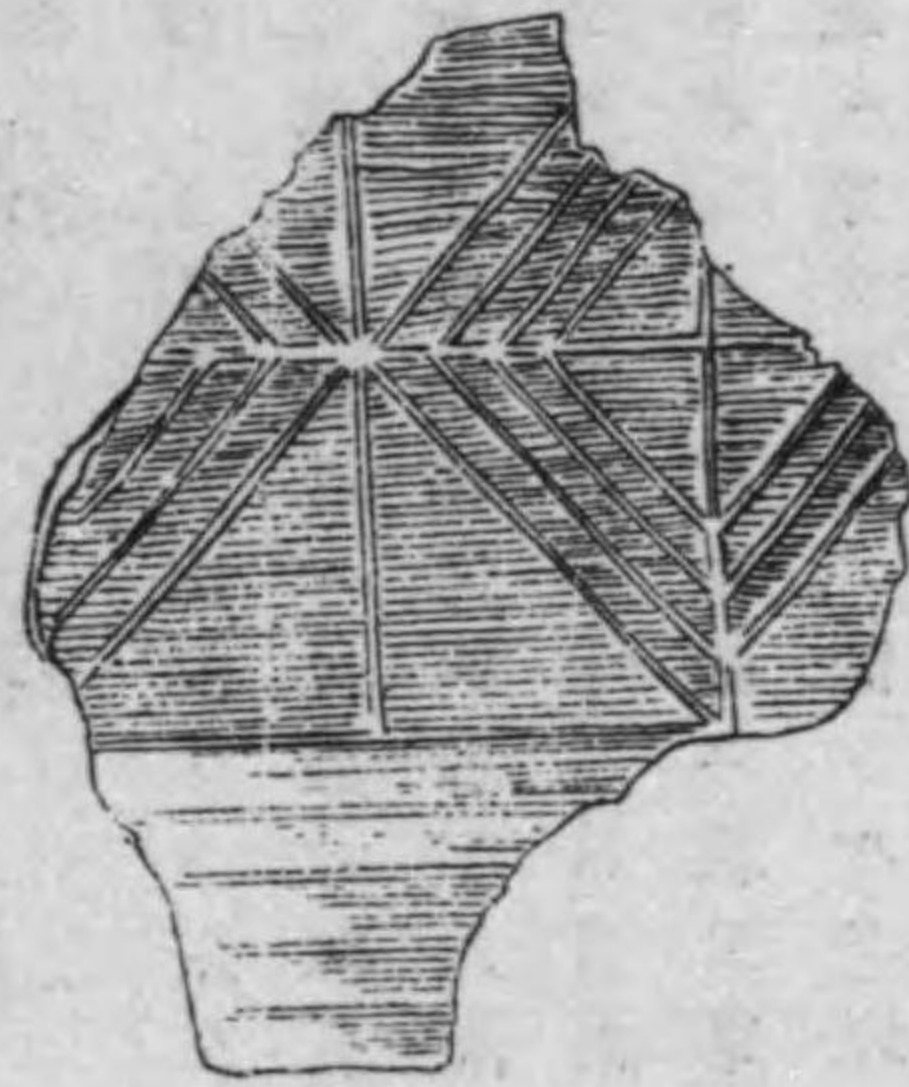
膚いたく荒れていかなる文字とも見えわかす、縦横に異の筋かつくみゆ、つらくみとめたるさま惣塚の横の徑一尺五寸はかり、縦のわたり幾許とも知りかたし、一字の界縦も横も一寸三分許なるへく見えたれど、體には定めかたし。

○同陵ノ甃 山陵ノ舊形前方後圓長サ六町濶サ三四町四邊ニ堀アリ、陵上モ堀モ一圓ニ土器ニ土ヲ入メ土留トナセリ、土器圖ノ如シ、卽是所謂甃ナリ。



大奈閉山陵圖

同破片



質柔ニシテ赤色シ凡七寸餘深一尺六寸七上ノ下ノ兩  
端及中央ニ帶リア胴ノ中ニ央ハニ前ニ後小孔二個アリ

○犬石 元明帝ノ陵ヨリ掘出セシ所ニシテ  
自然石ニ畸形ノ人物ヲ彫刻セルモノナリ、  
其形ノ似タルヲ以テ俗ニ大奈閉之七匹狐  
ト呼フ彫刻ノ人物ハ左圖ノ如ク頭部ハ狗



ニシテ肢體ハ人ナリ、即チ隼人ノ狗人ニ象  
レルモノナリ、陵邊ニ斯箇ノ物ヲ具フル由  
來ヲ按スルニ抑隼人ハ上古薩隅地方ヲ占  
有セル一種ノ民族ニシテ、一ニ之ヲ熊襲ト  
モ稱シ火闌降命ノ領スル所ノモノナリ、火  
闌降命其弟彦火々出見尊ト漁獵ノ具ヲ交換シ互ニ獲物ヲ試ミ、兄弟相闘キ火闌降力盡

キ計究リ降ヲ乞フニ臨ミ永ク狗吠ニ代リ宮墻ヲ衛リ且己レノ困窘セル狀ヲ舞技ニ容  
トリ歳時之ヲ奏セシメント盟ヒタリ、日本書紀一神代卷ニ略ニ乃伏罪曰吾已過矣從今以降  
吾子孫八十連屬恒爲汝俳人云、請哀之、、、、是以火酢芹命苗裔諸隼人等至今不  
離天皇宮牆之傍、代吠狗而奉事者也ト又曰ク火闌降命、、、、、請弟曰汝久居海原  
必有善術願救之若活我者吾生兒八十連屬不離汝之垣邊當爲俳優之民、、、、、  
於是兄著犢鼻以赭塗、掌塗、面告其弟曰吾汚身如此永爲汝俳優者乃舉足踏行學其溺苦之  
狀、、、、、自爾至今會無廢絶ト即此自來隼人狗吠ニ代リ宮門ヲ警メ、又歲時來  
朝シ風俗ノ舞ヲ奏スルヲ職掌トナシ其薩摩ニ住スルヲ阿多隼人ト云ヒ、大隅ニアルモ  
ノヲ大隅隼人ト云ヒ、多嶽島ニアルモノヲ多嶽隼人ト云ヒ、皆時ヲ以テ遞番上京シ隼人  
司ニ隼屬シテ職務ニ服セリ、蓋隼人ノ職務ニ大凡三件アリ、一ハ狗吠ニ代リ宮門ヲ警メ  
兼テ車駕行幸ノ前驅タリ、延喜式ニ凡元日即位及蕃客入朝等儀、官人三人史生二人、率  
大衣ニ補任シ、隼人ノ教習ヲ掌ラシメシモ、二人番上隼人二十人、今來隼人二十人、白丁  
隼人百三十二人、分陣應天門外之右左群臣初入自胡床起、發吠聲三節、、、、、又曰ク  
凡遠從駕行者官人二人史生二人率大衣一人番上隼人及今來隼人十人供奉其駕經國堺  
及山川道路之曲、今來隼人爲吠、、、、、行幸經宿者隼人發吠但近幸不吠ト即是ナリ  
二ハ風俗ノ歌舞ヲ奏ス、三ハ竹器ヲ調進ス、事編者カ嘗テ著述セル隼人志ニ詳カナリ、志  
ハ載セテ帝國大學刊行ノ學藝志林ニアリ、宜ク就テ見ルヘシ、而シテ犬石ニ彫刻セル人  
物ハ第一ノ故事ヲ取り之ヲ山陵ニ陳列スルモノナリ、當時人情質朴鬼神ノ觀念頗ル

熾ニシテ死者ニ事フルニ生者ノ禮ヲ以テスルハ一般ノ風習ナレハ吠狗ニ代リテ宮墻ヲ警ムル隼人即チ狗人ヲ象リ以テ之ヲ梓宮ノ兆域ニ置ケルモノニシテ彼檜隈大内陵ヲ警ムル上ヨリ掘出セル土犬○高市郡陵墓部ニ其ノ亦此犬石ト典故ヲ同シウセリ今神祠ノ持統上ヨリ掘出セル土犬○高市郡陵墓部ニ其ノ亦此犬石ト典故ヲ同シウセリ今神祠ノ門垣ニ狗犬ト稱スルモノアリ狗犬ハ高麗犬ノ假字ニシテ是レ亦隼人ヨリ轉スルモノナリ職原鈔標註ニ隼人常爲禁外門警固外門有銅狗犬大嘗元日居其傍成犬吠聲トアリ之ニ據レハ中世禁中ニ於テハ別ニ銅犬ヲ置キ隼人ヲシテ其傍ニ居リ代テ吠聲ヲ爲サシメシナリ然ルニ後世浮圖氏其形ヲ改メ阿吽ノ獅子ト稱スルハ甚非ナルモ尙狗犬ノ稱ヲ存シ全ク其故實ヲ失ハサリキ

奈保山西陵 元正帝ノ陵ナリ同處ノ西ニアリ

佐保山南陵 聖武帝ノ陵ナリ佐保村大字法蓮ニアリ

佐保山東陵 光明皇后ノ陵ナリ同處ニアリ

佐保山西陵 平城帝皇太后藤原氏諱宮子ノ陵ナリ眉間寺址ノ西北ニアリ

奈富山墓 聖武帝ノ皇太子諱ノ墓ナリ佐保村大字法蓮ノ北ニアリ

奈良岡墓 藤原不比等ノ墓ナリ同處ニアリ公卿補任ニ葬佐保山椎岡從遺教也ト即此

率川坂上陵 開化帝ノ山陵ナリ奈良町大字油阪ニアリ

田原東陵 光仁帝ノ陵ナリ田原村大字日笠ニアリ

田原西陵 光仁帝ノ御父春日宮天皇諱施ノ陵ナリ同村大字矢田原ニアリ

八島陵 崇道帝諱良早ノ陵ナリ東市村大字八島ニアリ

### 添下郡

郡名神武天皇紀ニ所謂層富縣フナトヨリ出ツ事既ニ添上郡ノ下ニ述フルカ如シ層富縣後チ添縣ニ作ルト稱スル地ハ二郡ノ内何レノ部分ニ在リシヤ今得テ知ルヘカラスト雖トモ本郡平城村大字歌姫小字御縣山ニ添御縣神社ト稱スル舊社アリ此社ニシテ古來コ、ニ鎮坐シ會テ移轉ナキモノトセハ其ノ方面ソ即チ添縣ノ故地ナルヘキ而シテ武乳速命ノ子孫之レカ縣主タリ

姓氏錄曰添縣主出自津速魂命男武乳速命也

大化ノ新制ニ國造縣主ノ所領ヲ收メ更ニ國郡ヲ立テラル、ニ及ヒ東ハ添上郡南ハ平群郡西ハ河内國北ハ山城國ニ界スル域内即チ村國佐紀矢田鳥見ノ四郷ヲ以テ本郡ヲ編制シ郡司ヲシテコレヲ治メシム

天武天皇五年紀ニ倭國添下郡、和名鈔部名曰添下郡村國佐紀矢田鳥見

和銅中平城ノ都ヲ建テ左右ノ二京ニ分チ九條ノ大路ヲ通スルヤ郡ノ東部ハ右京ニ屬シ官館邸宅極メテ宏壯ナリシモ延曆遷都以來所在ノ邸宅道路已ニ荒廢シテ田畝トナリ城平舊址ハ北浦定政氏ノ考證セ而シテ彼添縣主ハ一タヒ職ヲ失ヒシヨリ家門漸ク微ニ平城ノ朝ニ縣主石前ナルモノアリテ添縣主ノ姓ヲ賜ハリシモ其地位ハ舍人大初位下ニ止マリ徒ニ祖先ノ氏姓ヲ守ルニ過キス爾後縣主氏寥寥トシテ聞ユルナシ

續日本紀曰天平神護元年二月大和國添上郡人左舍人大初位下縣主石前賜姓添縣主

國郡司ハ既ニ國造縣主等ニ代リ郡國ヲ治メシモ中世以降寺家及富豪ニ占有セラレ、命令殆ント封内ニ行ハレス、爾後幾多沿革ヲ閱シ豪雄割據ノ世トナル。此時ニ當リ筒井、小田切、小泉、秋篠等各一方ヲ雄視シ互ニ消長ヲ爭ヒ遂ニ筒井氏ノ爲メニ併有セラレ、筒井氏國ヲ失フニ及ヒ豊臣秀長増田長盛等相代リ郡山ニ治ス。當時ノ村數人口石高等記録ノ微スヘキナケレハ之レヲ知ルニ由ナシト雖モ筒井諸記ニ載スル文書ニ

添下郡 馬上 雜兵

御改 文 村數五十ヶ村 高三萬五千二百六十五石餘

トアリ以テ當時ノ形勢ヲ概見スヘシ、元和以後幕府柳澤□□ヲ郡山ニ、片桐眞隆ヲ小泉ニ治セシム、子孫永ク其封ヲ襲フ。

元祿十五年ノ調査ニ係ル大和國郷帳ニ村名石高及領主等ヲ記スルモノ左ノ如シ。

一高三百八十六石四斗五升三合

本多唐之助 柳町村

內 三石四斗 洞泉寺屋敷

一高四百八石六斗二升五合

同 天井村

一高三百十九石三斗二升五合

片桐石見 杉村

一高四百七十七石七斗一升

本多唐之助 本莊村

一高六百四十四石四斗一升三合

同 番條村

一高四百七十九石六斗七升

三好孫三郎 丹後ノ庄村

內 四十四石八斗 幕府直領

一高二百七十八石九斗九升

下條長兵衛 伊豆七條村

一高千三百一石五斗八升

片桐石見 筒井村

一高二百六石六斗五升

同 西村

一高五百八石七斗五升

同 小林村

一高五百二十九石七升五合

同 池ノ内村

一高千五百九十七石七斗三升

同 小泉村

一高五百五十三石二斗二升五合

同 萬願寺村

一高六百九十四石六斗五升四合

同 小南村

一高二百十六石

同 豐浦村

一高七百六十四石二升八合

本多唐之助 新木村

一高八百四十三石九斗九升

片桐石見 田中村

一高六百七十二石九斗六升

本多唐之助 高田村

一高四百九十八石二斗五升

同 野垣内村

一高四百二十二石三斗一升三合

同 觀音寺村

一高九百十九石一斗一升三合

同 七條村

一高千二百七十六石三斗七升一合

同 九條村

內 參百石 唐招提寺領

添下郡

一高千二百三十一石

内 三百石 藥師寺領

同

六條村

一高百九十四石二斗四升一合

石川藏人

北新村

一高四百六十一石二斗八升二合

石川七兵衛

平松村

一高二百四十四石七斗二升

石川藏人

南新村

一高三百九十二石六斗九升九合

本多唐之助

齋音寺村

一高三百二十石七升五合

同

興福院村

一高五百七十七石二斗四升五合

石川藏人

菅原村

一高六百七十一石七斗九升八合

本多唐之助

寶來村

内 五十石 石川藏人

石川藏人

正田村

一高二百三十七石一斗五升

同

青野村

一高百九十一石七斗七升六合

本多唐之助

西大寺村

一高千七百七十七石三斗三升六合

内 三百石 西大寺領 百三十九石四斗八升 石川藏人

野神村

一高八拾七石九斗八升一合

石川藏人

秋篠村

一高八百五十五石一斗八升

堀田河内

同

内 二百三石九斗七升 本多唐之助

一高六百六十六石五斗三升八合

本多唐之助

中山村

一高七百九十八石八斗五升

同

押熊村

一高六百八十五石一斗五升九合

同

超昇寺村

一高四百九十四石二斗七升一合

同

山陵村

一高六百二十七石三斗七升五合

同

横領村

一高二百八石五斗五合

同

門外村

内 八石一斗 森源六

一高三百七十三石六斗四升

同

西畑村

一高三百七十三石九斗二升五合

同

歌姫村

一高三百七石三升八合

同

常福寺村

一高八百十五石五斗四升五合

中井主水

城外川村

内 三百十五石五斗四升 本多唐之助

一高三百三十二石六斗一升二合

本多唐之助

小和田村

一高三百五十五石三斗四升五合

同

大向村

一高二百六十四石六斗八升六合

同

石堂村

一高二百六十二石七斗四升五合

同

木島村

添 下 郡

一高二千七百七十五斗二升四合 同 矢田村  
 一高九百石四斗七升六合 同 新田村ノ支田郷  
 一高五百二十八石九斗四升八合 角寺主馬 中村  
 一高百石 靈山寺領 脇寺村支中村郷  
 一高四百六十九石一斗九升三合 角寺主馬 藤ノ木村同  
 一高八百四十三石 本多唐之助 三ノ碓村  
 一高千八百八十九石三升八合 同 二名村  
 一高九百四十五石六斗五升五合 上村  
 一高六百五十九石九斗六合 松平近江守 北田原村  
 一高六百九十四石二斗五升 同 南田原村  
 一高千四百三十三石九斗三升 森源六 高山村  
 内 六百八十七石六斗二升 堀田宮内 鹿ノ畑村  
 一高三百六十石四斗六升 村數六十五

合高三萬九千七百七十六石八斗九合

明治二十一年町村制ヲ布カル、ニ及ヒ町村ヲ分合シ、更ニ郡山町、矢田、伏見、富雄、北倭、平城、片桐、都跡村ノ一町七村トナス。

町村 附郷里

郡山町 應保二年五月左辨官ヨリ藥師寺ニ下セル官符○東大寺文書ニ應令言上子細、東大寺所司カ訴申押妨當寺ヲ東大寺領大和國清澄庄内藥園村事右、久安年中爲藥師寺惡僧觸事被燒失一庄在家畢、彌成猛惡所殘本莊并寺領郡山等皆以押領ト郡山ノ名稱記録ニ見ユル蓋此ヲ以テ始メトナス然ルニ俗ニ冠山ト稱シ義ヲ大織冠鎌足ノ故事ニ取ルハ太々過レリ降テ天文文祿ノ際小田切春政コ、ニ據ル天正中豊臣秀長筒井氏ニ代リ當國ヲ領スルニ及ヒ仍テ其城地ヲ修メ以テ治所トナス慶長中徳川家康水野氏ニ六萬石ヲ與ヘ之ヲ守ラシメシカ後チ更ニ柳澤氏ニ十二萬石ヲ與ヘ以テコ、ニ治セシム事城壘ノ部ニ詳カナリ明治二十一年柳町外四十五町村ヲ以テ一町トナシ郡山町ト稱ス。

矢田村 仁德帝ノ妃ニ矢田若女アリ物部ニ矢田氏アリ皆コ、ニ因メル名稱ナリ和名抄ニ矢田郷續日本紀ニハ見ユ當郡四郷ノ其一タリ郷已廢シ矢田村ヲ存ス矢田野ハ仁德帝ノ御製ニ上リ矢田池ハ養老中ノ築造ニ係リ共ニ名勝ナリ明治二十一年矢田、山田、城新、外山ノ五村ヲ合セ矢田村ト稱ス。

伏見村 古へ菅原ノ伏見里ト稱シ一區ノ名勝タリ後チ分レテ菅原、伏見ノ二郷トナレリ惣國日本風土記ニ添下郡伏見郷土地下肥民用不少多出白布竹等ト即チ是レナリ里已廢シ民居ナキモ伏見ノ稱ハ寶來村ノ陵名ニ存セシカ明治二十一年西大寺、平松、青野、菅原、蓬來

匹田ノ六村ヲ合セ伏見村ト稱ス。

古今

に我か世は經なん菅原や

伏見の里の荒まく惜しも

富雄村

和名抄ニ鳥見郷アリ。續日本紀ニ和銅七年十一月大倭國添下郡倭忌寸果安、  
若有人病飢自資私糧巡加看護登美箭田二郷百姓感恩義ト即此處ナリ、鳥見郷ハ紀

元前長髓彦美比古登饒速日命ヲ擁シテ據有セシ處ニシテ本郡西北隅ノ部分ヲ汎稱シ、即チ

今ノ鳥見谷地方ノ村里ヲ立テ、一郷トナセルモノナリ。郷已廢ノ後モ尙木島中、三碓ノ諸

村ヲ鳥見庄ト稱セリ。河アリ鳥見小河トイフ。源ヲ龍王山ニ發シ二名ノ東三碓ノ西ヲ流レ

砂村郡山ノ西ヲ經テ小泉ノ南ニ至リ平群郡ニ入ル。所謂斑鳩富小河是ナリ。明治二十一年

二名大和田、三碓、石木、中ノ五村ヲ立テ一村トナシ、名クルニ富雄ヲ以テス。富雄ハ鳥見小河

ニ因メルナリ。

菅原

惣國日本風土記ニ菅原郷土地中肥民用多出松竹柴胡桔梗榎蜀椒等、  
云此地菅原氏之始祖所出故以菅原爲氏也ト見ユ、土師氏ノ祖野見宿禰垂仁帝ノ大喪ヲ掌

リシヨリ子孫菅原ノ伏見邑ニ住シ、古人ニ至リ居地ニ因リ初メテ菅原氏ヲ稱ス、事

菅原社ノ下ニ述フヘシ。蓋菅原ハ此地ノ惣稱ニシテ伏見ハ其小名ナリ、故ニ古ハ菅原之伏

見邑ト稱シ歷代ノ古歌亦之レニ仍ル。後世伏見ノ稱ハ僅ニ陵名ニノミ存シ、菅原ハ却テ里

名トナリシカ今ハ更ニ伏見村ノ大字ニ屬シ愈故實ヲ失ヘリ。

萬葉

おほき海のみなそこふかくおもひつゝ

こひしき奈良の菅原の里

源氏

菅原や伏見の里のあれしより

かよひし人のあとはたえにき

秋篠

平城村ノ大字ニ屬ス、往時秋篠里ト稱シ古歌ニ詠セラレ名勝タリ。又秋篠ノ外山里ト

モ吟スルモノアリ。外山ハ西大寺流記資財帳ニ所謂秋篠山ニシテ即チ秋篠村ニ沿ヘル丘

陵ヲ汎稱セルモノナルヘシ。土師氏ノ族コ、ニ住スルモノ更ニ秋篠氏ヲ稱ス、事秋篠壘ノ

下ニ詳カナリ。

壬二

長き夜の生駒おろしやさむからん

秋篠の里に衣うつなり

新古今

秋篠の外山の里や時雨らん

伊駒の嵩に雲のかゝれる

佐紀

和名抄ニ佐紀郷アリ、日本靈異記ニ諾樂京活目陵、北之佐岐村ト見ユル村名ヨリ推及

シタル郷ナリ。狹木寺間陵及佐紀山ハ舊超昇寺村、即チ今ノ狹城盾列陵ハ寶來山陵ノ間ニ

添下郡

アリ以テ佐紀ノ方城ヲ概知スヘシ西大寺ニ佐貴郷古班田圖ヲ藏ス宜ク就テ參考スヘシ郷已廢シ佐紀今都跡村ノ大字ニ屬ス

山陵 平城村ノ大字ニ屬ス惣國日本風土記ニ御左在幾郷土地下肥民用不多出芎究當歸山藥脩竹等古老傳云此郷東有垂仁帝之陵西有安康帝之陵故云御左在幾也ト見ユ山陵ノ名

義自明カナリ

寶來 一ニ蓬萊ニ作ル伏見村ノ大字ニ屬ス垂仁帝ノ菅原伏見東陵コニアリ田道間守垂

仁帝ノ詔ヲ奉シ常世國ニ往キ橋ヲ求ム還ルニ及ヒ帝既ニ崩御ス乃チ齋ラス所ノ橋ヲ陵

前ニ奉シ號哭復命セシコト國史ニ見エ人口ニ膾炙セリ常世國ハ海外諸國ヲ惣稱スル古

言ナレトモ俗説ニ田道間守ノ遣ハサレシハ唐土ノ蓬萊山ナリト云フ蓬萊ノ村名蓋シコ

コニ起因ス

押熊 平城村ノ大字タリ應神帝ノ庶兄ニ押熊王アリ事蹟國史ニ詳カナリ

豐浦 一ニ豐良ニ作ル片桐村ノ大字タリ養老中葛上郡ノ豐浦寺ヲコニ移シ建ツ因テ村

名トナス筒井順慶葬式目錄ニ載スル會葬者ノ姓名ニ豐浦彦三添下郡ナルモノアリ是レ

本村ノ郷士ニシテ筒井ノ麾下ニ屬セシ人ナルヘシ又大乘院記錄ニ今ヲ去ル五百八十餘

年前即チ正和二年ノ調査ニ係ル豐浦御庄檢注帳ト稱スル古文書アリ今内閣文庫所藏檢注帳ハ

莊官ヨリ領主ニ注進セルモノナリ因リテ以テ地名ノ沿革莊官ノ職名租稅ノ率法等ヲ徵

スルニ足ルヘケレハ冗長ヲ憚ラスコニ全文ヲ掲載シ以テ考古ノ一助ニ供ス

注進 正和二年豐浦御庄檢注目錄事

合

租田百八十町三百十五步

文永二年十一月二十五日四十町大四十五步

一里田三十九町三反大四十五步 分米三百九十九石八斗五升二合

二十五町三反三十 分米二百三十三石一斗三升七合

一切田二十四町二反九十步 分米五百三十五石二斗三升三合

六十八町七反三步四十二步 分米二百一十石八斗六升二合

一今田六十五町一反大二十步 分米二十二石六升三合

四十三町七反二步 分米二百一十石八斗六升二合

一開田四十二町反大二十步 分米二十二石六升三合

一新田九町小四十步 分米十九石八斗

都合米一千三百八十八石六斗九升四合

一神田九町反三百三十步内

里田二町 分米九斗五升

切田 分米二十七石六升

今三町二反 分米十九石九斗五升

開三町七反三〇三十步 分米十九石九斗五升

已上六十七石七斗六升八合

添下郡

高宮 里四反 今五反 今一反相模開反半 彼岸料今二反

道祖神 今二反 開二反

庄神 里三反 今二反 開反

八幡 里反 切反 今三反

小社子 今三反

新宮 里反 今一町一反

若宮 里一町

石前寺 里一段 今二反

桑園鎮守 開反 酒田 今一反

八幡大般若彼岸 開一町四反小三十

庄田井料御供 開一町反

宮ノ御油料 今一反

一寺田 四町四反内

里田一町四反半

切九反

今三反

分米十四石三斗五升五合

分米八石五斗五升

分米二石四斗六升

分米七石七斗五升

分米五斗

已上三十三石六斗一升五合

勝蓮寺 開半 大日 開半 七佛寺 開三反半

彌勒寺 開反半 尺迦院 開反半 六齋寺 開半

勝福寺 開反半 安養寺 開半今半 地藏堂 里反

觀音寺 今反 藥師寺 今反 量樂寺 切反 蟲食

秋友堂 新切反 千福寺 切反 安土寺 開半里反

阿彌陀寺 里友 伊崎 新反 九品寺 里反切五反

延壽寺 切反 持堂 里半 極京寺 里五反

加賀寺 里反 千福地藏 開五反

一御莊官中 二十四町三反内

里七町八反半 分米七十七石七斗一升五合

切三町四反 分米三十二石三斗

今八町六反 分米七十石五斗二升

開四町四反半 分米二十石二斗五升

已上二百二石七斗八升五合

一公事除十五町 分米六十石段別四斗代

一内檢除十町 分米二十石段別二斗代



預所得分 里一町切一町今一町開二町 分米三十七石七斗  
 大定使 里一町切一町 分米十九石五斗  
 下司 里一町五反切五反今一町公事二町 分米三十五石九斗五升  
 公文 里一町五反切五反今一町公事二町 分米三十五石九斗五升  
 庄別當 里六反切四反公事一町 分米十三石八斗  
 圖師 今七反開三反公事五反內檢五反 分米十石二斗四升今ハ八石二斗四升  
 總押領使 今七反開三反 分米七石二斗四升  
 田所 今七反開三反公事五反內檢一町五反 分米十二石二斗四升今ハ九石二斗四升  
 大別當 今七反開三反公事五反內檢五反 分米十石二斗四升今ハ八石二斗四升  
 總追捕使 今七反開三反公事五反內檢五反 分米十石二斗四升今ハ八石三斗四升  
 小大別當 今七反開三反公事五反內檢一町 分米十石四斗四升今ハ九石二斗四升  
 惣檢校 今四反半 開三反 分米七石二斗四升今ハ五石二斗四升  
 小庄別當 開二反半 公事二町 分米七石二斗四升  
 公文代 公事一町 內檢一町  
 下司代 公事一町 內檢一町  
 徵使 公事一町 內檢一町  
 三十番頭 里一町五反 公事三町 內檢一町五反  
 九番頭 里四反半 內檢五反

二十番頭 今損 今五反  
 十番頭 公事一町 內檢五反  
 高宮 御供仁王講 今二反 開反  
 每月十九日百座講勤行 月別一斗七月  
 僧供料  
 殘定米一千五石五斗一升五合  
 右注進所如件

正和二年十一月二十五日

下 司 在 判  
 公 文 同  
 御 使 同  
 奉 行 同

村國郷 和名抄ニ見ユ已廢シ方域詳カナラス案スルニ延喜諸式ニ村國墓贈正一位命婦阿倍氏ヲ葬ルア  
 リ志ニ在所未詳或云新木村圓山塚即此ト果シテ然ラハ新木ノ近傍ハ村國郷ノ位置ナル  
 へキ  
 盾列郷 惣國日本風土記ニ盾列郷土地中肥民用繁多出松竹鮎鯉防風當歸等郷中有池號狹  
 域盾列池池後有小山松柏繁茂是神功皇后之陵也其後邊則成務帝之陵地也ト見エテ即チ  
 盾列池ニ沿ヘル地方ノ郷名ナリ已廢ス  
 高野郷 同書ニ高野郷土地中肥民用多柳梅棗梨等之果木多郷中有寺一字號高野寺天平勝  
 寶年中造立之勅額寺也ト高野寺ハ即チ西大寺ナリ

添 下 郡

萬葉

長皇子與志貴皇子於佐貴宮俱宴歌

秋されは今も見ることを妻こひに

鹿鳴かん山そ高野原のうへに

清澄莊

附清須美氏 東大寺藏天曆四年十一月二十日封戸庄園寺用ト題スル文書ニ添下郡清

澄庄田地二十七町二段七分トアリテ東大寺領著名ノ莊園タリ、東大寺要録ニ建保二年ニ

係ル田數所當ノ注進文ヲ載ス。曰ク、

東大寺

注進 寺領庄々近年田數所當等事

清澄莊

畠八町四段百三十步

所當地子

田二十六町三段二百二十步之内

除

常荒一町二段 河成八段小二十步 不作五段八十步

見作二十三町八段内

三段小神田 三段福明寺 一段小如來寺

一段極樂寺 二町但馬得業免

二丁播磨寺王別錄

二町藏人都維那 二町小綱給 九段公人 一町公文

一町六段專當二人各八段 三段圖師 三段職事 二町二段下司

已上十五町二段

定田八町六段内

損田四町小三十步

得田四町半三十步内

預所佃一町 定使免四段

定得田三町一段半三十步

所當官物九石四斗七升五合内 損得不定

建保二年五月 日

トアリ、今已廢シ方域詳ナラスト雖、應保二年ノ左辨官符ニ東大寺領清澄庄内藥園村トアル藥園ハ今郡山町ニ存シ、永久五年ノ同官符ニ清澄庄字富川ト見ユル富川ハ郡山小泉ノ間ニアリ、又大乘院領段錢日記享德二年ノ記錄ニ清澄莊八貫七百十九文御兵士引付ニ小林分清澄庄下司給主トアレハ當時興福寺モ亦莊園ヲコ、ニ立テ小林氏ヲシテコレヲ支配セシメシト覺ユ、小林氏ハ小林村ノ豪族ニシテ同引付ニ小林宗清小林宗光ナト見エテ後テ筒井ノ麾下ニ屬セリ、國民郷士記筒井惣麾下ニ小林光之、添下郡小林孫左衛門ト即此、而シテ筒井ノ麾下ニ清須美氏アリ數々順慶ヲ助ケテ功アリ郷士記ニ清須美所ニ添下郡ノ記スト記スル

添下郡

ニヨリ更ニ彼ノ郡ノ條ヲ閱スルニ清須美右衛門丞盛明アリ其祖ノ出ツル所ヲ詳ニセサレトモ本ト此地ノ豪傑ナルヲ葛下郡ニ移レルモノナルヘシ天正十三年ノ順慶葬式目錄ニ清須美半介清須美春藤 添下郡秋篠ノ人名見ユレト其事蹟詳ナラス筒井定次伊賀ニ移サルニ及ヒ清須美氏コレニ隨テ上野ニ赴クト云フ。

山 川

佐紀山 都跡村大字佐紀ノ北ニアリ。

萬葉

春日なる三笠の山に月も出ぬかも

佐賀山にさける櫻の花見ゆ

赤膚山 同村大字五條ノ西ニアリ兀然赤土ヲ露ハス因テ名ク。

續新

衣だにニツありせは赤はたの

山にひとつはかさましものを

矢田野 矢田村大字矢田ニアリ仁徳帝ノ御製アリ日本書紀ニ見ユ。

高野 都跡村大字佐紀ニアリ。

萬代

見わたせば高野の野邊のうつきはら

皆白たへに咲にけるかな

鳥見小川 一ニ富小河ニ作ル源ヲ龍王山ニ發シ鳥見谷ヲ流レ砂村郡山ノ西ヲ歷テ小泉ノ南ニ至ル架橋アリ富川橋ト稱ス南流シテ平群郡ニ入ル所謂斑鳩富小河是ナリ。

萬葉

添下郡

洗衣アヒキとりかひ川の河よとの

通はむ心思ひかねつる

とりかひハ鳥貝ニシテ即チ鳥見川ノ別名ナリ、案スルニ和名抄ニ鳥見郷アリ、コレヲ流布本ニハ鳥貝郷ニ作ル、蓋傳寫ノ誤ナリ、鳥貝川ハ此誤謬ヲ傳ヘ、終ニ其別名ノ如クナレルモノナラン。

狭城サキ盾列池 垂仁帝三十五年ノ作ニ係ル、已廢ス、山陵村ノ西佐貴川ノ間其跡ナリト云フ蹟聖

迹見池 盾列池ト同時ニ成ル、片桐村大字池ノ内ニアリ志

菅原池 推古帝十五年ニ作ル、伏見村大字菅原ニアリ志

矢田池 養老七年築ク矢田村大字矢田ニアリ、今双池ト呼フト云フ。

勝間田池 志ニ在六條村廣一千餘畝ト是ナリ、藥師寺ノ記録、中下蒲檢斷之引付ニ、一勝馬田御池分水戸分口破損ニ付相改畢 五條、六條、七條三ヶ郷戸口合四尺二寸、九條觀音寺二ヶ郷戸口合二尺六寸、天正十四丙午年五月八日、、、、、、、今度觀音寺村ハ莊嚴依不相

勤御池分水取上殘四ヶ郷ヘ、割付遣者也水口戸分亂ル、ニヨリテ此度相改遣仍如件、六條村一尺七寸、七條村壹尺七寸但六條領、五條村一尺八寸、右同斷三ヶ郷戸口五尺二寸、九條村二尺六寸但七條領、慶長十一年丙午六月十二日評定トアレハ當時藥師寺領、五條、六條、七條、九條、觀音寺、五ヶ村ノ用水タリシナリ。

萬葉

勝間田の池は我れ知る蓮なし

然言ふ君が髯なきかこと



○但志圖會ニハ在三確村俗稱天王トアルニ因リ、今富雄村大字三確ニアル村社ヲ式内添御縣ト稱スルモ他ニ憑據ナシ、且三確ハ往時鳥見庄内ニアリ、即チ古ヘノ鳥見地方ニシテ歷史上著名ノ處タリ、若シ添御縣社ニシテ三確地方ニアリトセハ寧ロ鳥見御縣社トコソ稱スヘケレ、今夫歌姫ハ現ニ御縣山ノ字ヲ存スルノミナラス、位置亦添上郡ニ接スル處ニアリ、大化立郡ノ際添縣ノ名ヲ以テ二郡ニ推及ホセシハ、固ト地理ノ然ラシムル所ニシテ、神社ノ位置モ亦二郡ノ交界タル歌姫ノ北方ニアリシナラン、故ニ今當社ヲ以テ式内社ト假定ス。

祭神

御縣神ヲ祭ル、御縣神ハ延喜式○新年祭祝詞御縣ニ御縣爾坐皇神等前爾白久高市葛木十市志紀山邊曾布登御名者申氏此六御縣爾生出甘菜辛菜平持參來氏皇御孫命能長御膳能遠御膳登聞食故皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉登宣ト見ユルコトク、古ヘ朝廷ノ供御ニ充ツル菜園其物ノ靈ヲ御縣神ト稱シ祭リタルモノナリ、他ノ御縣社ノ祭神コレニ倣ヘ。

神戶

天平二年大和國大稅帳正倉院御文書曰添御縣神戶、稻壹佰伍拾貳束捌把、租貳拾束、合壹佰漆拾貳束捌把

新抄勅格符抄曰添御縣神二戶大和

登美神社 延喜式神名帳ニ見ユ、在所詳カナラス、今富雄村大字石木ノ村社ヲ以テ式内登美社トスルモ據ナシ、窃ニ案スルニ北倭村大字上村長弓寺元鎮守ノ牛頭天王ナルヘシ、說陵

墓ノ部眞弓塚ノ下ニ述フ。

菅田比賣神社 筒井村大字筒井ニアリ、延喜式神名帳ニ菅田比賣神社二座初鑿ト見ユ、今村社

能賣神社 都跡村大字佐紀ニアリ、俗ニ大宮ト稱ス、延喜式内ノ社ニシテ、今村社タリ、祭神詳

伊射奈岐神社 延喜式ニ伊射奈岐神社大月次ト見ユ、古ハ大社ニシテ、月次新嘗ノ官幣ニ預

以テ當社ナリトスルモ據ナシ。

田中神社 附田中杜 片桐村大字田中ニアリ、俗ニ甲斐明神ト稱ス、三代實錄ニ貞觀七年四月

授大和國無位田中神從五位下ト是レナリ、其杜ヲ田中杜ト稱シ名區タリ。

山きはの田中のもりに注連はえて

今日里人は神まつるなり

祭神詳カナラス、古事記ニ天津彦根命者倭田中直祖トアレハ其祖神ヲ祭レルナルヘシ、田

中氏ハ本村ノ豪族ナリ、國民郷士記ニ田中善助、田中亦次郎、田中二位繼體天皇々々子田中孫亦

殖槻八幡神社 附殖槻 郡山町字殖槻筋ニアリ、村社タリ、譽田別尊ヲ祭ル、創立ノ由來詳カナ

添下郡

四四九

ラス、殖槻ハ名勝ニシテ和銅二年淡海公ノ維摩會ヲ行ヒシ植槻道場ノ舊迹ナリト云フ。  
舊迹幽考曰植槻道場は侍町にまじりてわつかに殘れり、やしゐたて、植槻の八幡とよ  
ふかたはらに觀音堂一字あり、殖槻の道場は和銅二年十月淡海公釋の淨達をまねきて  
維摩會を行ひ給ひし所なり。  
日本靈異記ニ所謂諸樂右京殖槻寺モ亦此處ナルヘシ。

萬葉

わか思ふ御子の命は

春されは殖槻の上に、

藥園八幡神社

郡山町大字材木ニアリ、村社タリ、此地平城京藥園ノ舊迹ナリ舊迹部ニ詳カ

ナリ。

大織冠神社

郡山町字大織冠ニアリ、藤原鎌足公ヲ祭ル、明細帳ニ由緒未詳トアルハ精シカ

ラス、天正中多武峯神像遷座ノ舊祠ニ因リ之ヲ祭レルモノナリ、神像動座ノ由來彼ノ社ノ  
下ニ詳カナリ參見スヘシ。

### 佛 寺

藥師寺

郡跡村大字砂京西ニアリ丈六藥師佛ヲ本尊トナス故ニ名ク平城七大寺ノ其一タリ、

天武帝即位八年皇后不愈ノ爲メニ創始スル所ニシテ持統帝ヲ經文武帝二年ニ至リ初メ  
テ其功ヲ竣フ、本高市郡岡本ニ在リシヲ元明帝養老二年コ、ニ移シ建ツ、事國史及ヒ當寺

東塔擦銘等ニ詳カナリ。

東塔擦銘

相傳舍人親王ノ撰スル所ト云フ曰維レ清原宮馭宇 天皇即位八年庚辰之歲建子之月、以中宮不

愈、創此伽藍而鋪金、未遂龍駕騰仙、太上天皇奉遵前緒、遂成斯業、照先皇之弘誓、光後帝之立

功、道濟郡生業傳曠劫式、於高躡、敢勒真金、其銘曰巍々蕩々、藥師如來、大發誓願、廣運慈哀、

猗猗聖王、仰延冥助、爰飭靈宇、莊嚴調御、亭々寶刹、寂々法城、福崇億劫、慶溢萬齡、○銘文ノ解、

ノ擦銘釋ニ詳カナリ

日本紀曰天武天皇九年十一月癸未皇后體不豫、則爲皇后誓願之初、藥師寺仍度一百僧、由

是得安平、

持統天皇二年冬七月庚寅以藥師寺構作畧了詔衆僧令住其寺

藥師寺緣起元弘三年摩尼坊師澄禪日記曰天武天皇即位八年庚辰十一月皇后不愈巫醫少驗因之爲除

病延命發奉鑄丈六藥師佛像之願口靈驗有感、皇后病愈、天皇大感、已鑄金銅之像、鋪金未畢

以十四年丙戌秋九月九日、天皇崩明日香清御原、以戊子年十一月葬給於高市郡大內山陵、

皇后嗣帝位是持統天皇也爲遂太上天皇前緒高市郡建寺安置佛像經論等本藥師寺是也

元明天皇養老二年戊午移伽藍於平城京在大和國添下郡右京六條二坊十二坪東西三町南北四町云云

其他當寺ニ係ルコト國史ニ散見スレトモ繁キニ依リコレヲ略ス中世以後一タヒ興福寺ノ末寺タリ末寺記ニ藥師寺領三百石末寺三ノ末寺三十八ヶ寺舊記ニ在之ト見ユシカ今ハ法相宗ノ一本山タリ

堂 塔

養老中建築伽藍ノ規模ハ流記資財帳ノ全本ヲ存セサレハ今コレヲ知ルニ由ナシ故ニ元弘三年ノ緣起及ヒ七大寺巡禮記等ヲ以テ其大要ヲ記スヘシ

金堂 緣起曰金堂一字二重二閣五間四面柱高一丈九尺五寸佛壇長三丈三尺廣一丈六寸高一尺八寸以瑪瑙爲飾石以瑠璃爲地敷之以黃金爲繩界以蘇芳造高欄以紫檀爲內殿天井障子以鐵繩釣天蓋寶四端交立白輝寶珠及半月等不可稱計其堂中安置丈六金銅須彌座藥師像一軀圓光中半出七佛藥師佛像火炎間翅造無數飛天也左右脇士日月遍照月光遍照菩薩各一體已上持統天皇奉造鑄坐者今略抄之 古老傳云件佛像從本寺七日奉迎之

假名緣起曰金堂の藥師如來は天武天皇の御願十二夜又神觀音并二軀の御願は孝德天皇の御願 一體は 水尾天皇の御願 此藥師如來は高市郡本藥師寺より車にして引けるか七日を経て此寺につ

き給ふ

又二體觀音并坐像流記帳云奉爲難波那我良豐前宮治天下天皇孝德皇后御願 一體

體高各七尺五寸古老傳云十二神將別當弘耀大僧都造立

右金堂上重閣永祿元年八月十三日夜大風被吹落也而別當平超急速之

巡禮記曰金堂五間四面在重閣本尊金銅丈六藥師三尊身光引付半出七佛藥師像也件三尊者持統天皇御願七月開眼寺者天武天皇即位九年十一月始建立文武天皇即位

二年十月造畢云云又十二神將等各高七尺五寸此像者上代別當弘耀大僧都所造之云又或記云當堂仁行基并文珠在之云云又金銅三尺五重塔在之納舍利云云口傳相承舍利也去文安元年六月大風顛倒本尊等大略破失了只彼金銅三尊許于今在之御堂其後如形建立以此寺爲源家氏寺云云

和州寺社記曰添下郡西京藥師寺坊舍二十軒、金堂の本尊は藥師如來是日本丈六佛の窠初也脇士は日光の二并其脇士に十二神將をします内陣の敷石は礪磧石也されとも文安年中炎焼に及ひしか本尊は無恙出給ひ今の金堂は其後の造立なり金堂の舍利は戒明和尚傳來し給ふよし

講堂 緣起曰講堂一字重閣七間四面在裳層高一丈三尺六寸長十二丈六尺廣五丈四尺五寸柱高二丈五寸南無戸東西各戸一間北戸三間自餘連子今壁安置繡佛像一帳高三丈廣二丈一尺八寸阿彌陀佛并脇士并天人等惣百餘體奉繡之流記帳云以壬辰年四月十二日奉爲飛鳥淨御原宮御宇天皇文武藤原宮御宇天皇持統奉造而請坐者又其後別安置金色尺迦佛像一體高三尺右堂天祿四年二月二十七日夜燒亡

添下郡



寸高三丈年供養講師文武天皇即位二、、、、、  
食堂 緣起云食堂一字九間四面東屋長十四丈廣五丈四尺五寸柱高二丈五寸、、、、、

內殿安置金銅半丈六阿彌陀佛像并觀音勢至并各一體舊流記云已上三尊難波那我良豐  
前宮御宇天皇孝謙奉造請坐於此寺云云天祿四年二月二十七日燒亡其後別當增祐自長  
保元年七箇年之間造畢佛像同以燒亡但脇士體腰上燒遺也增祐大法師造繼并阿彌陀佛  
像如本造立已了

巡禮記曰食堂 安六尺阿彌陀三尊、、、、、

○按スルニ流記帳ニ據ルニ古ヘ講堂ノ本尊ハ金色尺迦佛ニシテ食堂ハ彌陀三尊ナリ然  
ルニ今講堂ハ更ニ彌陀三尊ヲ本尊トセリ疑クハコレ食堂廢絶ノ後其佛像ヲ講堂ニ安  
置シ終ニ本尊トナレルモノナランカ

佛門 緣起曰佛門五間二重戸三間壁二間長五丈廣三十二尺是云南大門東西居獅子形々  
各高七尺右別當大法師越禪任中天祿四年二月二十七日燒亡別當大法師增祐任中以寬  
和三年正月八日始立柱至于長和二年作了、、、、、大門美福門樣也裏書有人曰  
內裏記云美福門藥師寺南大門樣云云

○巡禮記曰南大門安金剛力士云云同文安大風顛倒了

東西塔 緣起曰寶塔二基 ○一基ハ即チ各三重有裳層高十一丈五尺縱廣三丈五尺右兩塔  
安置尺迦八相成道形也 西塔ナリ  
巡禮記曰東塔西塔一基 件塔各安尺迦八相體塔高各十一丈五尺 假名緣起曰慶長二

年五月二十八日超昇寺某の兵火にかゝり炎上す其後再興なく今の文珠堂は西塔の跡  
なりと

東院 緣起曰東院正堂一字前細舍一字僧坊一字流記云東禪院舍三口細殿僧坊吉備内親  
王爲元明天皇以養老年造立也ト然ルニ和州寺社記ニ東院堂本尊は觀世音并百濟國よ  
り渡して長屋王建立し給ふ四天王は増長の作也又舊迹幽考に本院また東禪院ともい  
ふ養老五年九月五日長屋王の御造立本尊觀音并は孝德天皇御造建其後雷火にそこな  
はれ修理したり此堂は軒あれ柱かたふきなから今にありト見ユ寺傳モ亦コレニ據リ  
東院室本尊閻浮壇金正觀音四天王由緒元正天皇御宇養老五年長屋王爲花嚴宗弘通御  
建立也トナシ長屋王ガ宗旨弘通ノタメニ創立スル所トスルハ如何宜ク流記ノ吉備内  
親王元明帝ノ爲メニ造立ストアルニ從フヘキカ

西院 緣起曰西院正堂一字中安置畫像彌勒淨土障子北面建大唐玄奘三藏像障子者玉華  
殿樣也西端坐僧伽和尚影在帳并床三面庇造層八重雙居内塔一十萬基各籠無垢淨光陀  
羅尼摺木件塔以天平寶字八年甲辰秋九月十一日孝謙天皇造一百萬小塔分配十大寺之  
其一也

假名緣起曰西院は慶長元年七月十二日大地震にくつる

經藏 緣起曰經藏長三丈七尺廣二丈五尺柱高三丈俗曰大經藏天祿四年二月二十七日燒  
亡○巡禮記所見ナシ

鐘樓 緣起曰鐘樓一字丈尺如經藏懸鴻鐘一口高口徑俗傳曰佛鐘者百濟國所獻天祿四年

二月二十七日炎上、其後別當權少僧都安鏡與大衆共議以同年二月二十九日曳勝光寺鐘懸於西岡上、其後從長保五年十月二十五日係綱曳取與福寺別院建法寺鐘掃舊樓址新構假屋以係此鐘、高七尺、口徑四尺二寸乳高一寸六分。

今ノ鐘ハ長保中興福寺ノ別院ノ物ヲ曳懸セルモノナルヘキハ緣起ノ文ニテ自ラ明カナリ、然ルニ長保ヨリ殆ント六百年以後ノ筆ニ係ル巡禮記ニ鐘樓一字在大鐘一口自百濟國王所獻也トスルハ甚誤レリ。

唐院 巡禮記曰唐院 在金堂東安七寸四天像此像者戒明和尚入唐之時於海中令誓願造之云

北僧坊 西端行基并坊號文珠院東端明詮僧都坊其次第二坊惠金内供坊也件坊安等身相光天像。

ト以テ當時ニ於ケル伽藍ノ規模ヲ想見スヘシ、百鍊鈔ニ天延元年二月二十七日藥師寺燒亡ト見ユ、當時ノ始末元弘ノ緣起等ニ詳カナリ。

緣起曰別當大法師趣禪任中天祿四年此年天延癸酉二月二十七日夜從食堂童子宿所盧外失火食堂講堂三面僧坊四面廊中門大門悉以燒亡、寺僧神鎮職掌清額禮宗等見金堂蓋層面火付捨身滅火之、寺家具注子細言上公家隨則以三月五日被下實檢、勅使左少辨藤原朝臣伊勢等還參之日、具由奏聞、以同二十八日被下神鎮禮宗等彼夜入炎中消金堂火之功、可任以神鎮三河讀師以禮宗大和國口之宣旨也、又有宣旨被令配造諸國大門大和中門廡廊三十間、備前三十間、備後二十二間、安藝十四間、食堂播磨經藏周防鐘樓東院房美濃東

南僧坊伊豫西南僧坊讚岐講堂寺家別當趣禪所造立也。

元亨釋書曰天延元年二月藥師寺食堂火延及講堂比丘鎮宗二人救火大殿不燒知事錄奏差尙書左丞源陟入寺覆覈得事實勅神鎮爲參州講師禮宗和州口。

此時金堂及ヒ東西二塔ハ幸ヒ其難ヲ免レ食堂以下ノ諸堂ハ悉ク燒失セリ、後十三年ヲ經即チ寛和三年柱立ノ儀式アリ、長和二年ニ至リ初メテ成功ス、或ハ曰フ諸堂未タ全ク成ラサルニ永祚元年大風ノ爲メニ金堂ノ重閣吹落サレ時ノ別當平超コレヲ修理スト云フ。

假名緣起曰寛和三年正月八日柱立又云長和二年成就又云いまだ諸堂成就せざるに永祚元年八月十三日の夜大風金堂の上の重閣を吹落せしが別當平超律師修理しても

との如し金堂ノ條參

長和ヨリ大凡二百年ノ後康安元年六月地震ニテ金堂ノ重閣傾破シ、中門廻廊等顛倒セリ、嘉元記法隆寺曰康安元年六月二十二日卯時大地震有之藥師寺金堂ノ二階カタフキ破御塔基ハ九輪落、一中門廻廊悉顛倒同西院顛倒此外諸堂破損

文安二年諸堂祝融ニ罹リ同年柱立ノ儀式ヲ行ヒシモ土功ニ着手スル能ハス空ク數十年ヲ經タリ、其後不詳、金堂ヲ再興ス、慶長二年五月二十八日超昇寺氏ノ兵燹ニ罹リ慶長五年之ヲ再興ス舊述ト云フ。

以上ハ伽藍沿革ノ大略ナリ、要スルニ今ノ金堂ハ慶長五年ノ再興ニ成リ、講堂ハ文化二年ノ造營ニシテ食堂ハ七大寺巡禮記ニ之ヲ載スレハ文安燒失後再興セシモ慶長類燒後造營セラレサリシナラン、東塔ハ幾回ノ災難ヲ免レ屹然今ニ存在シ其擦銘ハ最モ世ニ著ハ

レ、西塔ハ續日本紀ニ據ルニ光仁帝ノ世ニ雷火ニ燒亡シ續日本紀其再興ノ時代詳カナラス、慶長二年炎上後造立ナシ、今ノ文珠堂ハ其趾ニ就テ建テシモノト云フ、西院ハ慶長元年七月震災ニ倒レ再興ナク、東院ハ軒破レ柱傾キ僅ニ其名殘ヲ存スルノミ。

寺 産

當初ノ封戸寺領ハ流記資財帳ヲ存セサレハ今詳カニ之ヲ知リ難シ、但諸寺縁起集東京音羽國寺藏表紙ニ康永四年ニ舊資財帳ヲ引用スルアリ、此レ原文ニアラス、唯其大意ヲ記スルモノ八月法眼清範トアリ、ニ過キスト雖モ亦當時ノ資産ヲ徵スルニ足ルヘキヲ以テコ、ニ之ヲ抄出ス曰ク、

藥師寺舊流記資財帳云

一金銅鐵錢并供養具繩糸綿長布交易庸布紺布袂帳布帳白米等有、其員數繁シ故略之、

右以養老六年壬戌十二月四日納賜、平城宮御宇天皇者、

一伎 樂

以天平二年壬戌十二月四日納賜、平城宮御宇者

一奴婢四十七口又五人又二十八人 又一人又十一人

已上或藤原宮御宇天皇、或伊賀比賣朝臣、或仰諸國買取、或平城宮御宇天皇納賜、或買等奴婢也、文繁故略之

一水田六百九十九町也九段七十一歩大和、河内、攝津、山城、伊勢、近江、播磨、備前等國

一處々庄三十二處、庄倉合一百十三口、屋六十三口

一通分稻四百七十三萬三千百九十四束六把八分四秒在三十五國

一食封五百戸在五國、信乃國五十戸、讚岐國二百戸、伊豫國五十戸

一利稻七萬七千四百束

新抄勅格符抄曰

藥師寺五百戸武藏國百戸、讚岐國二百戸、伊豫國五十戸

當寺ノ記錄黑艸子ト題スルモノニ寺領ニ係ル古文書ヲ收ム曰ク

修二月壇供寄進田事

合

一段一石五斗代金伏定

當作幸真惣介入道寄進

一段七斗八升代加供十一合升定金伏

作人初太郎九條

一段九斗金伏定 當作集田

西大路法之三郎六條

一段七斗代地子升定、一斗八金伏二、一斗六升

當作法師太郎角院

一段四斗代十合升定、一斗八金伏二、一斗九升

當作鳥見兄次郎今ハ代石太郎

一段八斗代地子升定、一石三斗二升

添 下 郡

四五九

當作夜乃次郎唐東院

一段六斗代金伏延八斗四升

當作末國北御門

一段七斗五升代西院十合免二斗五升請取之十一月十三日

明圓坊寄進田 百姓藥園衛內

一段三斗代十合升定法蓮房寄進

當作觀音太郎九條

一段一石二斗代金伏定

九條覺善房寄進 田中作

一段七斗代金伏右京八條三坊六坪 四至東八溝田南小路

當作觀世太郎

一段六十步之內百拾步左京六條 四至東小路南他領西朱雀北類地

一段六十步之內招提金堂寄進之所當五斗金伏定

尼西阿彌寄進

一段五斗代十合金伏定七斗

當作經王與一

一段八斗代金伏宗延房寄進 清次

藥師寺大湯屋湯田坪付目錄

合

一段右京三條二坊七坪

一度半

德壽太郎 太子野

一段左京四條二坊四坪

一度半九月二十一日半

夜乃太郎 平松

一段左京四條二坊四坪

一度半四月二十七日半

孫太郎 平松

一段左京四條二坊四坪

一度半正月二十七日半

經王 王一

京五條二坊三坪

一度半但半論也二月二十四日

角院法師

一段右京六條一坊一坪

一度半七月二十一日半

養天滿神田

一段右京六條一坊六坪

一度半五月二十一日半

禪日入道

一段右京六條一坪十二坪

一度半十二月二十七日半

袈裟太郎

一段右京六條三坊西大路屋シキ

添下郡

一度口十七日 金剛太郎

一段右京六條三坊屋シキ

一度 吉次跡

一段右京六條三坊二坪屋シキ 門入道

一段右京六條三坊七坪 寅三郎

三度半 八月十一日

八段切右京六條三坊七坪

二度 四月十七日 御房 西大路

一所右京六條三坊十坪

一度 二月十七日 加壽太郎 西大路

一段右京六條四坊十五坪

三度 五月二十一日 辨入道

二段右京七條一坊十坪

六度 正月十七日 八月二十七日

一段右京七條二坊一坪 經王與一

一度半 六月十一日 學禪房

一段右京七條二坊十二坪

三度 四月二十一日 新太郎

一段右京七條二坊十六坪一度半 四月十一日半

一段右京七條三坊三坪

一度 六月十四日 又太郎 七條

一段右京七條三坊四坪 一度半 八月二十一日

一段右京七條三坊五坪 一度半 四月二十一日半

一段右京七條四坊九坪

三度 八月十七日 末國跡

一段右京八條一坊九坪 六月二十一日 七條ノ神田云云

三度 八月彼岸 十一月十一日

一段右京八條三坊十坪 十一坪ニアリ 源五郎 彌三郎

二度 十月十七日 源五郎 十一月十一日 彌三郎

一段右京八條四坊八坪放遣

三度 八月 春熊 七條

一段右京九條一坊五坪

三度 七月二十七日 佐治入道 九條

一段右京九條一坊五坪

一段右京九條一坊五坪

添下郡

三度 三月七日  
半右京九條三坊一坪

一度 三月二十一日  
一度 三月二十七日

一段右京九條三坊八坪

四度 七月十一日  
八月二十一日  
十一月二十七日

一段右京九條三坊九坪

二度 十月二十一日  
藤七跡

一段右京六條一坊五坪

半右京七條二坊十二坪

一度 十月二十一日  
又四郎七條

一段右京七條一坊十五坪

一度 九月十二日 德智

ト見ユ此文書ハ殊ニ年號ヲ記セサルモ文中ニ享德文明ノ年號アレハ其頃ノ物ナルヘシ  
金伏ハ升ノ名ニテ當時法事供米ノ出納ニ用ヒシモノ世ニコレヲ藥師寺金伏升ト稱ス方  
四寸四分深二寸五厘六合一夕二撮二抄ヲ容ルモノナリ  
太子野平松西大路等ハ當時ノ村名ナリ今七條九條五條六條平松角院ヲ存ス此條里坊坪  
ノ數ヲ今ノ村里ニ徵シ以テ古ヘノ地割法ヲ算出スルヲ得ヘシ德川氏ニ至リ寺領三百石  
ヲ寄セラル

佛跡碑

有名ナル佛跡碑ハ平城七朝ニ於ケル文物ノ一端ヲ窺フヘキモノニシテ實ニ千古ノ尤物  
ナリ蓋佛跡ナルモノハ原ト天竺丘慈國ノ佛堂中ニ在リ佛說ニ據ルニ釋迦牟尼如來ハ三  
十二ノ妙相ヲ具ヘ足下ニ千輻輪轂鞞魚鱗金剛杵梵王頂衆蠶等ノ不可思議ナル變相ヲ有  
シツアリテコレヲ觀ルモノハ千切極重ノ罪障ヲ消滅スル功德アリト云ヘリ而シテ唐  
ノ貞觀ノ比王玄策中天竺ニ使セシ時コレヲ轉寫シ歸リシヲ我カ天智天武帝ノ頃黃文連  
本實彼國ノ普光寺ニテ轉寫シ齋ラシ歸レリ是レ佛跡圖ノ我カ國ニ傳ハル始ナリ其寫本  
平城左京ノ禪院ニ在リシカ天平勝寶中文室智努真人故茨田夫人ノ冥福ヲ祈ランカ爲メ  
更ニ之ヲ書寫シ石ニ刻シ且其由來ヲ勒セルモノナリ其佛跡ノ功德及ヒ呵嘖生死ノ倭歌  
十七首ハ語調極メテ雅尙ニシテ文藝ヲ裨益スルノ一助トナスニ足レリ其十七首ノ内第  
二ノ倭歌ハ拾遺ニ收メラレ其歌序ニ山階寺にある佛跡にかき付侍る光明皇后トアルニ  
據リ以テ皇后ノ御製トナシ且此佛跡石ハ本ト山階寺福寺ニアリシヲコニ移シ建ツ  
ルモノナリト云ヘリ其レ或ハ然ラン今左ニ銘文ヲ掲ケ併セテ解釋ヲ附シ以テ讀者ノ便  
覽ニ供ス銘文ハ小山田與清氏ノ校本ニ據リ解釋ハ  
廣大和名勝志ヲ取リ聊カ卑見ヲモ附記ス

拾遺集

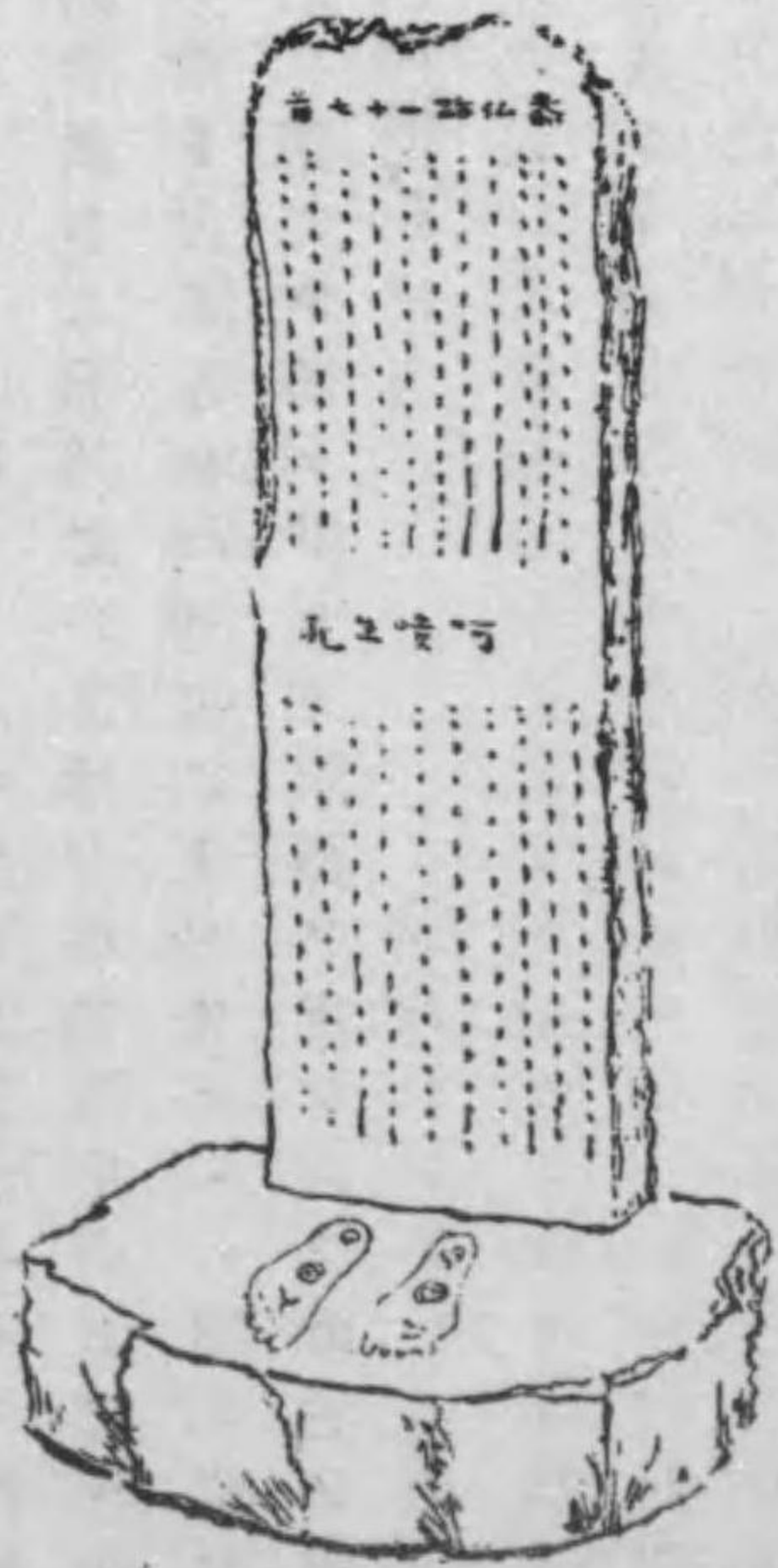
山階寺にある佛跡にかき付侍る

三十あまり二のすかたそなへたる  
ひかしの人のふめるあとそこれ

添下郡

佛跡碑圖

磐石高一尺八寸餘平面縱二尺五寸橫三尺二寸五分  
足跡長一尺五寸七分廣五寸三分  
堅石高六尺餘廣一尺五寸厚二寸



佛足圖中ノ文

千輻輪相

穀鞞相

具足魚鱗相

金剛杵相

足跟亦梵王頂相

衆蠶相

佛跡石前面ノ記

格界ノ外四面ニ佛像及蓮華文雲形文等アリ

釋迦牟尼佛跡圖

案西域傳云今摩揭陀國昔阿育王方精舍中有一大石有佛跡各長一尺八寸廣六寸輪相花文口相各異是欲涅槃北趣拘尸南望王城足所踏處近爲金耳國商迦王不信正法毀壞佛跡鑿已還生采彩如故又捐於河中尋復本處今現圖寫所在流布觀佛三昧經曰若人見佛足跡恩敬重無量衆罪由此而滅今俱非有幸之所致乎又北印度烏仗那國東北二百六十里入大山有龍泉河源春夏含凍晨夕飛雪暴惡龍常雨水災如來往化令金剛神以杵擊口暴龍聞口

佈歸依於佛惡心起齊跡示之於泉南大石上現其跡隨心淺深量有長短今丘慈國城北四十里寺佛堂中玉石之上亦有佛跡齋日放光道俗至時同住慶修觀佛三昧經佛在世時若有衆生見佛行者及見千輻輪相卽除千劫極重惡罪佛去世後想佛行者亦除千劫極重惡業雖不想行見佛跡者見佛行者步々之中亦除千劫極重惡業視如來足下平滿不容一毛足下千輻輪相穀鞞具足魚鱗相次金剛杵相此間有者字足痕亦有梵王頂相衆蠶之相不異諸惡是爲休祥

按スルニ西域記卷八摩揭陀國上摩揭曰窰塔波側不遠精舍中有大石如來所履双迹猶存其長尺有八寸廣餘六寸矣兩迹俱有輪相十指皆帶華文魚形映起光明時照昔者如來將取寂滅北趨拘尸那城南顧摩揭陀國蹈此石上告阿難曰吾今最後留此足跡將入寂滅願摩揭陀國也百歲之後有無憂王命世君臨建都此地匡護三寶役使百神及無憂王之嗣位也遷都築邑掩固迹石既近宮城恒親供養後諸國王競欲舉歸石雖不大衆莫能轉近者設賞迦王毀壞佛法遂就石所欲滅聖迹鑿已還平文彩如故於是捐棄殘伽河流尋復本處又曰烏仗那國耆揭釐城東北行二百五六十里入大山在阿波邏羅龍泉即蘇伐卒塔河之源也派流西南春夏合凍昏夕飛雪々々五彩光流四照此龍者、願爲毒龍暴行風雨損傷苗稼命終之後爲此池龍泉流白水損傷地利釋迦如來大悲御世愍此國人獨遭斯難降神至此欲化暴龍執金剛神杵擊山崖龍王震懼乃出歸依聞佛說法心淨信悟如來遂制勿損農稼龍曰凡有所食賴收入田今蒙聖教恐難濟給願十二歲一收糧食如來含覆愍而許焉故今十二年一遭白水之災

又曰荒城北四十餘里接山河隔一河水有二伽藍同名照枯蓋而東西隨稱佛像莊嚴殆越  
人王僧徒清肅誠爲勤勵東照枯蓋佛堂中有玉石面廣二尺餘色帶黃白狀如海蛤其上有  
佛足履之迹長尺有八寸廣餘八寸矣或有齋日照燭光明又曰劫比佗國精舍側有大石  
基長五寸步高七尺是如來經行之處足所履之迹皆有蓮華之文基左右各有小窠塔波帝  
釋梵王之所建也トアリ此等ノ記事ヲ參酌シ文ヲ成セルモノナリ

智識家口男女大小□□□□□□□□

大唐使人王玄策向中天竺□□□□□□□□

敬轉寫搭是第三本從天平勝寶元年歲次己丑七月十五日至二十七日并一十三日作了檀主  
從三位智努王天平勝寶四年歲次壬辰九月七日改之寫成文室真人智努 畫師越田安方畫  
寫 神石作主 歟不詳蓋工 □□□□人足 匠仕 歟未詳作 □□□□□□□□

二年遣右卒府長史王玄策使天竺至迦沒路國其王發使貢以奇珍異物及地圖新唐書曰太  
宗遣王玄策使天竺高宗又遣王玄策至其國摩訶菩提祠立碑マタ天中記曰唐顯慶中前融  
州黃水令王玄策使西域毗那黎國有維摩故宅以手板縱橫量之得十笏故號方丈云ト是レ  
ナリ之レニ據ルニ玄策ノ西域ニ使スル前後四回何レノ行ニ佛跡ヲ寫搭シ來レルヲ詳

ニセス黃文本實ハ日本書紀曰天智天皇十年三月黃文連本實獻水泉持統天皇八年以黃  
文連本實等拜鑄錢司續日本紀曰大寶二年十二月太上皇崩以黃文連本實爲作殯宮司ト  
アル人ナレトモ其唐ニ使セシコト國史ニ所見ナシ以テ史ノ闕文ヲ補フヘシ此款文中  
入唐ノ年月ヲ記セサレハ確言シ難シト雖トモ疑クハ天智帝ノ世ニアリテ水泉ヲ獻セ  
シ年ナランモ知ルヘカラス智努王文室真人智努共ニ同人ナリ續日本紀曰天平勝寶四  
年八月乙丑從三位智努王等賜文室真人姓同六年正月授從三位文室真人淨三先淨三ト  
名チ正三位又曰寶龜元年丁酉從二位文室真人淨三薨一品長親王之子也歷職內外至大  
納言年老致仕退居私第臨終遺教薄葬不受鼓吹諸子導奉當代稱之遣使吊賻之ト是ナリ  
同後面ノ文 格界ノ中十二行ニ刻

諸行無常諸法无我涅槃寂靜

石碑倭歌 廿一首分ツテ二段トナス上段十一行下段十行ナリ上段第七首ノ上ニ可噴生ノ三字アリ

美阿止都久留足跡 伊志乃比鼻伎波功德 阿米爾伊多利天 感都知佐閉由須禮 〇動知知  
波々賀多米爾父母 毛呂比止乃多米爾衆生



彌蘇知阿麻利布多知乃加多知○三十二相與見心地觀經卷第二夜蘇久佐等好同上十種會太禮留比止乃  
 之具足布美志阿止乃呂○是所諸麻禮爾母阿留加毛有也  
 與伎比止乃麻佐米爾美耶牟○善人正所自見善人言諸佛菩薩美阿止須良乎  
 美須豆○我不伊禮爾惠利都久  
 己能美阿止○此夜與呂豆比賀利乎波奈知伊太志  
 毛呂毛呂須久比和多志多麻波奈○是願須久比多麻波奈是願  
 伊古奈留夜比止爾伊麻世可○如何人伊波乃宇閉乎  
 留良牟○遺多布刀久毛阿留可  
 麻須良乎○也○日本紀調師丈夫如來十號之一須々美佐伎多知布賣留阿止乎  
 波牟○信敬見之多太爾阿布麻天爾直相達麻佐爾阿布麻天爾正相達  
 麻須良乎○乃布美於耶留阿止波  
 美都々志乃○霜止之令見奈賀久志乃霜止  
 己乃美阿止乎多豆爾毛止米豆○此尋求與伎比止乃  
 胃豆牟○欲參吾亦毛呂毛呂乎爲豆  
 舍加乃美阿止○釋迦伊波爾宇都志於伎  
 都良牟○後佛言彌勒佛後佛佐々義麻宇佐牟  
 己禮乃與波宇都利佐留止毛○雖此世止已止波爾久  
 多米○後世爲麻多乃與乃多米

麻須良乎乃美阿止○末○行此哥係上減段  
 佐伎波比乃阿都伎止毛加羅○厚○麻爲多利互  
 乎○以○足跡之微小山田氏○字禮志久毛阿留可  
 乎○遲奈伎夜○平○遲奈伎日本紀○和禮爾於止禮留比止乎於保美  
 都志麻都禮利○寫○奉○都○加○閉○麻○都○禮○利○也○奉  
 舍加之美阿止○奉○釋迦伊波爾宇都志於伎  
 久須理師波○尼○奉○釋迦伊波爾宇都志於伎  
 經師法花經佛爲藥王又遺教多布止可理家利○尊哉○米○大○志○可○利○雞○利○敬○哉  
 己乃美阿止乎○此○麻婆利麻都禮婆  
 中之於母保由留可○可○想○美○留○期○止○毛○阿○留○可  
 於保美阿止乎○尊○大○美○爾○久○留○比○止○乃○見○人○來○伊○爾○志○加○多  
 會伊布○消○乃○會○久○止○叙○伎○久

阿噴生死  
 比止乃微波衣賀多久阿禮波○人○身○乃○利○乃○多○乃  
 與都乃閉美○四○大○也○蛇○即○伊○都○乃○乃○毛○乃  
 多奈伎微乎婆○之○身○汚○穢○伊○止○比○須○都○閉○志○捨○之

伊賀豆知乃比加利乃期止伎己禮乃微波○如電光是身無常念念不住如電光云是志爾乃於保伎美都爾多  
具霸利也○死王常比之小山田氏以多具霸利其訓亦通死王言死於豆閉可良受夜○可平  
○都○善人佐麻佐牟我多米爾○為覺悟也此歌係下段末行石缺片落  
○比多留比○乃多爾久須理志毛止牟  
○乃多爾久須理志毛止牟○是求與伎比止毛止無

西大寺 伏見村大字西大寺山秋篠ニアリ高野寺ト字ス高野ハ地名ニシテ名勝タリ平城七大寺ノ其一ニシテ天平神護元年孝謙帝ノ勅願ニ成ル

當寺流記資財帳寶龜十一年十二月二十五日勅奏曰夫西大寺者平城宮御宇寶字稱德孝謙皇帝去天平寶字八年也九月十一日誓願將欲造七尺金銅四天王像兼建彼寺矣乃以天平神護元年創鑄件像以開伽藍也居地參拾壹町在右京一條三四坊東限佐貴路限東北角南限一條南路西限京極路八丁北限京極路

嘉元々年十一月二日ノ太政官符當寺ニ下ス所西大寺文書ニ載ス曰ク得彼寺所司等去月十三日奏狀備當寺孝謙皇帝勅願之仁祠也草創年舊與正菩薩練行之戒場也木乃日新蓋法水東流之初惠燈已挑之昔本願聖主手自鑄彰金銅七尺四天王之靈像擬異賊之防禦而被造立藍舍三百餘宇之紺殿祈本朝之安泰、、、、當寺者天平神護元年御建立於六十餘州各被付寺領其內以秋篠山被付當寺國印流記官符圖書明白也、、、、本ト金銅ノ四天王像ヲ本尊トナセシモ今ハ釋迦牟尼佛ヲ正堂ニ安置セリ創始當時ノ伽藍資財等ハ自ラ流記資財帳ノ存スルアレハコ、ニ贅スルヲ要セス承和十三年十二月十一日伽藍炎上ス再建ノ時代詳カナラス貞觀二年燒失後大ニ衰微セシヲ嘉禎二年ニ至リ

與正菩薩之ヲ再興ス依テ與正ヲ以テ中興開基ト稱セリ七大寺巡禮記ニ、  
西大寺 大和國平城右京一條四坊下郡 金堂號兜卒天宮安彌勒淨土相也抑件等者孝德天皇御願也云

云件堂顛倒之間本願安四王院也今之金堂是號四王堂也  
四王院 號四王堂本尊者金銅四天王像高七尺三寸本身吉祥天女也件像者平城天皇御宇寶字稱德孝謙皇帝去天平寶字八年九月十一日誓願造七之金銅四天王像口建此寺  
天平神護元年佛堂造之云云天平寶字大炊天皇御宇也非孝謙御宇也四王堂本尊丈六十一面觀世音像也又佛舍利在之號四王堂之舍利自每年五月一日至晦日三十ヶ日之間為天下太平奉講最勝王經是與正菩薩所始也又八寸四方黑塗箱在之付封菩薩之封也口傳云最勝王經也

光明真言堂 本尊釋迦如來立像也件堂者與正菩薩建立也自每年八月十八日七ヶ日夜不絕光明真言在之彼菩薩末流修之云云正應三年八月二十五日叡尊口圓房上人入滅贈號與正菩薩  
真言堂 兩界曼陀羅八祖影木案之東西仁在八天像是弘法大師筆也本尊舍利也入八厨子又在厨子一天照大神也又五大尊像弘法大師筆  
五重一基 件塔者在光明真言堂前與福寺法印建立之  
文珠堂

西室 件室者在光明真言堂西與正菩薩坊也云云則安菩薩影也又在五之鐵塔安舍利入五瓶也此舍利者菩薩自十方相傳之舍利云云又在愛染像二尺並有口傳也

中門 在四王堂前安二天像同東大寺也

八幡社 件社者在寺東二月初午參此社而致祈禱也

ト巡禮記ハ大乘院尋尊僧正長祿應仁ノ筆記ナリ以テ當時ノ規模ヲ見ルニ足レリ寺傳述考ニニ與正再興ノ後文龜中堂塔燒失シ其再興ヲ知ラス唯觀音堂ハ延寶二年ノ造營ニ

係ルト云フ其盛時ニ當リテ他ノ巨利ト頡頏セシモ星移リ物換リ寺領僅カニ三百石ヲ有

シ一タヒ與福寺末タリシカ今ハ獨立シ眞言宗ノ一本寺タリ

雜事

寺ニ百濟豐虫カ筆ニ係ル光明寂勝王經アリ題ハ本願孝謙帝ノ宸翰ト云フ巡禮記ニ所謂

八寸四方黒塗箱在之付封菩薩之封也口傳云最勝王經也トアル是ナリ其跋屋代弘賢ノ道ノ

維天平寶字六年歲次壬寅二月八日菩薩戒佛弟子百濟豐虫奉爲二親敬寫法華經一部金

光明最勝王經一部金剛般若經一卷理趣般若經一卷本願藥師經一卷合二十一卷莊嚴既

了伏願憑斯勝因奉資冥助永庇菩提之樹長遊般若之津又願上奉聖朝恒迎福壽下及寮采

共盡忠節又豐虫自發願言弘濟口淪勤除煩障妙窮諸法早契菩提乃至傳燈無窮流布法界

聞名持卷獲福消災一切迷方會歸覺路

又西大寺文書全部二卷アリ其中歷史上碑ヲナスモノ二三ヲココニ掲ク

筑後國竹野庄地頭職任先度勅裁知行不可有相違者天氣如此仍執達如件

正平八年十月九日

右 中 辨 在判

西大寺長老上人御房

丹後國志樂庄内春日部村可令知行給之由 新待賢院令旨所候也仍執達如件

正平八年十月九日

右 兵 衛 督 在判

西大寺長老文曜上人御房

西大寺領大池用水事秋篠南英尊等依致種種々狼藉可有其沙汰之處自今以後對寺家不可

現不忠之旨捧英尊條々告文上筒井順覺執申之間被聞之者也向後背請文之旨致非儀者

云順覺云英尊等可被處嚴科之可有存知之由被仰下候執達如件

應永二十七年七月十日

沙 彌 在判

當寺長老

西大寺雜掌申光明眞言料所國中散在田畠并寺領當寺敷地等事近年依國物惣當知行有

名無實云云太不可然早致糺明所申無相違者如先可全寺家所務於有子細在所者可被注

進之由所被仰下也仍執達如件

永享十一年八月二十二日

左 兵 衛 門 尉 在判

右 衛 門 尉 在判

筒井殿

○西隆尼寺址 寺ノ乾角字尼谷ニアリ三代實錄ニ元慶四年四月令屬西大寺爲浣濯法衣

所ト是レナリ

大 木

さりととも西の大寺たのむかな

添 下 郡

そなたのねかひともしからじを

唐招提寺

都跡村大字五條ニアリ古ハ唐律招提寺ト稱ス我カ國十五大寺ノ其一タリ。類聚  
符宣抄所載寛仁元年西大寺衰微ノ後チ當寺ヲ以テ平城七大寺ノ一ニ加ヘラル。僧正應仁二  
年十月十五日事既ニ東大寺ノ條下七大寺ノ辯ニ述フルカ如シ天平寶字三年八月三日唐ノ  
律僧鑑真聖武帝ノ奉爲ニ新田部親王ノ舊宅ニ就テ創建スル所ニシテ廬舍那佛ヲ本尊ト  
ナス實ニ我カ國律宗策初ノ伽藍タリ後チ幾沿革ヲ經一タヒ興福寺ノ末寺トナリシモ寺同  
記今ハ律宗唯一ノ本山トナレリ。

日本後紀曰延曆二十二年正月戊戌律師傳燈大法師位如寶言招提寺者斯大唐和尚鑑真  
爲聖武皇帝所建也天平寶字三年勅以沒官地賜之名爲招提寺又以越前國水田六十町備  
前國田地十三町宛給供料令學式法。

鑑真東征傳曰寶字元年丁酉十一月二十三日勅賜備前國水田一百町大和尚以此田欲立  
伽藍時有勅旨施大和尚園地一區是故一品新田部親王之舊宅也普照思託請大和尚以此  
地爲伽藍長傳四分律藏法勵四分律疏鎮道場飭宗義記宣律師鈔以持戒之力保護國家大  
和尚大好即天平寶字三年八月一日私立唐律招提名後請官額依此爲定還以此日請善俊  
師講件疏記等所立者今唐招提寺是也

七大寺巡禮記曰招提寺以新田部親王舊宅給鑑真和尚建立招提寺云云大和國平城右京  
五條二坊添下郡  
伽藍開基記曰和州招提寺者天平寶字三年八月鑑真和尚薦聖武上皇所建也初以皇子儀

同新田部王舊宅賜眞迹上皇崩成佛寺諸公卿及沙門等共營

堂 塔

金堂 元亨釋書曰大殿者唐僧如寶建安丈六廬舍那佛

巡禮記曰金堂五間四面本尊廬舍那佛脇士尺迦千手各丈六件千手者天人自天下而造之  
云云又云化人造也名云竹田佐古女造之云云脇士尺迦者藥師佛也云尺迦事僻事也天平  
寶字三年八月三日鑑真和尚建立云云

招提寺緣起 廣和名曰後光ニ千佛ヲキザミ背後ニ二千體三千佛ヲ畫ク左脇ノ藥師如  
來ハ唐思託ノ作右脇ノ千手觀音菩薩ハ天人ノ所造ナリ

講堂 釋書曰講堂者捨平城朝集殿而成彌勒及二菩薩脇士唐法力所造也

巡禮記曰講堂七間四面在金堂北本尊金銅彌勒三尊、  
絹索堂 釋書曰絹索堂者藤清河施家安金色不空絹索像并八部神衆

巡禮記曰伴堂安不空絹索并商伽羅王像昔東大寺與招提寺相論之時彼商伽羅王往於東  
大寺云云伴堂今無之寛仁二年之記如之也

食堂 釋書曰食堂者藤仲公捨家屋而成  
塔 日本後記曰大同五年夏四月遣散位從五位下江沼臣小並等造招提寺塔

巡禮記曰三重塔在鎮守社西方又龍池有之向此池而祈雨必令成就云云當寺舍利配分奉  
納當塔也  
經藏 釋書曰經藏者唐義靜造之納佛舍利半合及佛菩薩像經論律論一切寶物

添下郡



寺ノ戒壇院ヲ建テ又當寺ヲ創立シ僧正ニ補セラレ天平七年五月六日入寂年七十七事

續日本紀鑿真東征傳元亨釋書ニ詳カナリ

菅原寺 伏見村大字菅原ニアリ一ニ喜光寺ト名ツク阿彌陀佛ヲ本尊トナス志ニ引ケル緣

起ニ據ルニ靈龜元年釋行基建ツル所ナリト蓋行基カ畿内ニ於テ創立セル四十九所ノ其

一ナラン天平二十一年行基當寺ノ東南院ニ寂セシコト元亨釋書ニ見エタリ寺領ニ關シ

テハ類聚國史ニ延曆十一年四月丙戌在攝津國島上郡菅原寺野五町、久載寺帳

或世爲家野因隨口給之ト其他記錄ニ所見ナシ慶長中幕府寺領三十石ヲ寄進セラレ

秋篠寺 平城村大字秋篠内矢部ニ在リ阿彌縛狗山ト號ス光仁桓武兩帝ノ本願寶龜十一年善

珠僧正ノ開基ニ係ル本尊藥師佛ハ行基ノ作ト云ヒ眞言ヲ宗トシ秋篠寺眞言院ト稱ス

緣起曰和州添下之郡阿彌縛狗山秋篠寺眞言院之緣起

夫治國慈民君子之行業興法利生菩提之悲願也粵和陽陀陀縛狗山秋篠寺眞言院之伽藍

者往昔人王四十九代光仁帝同五代桓武帝兩聖主之御願而鎮護國家之靈場利濟黎元

之精舍矣而其開基善珠大德殊者妙通八五三六之源旨深達三十三過之蘊奧遂博該三藏

特隱活宗趣因於相宗爲本朝第一祖也光仁帝寶龜十一年奉勅開斯靈場事載之於別記矣

蓋當寺本尊者行基菩薩之造彫藥師如來之真容也鍾時七堂双覺佛閣輪乎巍々四境構門

壁樹卓爾森々是以參詣之人寶前成市供養之輩爾拜側肩三寶供奉之恩澤特厚投三千有

餘之俸祿以寄附於後代僧舍亦一千餘區交誓以繁焉自爾以降者由來尙矣雖然世垂澆季

而興廢時移盛衰物換嗟夫保延元年六月中浣魔風頻扇兵火忽起而一山既成焦土稍得以

奉出於諸堂之尊像且防助講堂一字故令達之於寂問便課於工匠以不日成再建香水閣及

修理本堂焉耳然七堂不全復於舊制也嗟呼惜矣乎

于時保延五己未歲正月八日

秋篠寺

案スルニ西大寺流記資財帳寶龜十一年十月寺家勘奏ニ田園山野圖柒拾參卷、、、、一卷添下

郡儉伽山寺白紙一卷同郡阿彌陀山寺白紙一卷同郡秋篠山白紙トアルヲ嘉元元年十一月

太政官ヨリ彼西大寺ニ牒スル文西大寺ト當寺ト數地爭論ニ關スル官符ナニ曰ク抑件山内

當寺二箇末寺阿彌陀山寺瑜伽山寺者本願天皇本願ヲイフ草創之仁祠秋篠山同時御寄附

之伽藍也流記文明白云云又曰ク當寺西大寺者天平神護元年御建立於六十餘州各被付

寺領其内以秋篠山被付當寺國印公證ヲ云流記官符圖書明白也秋篠寺者經十六箇年寶龜

十一年於秋篠山之麓被立小寺假彼山之名字稱秋篠寺然則件山者爲西大寺根本之舊領當

知行古今無改之處彼寺輩迷字號構奸謀康平七年隱秋篠山之舊名立大山田之新號掠申通

勝之四至奪當寺之一山云云ト見ユコレニ據レハ當寺ハ本ト西大寺ノ一山内ニアリシナ

リ

寺領

續日本紀ニ靈龜十一年戊戌勅封一百戸永施秋篠寺類聚國史ニ延曆十七年十一月壬申大和國添下那荒廢公田二十四町舊地一處入秋篠寺永爲寺田ト見エ降リテ徳川氏ニ至リ寺領百石ヲ寄附ス

西松尾寺

矢田村大字山田尾ニ在リ補陀落山ト號ス延喜式ニ松尾寺料二千八百束ト即此

養老中舍人親王法隆寺僧永承ト共ニ創建スル所ナリ

伽藍建立記曰右寺一品贈太政大臣舍人親王與斑鳩寺永承爲師檀上奉爲開闢以來天皇次奉爲後世相繼天皇次爲國家安寧萬民饒樂下爲利益無邊法界含識有情誓大願建立斯伽藍斑鳩寺前院以遠世不朽而爲修治永代令誓護國家永業誠恐惶留置緣起

天平寶字元年正月十三日 內供奉十禪師修行傳燈賢大法師行業

法隆寺東院緣起資財帳曰略上行信大僧都門人弟子師資相傳、、、、院事修行賢大

禪師位永業與一品舍人親王建立西松尾寺、、、、

古今目錄鈔書曰法隆寺之北去十餘町山上有寺名西松尾寺亦補陀落寺形似彼山故爲名

天武天皇第五皇子舍人親王與其御妹兩人之御願也○但コニ舍人親王其御妹

千手觀世音菩薩ヲ本尊トナス伽藍建立記東院緣起ニ據ルニ本ト法隆寺ノ別院ニ屬セシ

ヲ中世ニ至リ興福寺末タリ興福寺今ハ眞言ヲ宗トシ紀州金剛峯寺ヲ本山トナス

長弓寺 北倭村大字上村ニアリ本ト眞弓山長弓寺ト稱ス十一面觀音ヲ本尊トナス創立ニ

異說多シ寺家ノ緣起ニ

和州添下郡眞弓山長弓寺緣起

夫至聖之應世也無方而應々必待緣精舍之創基也依人而起々亦有由是以異域本邦佛閣

營構之繁俱有致由並皆無非資皇祚昌國家之基也凡僧伽精藍悉官宇也方國靈區宏壯嚴

麗與宮闕角遂者良有以也粵和州添下郡眞弓山長弓寺者 聖武皇帝之勅願天平年中之

開基也當時宇多郡有怪鳥數來此山食荒田穀野草損害頗多鄉黨黎民相與愁之遂達 天

聞甚惱宸襟廼勅置鳥見居田圃側而守稻梁防於富小川邊今言上鳥見中鳥見從是改稱曰

鳥見河雖然惟鳥損害猶未止矣於茲 皇帝親自乘御白馬且帶弓箭行幸斯山狩西北嶺東

逐南驅將射之矣時惟鳥忽化爲金色鷹自出和雅音而謂言我是威德自在佛法衛護神也爲

令懲世惡不怠民產業故假示此相矣言訖翔空北留高山即現入幡大菩薩身因建寶祠至今

敬崇焉于時 皇帝御馬腕于株杭進退惟窮帝甚怪異而自誓言曰馬蹄無恙進行得平當就

此山創於精舍以爲興法利生之地應時斯馬進步如故叙感以不少也廼稱其地曰利生峰

皇帝篤信不違誓約乃於東南麓穿崑夷嶮締構伽藍勅行基菩薩用白檀木刻鑿大悲觀音十

一面像以爲本尊長三尺有三寸也更建立牛頭天王八王子之宮祠以爲鎮守造營既成落慶

供養實天平庚午歲十月十八日也蓋其本尊頂上之佛面者皆以皇帝所持御弓彫之造之山

稱眞弓寺號長弓寺職斯由也東去寺門六町餘塚埋彼御弓木屑之處稱眞弓塚南北狹東西

長而穹窿宛似弓其塚之南名眞弓岡茫浩佳景不可勝計古今英士風詠策多矣爰 桓武天

皇御宇贈太政大臣藤原朝臣良繼公者殊爲此寺檀主飯敬渴仰觀自在尊伽藍界中興廢補

闕因茲至于堂宇門廊鐘樓層塔無不備足亦令佛工彫刻佛菩薩天等像所謂彌陀釋迦丈六

大像地藏薩埵影見觀音持國廣目增長多聞現所安置于本堂者是也加旃奏之禁廷而寄莊

田七百戶以充于供養承事之資爾來日々妙供夜々明燈未曾怠歇矣又吾弘法大師大同元

年飯朝之後勅流通傳來秘密教乘由斯優遊處々開演密法適屆于慈慧留持念矣乃於大悲

宮殿左右扉圖繪二部大曼陀羅又本尊種子之字鐫於金版堂中懸之又手造阿遮羅明王之

尊像威貌奮然兮今安置護摩堂且勸請於善女龍王辨財天女及一言主熊野權現亦爲此山之鎮也寔是萬代不朽之盛業者乎也雖然星霜屢相換歲序既推移塔靈社將廢亡也時人皇第九十代後宇多院忝賜勅宣令儀口氏鶴山氏和田氏下司氏四姓苗裔至今爲當寺沙汰人也修營既畢弘安歲次己卯春二月二十五日勅一山衆僧始行法花八講因附田若干頃以爲法花經營之料今西山麓稱遂爲每歲之恒規也又本堂一隅別構道場爲法花受持之處安置釋迦牟尼善逝普賢文珠及十羅刹女日轉妙經或書寫之特抽寶祚長遠國家安寧之丹心、

ト見ユ要スルニ天平二年十月十日聖武帝ノ勅願ヲ以テ行基之ヲ創始シ藤原良繼ノ興復スル所ナリト云フニアリ、寺家世々尙之ヲ祖述シ以テ今日ニ至レリ、然リト雖トモ此緣起文ハ後人ノ作ニ係リ其言フ所牽強附會ニシテ信スヘカラサルモノ多キニ居ル、鳥見ハ一ニ登美、富ニ作リ本ト長髓彦ノ占有セシ所ナリ、長髓彦ノ一名ヲ登美比古ト稱スルモ亦地名ニ因メルナリ、決シテ田園ヲ守リ衆鳥ノ害ヲ防クモノ、職名ニアラス、八幡神ノ怪鳥ニ化シ更ニ金色ノ鷹トナリ佛法ヲ擁護セント告ケタリト云ヘル如キハ最無稽ノ甚キモノニシテ是レ高山一ニ鷹山ニ作リ八幡社彼處ニアリシニヨリ之ヲ附會セルモノナリ、且所謂弓塚一名眞ハ饒速日命ノ墳墓ニシテ其遺物タル弓矢ヲ埋藏セシヲ以テ名ケラレタル事陵墓部ニ詳カニ述ヘタルカ如シ、然ルニ當寺ノ開基ヲ行基トスルニヨリ聖武帝ノ遊薦ニ假托シ、帶フル所ノ弓ヲ以テ十一面觀音像ヲ刻ミ本尊トナシ其弓ノ木屑ヲ埋メシ處ナルニヨリ之ヲ眞弓塚ト名ケタリト云フハ構得テ巧ナリト謂フヘシ、緣起文ノ捏造附會既

ニ斯ノ如クナレハ其天平二年聖武帝ノ勅願ヲ以テ行基之ヲ創始スト云ヘルモ果シテ然ルヤ否未タ悉ク信スルニ足ラサルナリ、而シテ去ル明治二十四年寺僧カ山城國相樂郡木津今井氏所藏ノ記錄中ヨリ發見セシ眞弓山長弓寺記ト題スルモノニハ、

抑大和國添下郡高山郷上村眞弓山長弓寺相尋其濫觴人皇第十七代大鷦鷯天皇仁德四十三年秋九月庚子朔日依網屯倉阿弭古捕異鳥則獻天皇此鳥捷飛而掠諸鳥故授酒君王於河內國交野令飼之給未幾日異鳥立而不知其所在其地河內國交野鳥立原稱地名猶存在彼鳥留大和國宇陀縣室生深山亦宇陀野止栖良經歲月異鳥亦來住河內交野掠群鳥農作並妨人倫故人皇五十代天璽國押開豐櫻彦天皇聖武帝馭宇時天平十八年春三月己未河內國之守護大伴宿禰異鳥到居所追之近境大和國會富縣遁入山中深林止居繁樹大伴宿禰所携帶以眞弓射異鳥雖中其矢不死忽放大金光明翔大虛遙飛行相去國守仰觀彼鳥成思奇異歸河內居館其夜大伴宿禰枕邊白髮老翁衣冠正立告曰宿禰以眞弓所射鳥者我神子大鷦鷯天皇愛之所令飼養靈鳥也與告給國之守老翁何來何人坐ヤト問之應而曰吾神自宇佐移東大寺今又遷座鷹山地八幡大菩薩ナリト告玉フト見夢覺タリ大伴宿禰恐愕之餘奏聞其旨天皇寂感不淺則橋左大臣諸兄公ニ詔坐而伽藍堂塔樓閣大樓門創建行基大和尙開基之故眞弓山鳥弓寺與勅號下給則內大臣藤原良繼公ニ詔アツテ眞弓山爲資產於當國高市郡寄之給故現在今眞弓村與稱スルハ則是也然後人皇五十代日本根子皇統珍照天皇桓武帝延曆六丁未年冬十月河內國交野御遊獵行幸之途路於眞弓山近邊不進龍馬故鳥弓寺ヲ觀覽坐而御幸ヲ奉幸所之橋朝臣淨野ニ何寺ナルヤト勅問アリ淨野



謹而曰聖武帝御願行基菩薩ノ創立ナリ異鳥ヲハ河内國守大伴宿禰以真弓所射放光明八幡宮神託アリシ由縁之旨ヲ奏上ス桓武帝真弓山ヲ遙ニ合掌シ玉ヲニ忽龍馬得勇進事、叙感之餘鳥久寺ニ行幸則禮佛ヲ給ヘリ、、、、、然後人皇五十一代日本根子天排國高彥天皇御諱いはいはいはいはい、是平城宮馭宇大同元年冬十月釋空海於東大寺大佛殿廬舍那神變加持ヲナシ同十一月朔入鳥弓寺而尊前ニ六波羅密經誦之然後人皇八十五代後堀川院天皇依御歸依伽藍修繕大般若六百卷鳥久寺ニ施入跋曰維時貞應三年太政大臣源良經然後關白基通公山城州普賢寺館居真弓山御歸依承元三年春正月幔幕寄附之普賢寺基通公息男普賢寺左中將元通卿仁治元年七月朔日燈籠鳥久寺ニ奉納タリ弘安四年辛丑年秋八月朔蒙古國軍兵十萬人兵船六萬艘寇入九州之刻諸寺諸山祈願則於真弓山鳥久寺衆徒等退散抽懇祈其文曰

今海外之惡波寄九州古今未聞也佛陀乘冥助退賊千里之外衆徒等懇祈丹誠可相抽者也依執達如件

弘安四年八月

陸奥七郎業時在列  
新相模三郎時村在列

真弓山鳥弓寺衆徒中

正平七年閏二月南帝天王寺行幸北畠顯能率軍兵供奉到城州八幡急攻北軍細川賴春戰死足利義詮恐怖而奔近江國吉野帝同年五月出入幡間道鷹山鳥弓寺ニ入御夫ヨリ南都興福寺御一宿河内交野郡津田在城楠正儀真弓山寄祈願狀

祈願之事

尊氏義詮以下凶徒等南帝奉腦宸襟臣苟奉 勅命雖籠一城其功遲速乘佛陀之冥助得勝不日之中大衆誅罪可抽丹誠懇祈申行恩賞者也惶頓首

正平七年五月五日

楠 正 儀在列

真弓山鳥弓寺衆徒中

文明五年丑春二月朔日山名宗全方落者淀山崎交野關ヲ据タルヲ以テ自普賢寺谷經山路高山鳥弓寺亂入諸記錄重寶等破壞此刻紛失ス天正五年織田信長真弓山寺中八坊共寺領被沒收中興ヨリ鳥弓寺ヲ鳥久寺ト誤書シタリ

右真弓山長弓寺者南朝行幸依有其由縁今度於東大寺尊勝院以錄其來因萬世龜鑑相備不朽置者也

時文祿二癸巳年春正月上澁穀旦

小倉王裔孫  
波瀬曹子熙具王  
覺 任 花押

トアリ、草創ヨリ文明マテノ沿革畧ホ徴スヘキモ其創立ノ年月ヲ天平十八年三月トナシ  
寺家ノ縁起ト相違シ、且其言フ所ハ日本書紀ニ載スル仁德帝ノ時依網阿珥古カ韓國ヨリ齋ラシ歸レル鷹ヲ秦酒公ニ飼養セシメシ事蹟ヲ基本トナシ、コレニ鷹山八幡宮ノ靈驗ヲ

附會シ更ニ之ヲ敷衍シ聖武帝ノ本願ニヨリ行基ヲシテ創立セシメシト云フ例ノ浮屠氏ノ套語ヲ以テ捏造セルモノニシテ此亦固ヨリ信スルニ足ラサルナリ然ルニ東大寺所藏春華秋月抄ハ權大僧都宗性自筆ノ記錄宗性ニ當寺ノ勸進文案ヲ載ス曰ク

奉唱

請外家 知識合力助成炎上後三間四面堂如本造營并雖買儲瓦木餘物依事闕缺未及造葺之用途狀

右當寺者贈太政大臣藤原朝臣緒繼公之御建立也故老傳云聖武天皇御宇天平 年於添下郡 見山 大臣狩獵之間嶮路追鹿奔駕不留忽登 像建立堂舍祈請速至感 不能返下

百年之命一時欲盡心中發願云大悲觀音爲我 上後日尋來歷覽地形剏彼檀弓爲 面觀

音歸依渴仰晝夜禮敬至天平 得奇異靈水乞長谷寺觀音御衣木之殘 造等

身觀音以彼小像收其御身立伽藍於孤 雲 舟棘於 露號長弓寺俗稱檀弓吠獵

遂成善提心之善緣弓箭者武 大悲者之尊像其名聞于隣國

其驗 去養和之比不圖炎上雖 免其難仍氏人等各抽最負之誠 之功木

瓦料千餘支詭商人雖調設至 空其計略所仰者三寶之冥助也所憑者四隣 力也各

加織芥蓋修大功嗚呼昔忝構天子外祖之精舍今空似田夫野人之蓬屋時移事去不可不悲

者奉唱如件

貳年

沙門 阿彌

ト見ユ□□貳年ハ寛元貳年ノ盡餘ニシテ藤原緒繼ハ藤原良繼ノ誤ナルヘシ此勸進狀ニ據レハ藤原良繼嘗テ鳥見山ニ遊獵シ獲ヲ貪リ深ク山中ニ入り誤テ路ヲ失ヒ殆ント一命ヲ墜スヘカリシヲ觀音ニ祈誓シ遂ニ其難ヲ免レシニ依リ齋ラス所ノ檀弓ヲ以テ十一面觀音像ヲ造リ居常之ヲ崇敬セシカ後チ長谷ノ觀音ノ御衣木ノ餘材ヲ乞ヒ等身ノ觀音像ヲ造リ彼檀弓ノ小像ヲ之レカ體中ニ籠メ以テ本尊トナシ伽藍ヲ建立シ之ヲ安置セルカ即チ是當寺ノ草創ナリト云フニアリコレヲ寺家ノ緣起及長弓寺記ニ比スルニ差勝レルヲ覺フ

創立後養和中火災ニ罹リ伽藍燒失セシモ本尊ハ其難ヲ免レシコト上ニ引ケル勸進狀ニ見ユ再建年月詳カナラス往時境内ノ四至ハ東ハ真弓岡ヲ限リ西ハ富小川ヲ限リ南ハ八王子ノ社前ヲ限リ北ハ龍王山ノ峯ヲ限リトシ若干ノ寺領ヲ有セシモ天正五年織田氏ノ爲メニ沒收セラレシトナリ 往時以下假名錄 德川氏治世ニ於ケル規模及ヒ年中行事ハ左ノ如シ但現在ノ建物ハ△△神佛分離ニ係ルモノハ△△ノ符號ヲ附ス他ハ皆廢絶セルモノト知ルヘシ

延享三年二月寺院本末御改帳曰

松平美濃守殿領分

添下郡鳥見谷上村

真弓山長弓寺

一開基 京仁和寺菩提院末寺眞言宗 人王四十五代聖武 皇帝之御勸願所

添下郡

一開山 當行基善薩天平二年庚午御建立其後人皇五十代桓武天皇御宇藤原朝臣良繼公

一本堂 △八間四面本尊十一尺迦音御長三尺寸也

一境內御除地 東西六町南北四町

一大鳥居 ×二間高サ一丈三尺此鳥居申候

一三重塔 △二間四方本尊大日如來

一護摩堂 △三間四方本尊不動明王弘法大師御作此堂七

一鐘樓堂 △壹間半四方

一牛頭天王 ×二間四方

一一言主宮 ×五尺四方

一樓門 ×桁行六間

一僧座 △桁行四間半

一辨財天宮 △三尺四方

一龍王宮 △五尺四方

一坊舍 二十軒ハタハミ置屋鋪計十

西福院 △眞言院

圓生院 △福壽院

一總門 △內間二間但小門アリ

一八王子宮 ×壹間半四方

一石ノ鳥井 ×高サ一丈一尺內間一間半

一舞臺 ×二間四方

一氏子座 ×桁行八間三間

一熊野權現宮 △一間四方

寶光院 △法花院 △

藥師院 正覺院

東光院

無住

西之坊

圓觀坊

千壽院

不動院

前之坊

尾崎坊

竹之坊

東福院

地藏院

阿彌陀院

辻之坊

末寺 添下郡三碓村眞福寺

右之通御座候尤寛永十年ニ本末御改之節如何書上候哉書留無御座相知レ不申候尤江

戸表觸頭無御座候

添下郡長久寺役者

年預 庄屋 年寄

延享三年丙寅二月

南都

御番所様

長久寺年中行事 當寺假名緣起 曰

一修正會 三ヶ日 十八日

初夜導師 悔過加持 大懺悔

後夜導師 法用 三十二相持等

添下郡

一修二會十八日

一常樂會

一佛誕生會

一夏中出仕一萬二萬衆僧臨番  
如法經聖每日已刻參集

法花懺法 舍利講式  
舍利禮 同和讚

一佛名會 十二月朔二三日

一每日晨朝香花供半月々々臨番  
七萬八萬勤之

一如法經堂每日兩上期三箇  
年一人勤修之

如法經堂 觀音堂 鎮守寶前

祈念之趣旨

金輪聖皇 寶祚長遠 大樹幕下 息災延命

寺内安全 人法繁昌 五穀成就 萬民豐饒

鎮守祭禮

一若宮八王子 八月十七日祭禮

一一言主 九月九日祭禮

右兩社之神職者上郷下郷頭人座上隔番任之諸役免除之也

一大宮牛頭天王 九月十一日祭禮

神職者衆僧一薦之任也三郷各有頭人一箇年中精進齋至九月十一日奉供圓鏡饗膳奉幣帛神馬之渡也

正徳五乙未年四月二十四日

豊山長谷寺中性院第十七世

僧 正 隆 慶 圓

トアリ以テ其大要ヲ知ルヘシ。

金剛山寺 矢田村大字矢田ニアリ因テ矢田寺ト字ス寺傳ニ天武帝ノ本願ニシテ釋智通ノ

開基ト云フ七大寺巡禮記ニ矢田寺本願者天武天皇也本尊安十一面觀音也又地藏菩薩者

滿米上人本尊也ト見エ古ヘハ觀音ヲ本尊トセシモ今ハ地藏ヲ以テ主トナス地藏ノ靈驗

及ヒ當寺創立ノ事元亨釋書及ヒ緣起ニ載スレトモ今コレヲ取ラス興福寺末寺記ニ矢田

金剛山寺末寺トアレハ中世同寺末タリシモ今ハ眞言宗福智院末寺ニ屬ス。

東明寺 矢田ノ屬邑東明寺ニアリ鍋藏山ト號ス相傳フ舍人親王ノ創立ト寺ニ黛紙銀泥法

華經ヲ藏ス親王ノ染筆ト云フ志果シテ然ルヤ否今藥師佛ヲ本尊トシ眞言宗福智院ノ末

寺タリ。

靈山寺 富雄村大字中村ニアリ鼻高山ト號ス藥師佛ヲ本尊トナス本願ハ聖武帝ニシテ行

基ノ創建スル所ト云フ。

和州寺社記曰添下郡靈山寺寺領百石  
坊舍十四軒鼻高山靈山寺は聖武天皇の御草創開山は行基

菩薩也行基金の鼻高を埋給ふ故に鼻高山と名付寺號は天竺の靈鷲山を移さるゝよし

本堂の本尊は薬師如来秘佛の尊像脇士は観音勢至十二神將其外二天も有聖武建立の堂は零落して其後弘安年中再興有し堂也、、、、境内は東西拾町餘南北五町程有よし真言宗にて坊舎十四坊有

因云金鼓ノ銘ニ據ルニ今ヨリ四百九十年以前即チ應永ノ頃ハ此邊ヲ河曲郷河曲莊ト稱セシナリ今其稱呼ヲ亡フ

創立ノ年代ハ寺傳ニ天平勝寶八年ニ係ルモ行基ノ入寂ハ實ニ天平二十一年ニ在レハ其假託ニ出ツル自明カナリ爾後沿革詳カナラス徳川氏ニ至リ寺領百石ヲ寄セラル今福智院末タリ

豐浦寺 片桐村大字豐浦ニアリ欽明帝即位十三年蘇我稻目宿禰百濟ヨリ貢獻セシ金銅釋迦佛像ヲ賜ハリ高市郡小治田ノ第宅ヲ捨テ精舎トナシ之ヲ安置セシカ幾ナラスシテ物部氏ノ火ニ燔カレ後チ再ヒ伽藍ヲ作り名クルニ建興ヲ以テス推古帝嘗テ葛城ノ豐浦ニ都シ之ヲ葛城豐浦宮ト號セシニ旨ヲ稻目ノ子馬子ニ諭シ小治田ノ建興寺地ト葛城豐浦ノ宮地ト交換セシム馬子勅ヲ奉ス乃チ有司ニ命シ建興寺ヲ解キ豐浦宮ヲ其地ニ遷シ舊京ノ地名ヲ取り是ヲ小治田豐浦宮ト號シ今ノ高市郡飛鳥村大字豐浦ハ其宮址更ニ建興寺ヲ彼宮址ニ遷シ因テ豐浦寺ト字セリ寺ノ西ニ櫻井一名櫻井アリ故ニ櫻井寺トモ稱シタリ事高市郡ノ向原寺葛上郡ノ豐浦寺ノ下ニ詳述セリ宜ク參考スヘシ要スルニ稻目カ創立セル建興寺ハ遷移一ナラスト雖至ル所皆其名殘ヲ留メ共ニ豐浦寺ト字セリ而シテ小治田豐浦宮ハ舒明帝都ヲ飛鳥岡本ニ遷セシヨリ空シク豐浦ノ名稱ヲ宮址ノ村名ニ存セシカ其地元來建

興寺根本ノ舊迹ナルヲ以テ後亦伽藍ヲ建テ仍テ豐浦寺トモ小治田寺トモ稱セシナリ然ルニ世ニ當寺ヲ直チニ高市郡ノ豐浦寺ヨリ移セルモノトスルハ太々謬レリ

和銅三年都ヲ平城ニ遷シ所在ノ大寺隨ヒ移ルニ及ヒ葛城ノ豐浦寺一名櫻井寺モ亦移中ニ在リ依テ葛上郡ヨリ平城右京即チ今ノ地ニ移シ立テラレ仍建興寺豐浦寺等ノ名字ヲ襲ヒ以テ蘇我氏ノ氏寺トナセリ

往時蘇我氏ノ盛ナルニ當リテハ伽藍ノ規模頗ル壯大ニシテ隨テ朝廷ノ崇敬モ亦厚ク天平勝寶二年民部省符ヲ以テ封田五百町ヲ寄セラレ

東大寺要錄曰天平勝寶二年三月民部省符、、、、建興寺豐浦寺、、、、右寺別五百町

天平寶字七年封五百戸ヲ施入セララル  
新抄勅格符抄曰豐浦寺五十戸天平寶字七年施常陸國

元慶六年氏人宗岳木村ト別當僧ト當寺ノ管理權ヲ相爭ヒ公裁ヲ仰キシコトアリ事三代實錄ニ出ツ曰ク

元慶六年八月二十三日太政官符大和國司傳散位從五位下宗岳朝臣木村言建興寺者是先祖大臣宗我稻目宿禰之所建也本緣起文具存然望請宗岳氏檢校而彼寺別當義濟確執曰太政官仁壽四年九月十三日下當國符傳彼寺推古天皇之舊宮也元在豐浦故號寺名凡厥緣起具存前志佛法東流最始於此其田園奴婢施入之由勅誓堅懇銘之金盤又貞觀三年九月二十五日下治部省符宗我稻目宿禰以宅爲佛殿天皇賜其代地遂相移易施入皇宮稻目宿禰奉詔造塔然則建興寺之建出自御願不可爲宗我氏寺明矣

爾後蘇我氏ノ門地ト共ニ衰替シテ永久ノ頃ハ本願ノ緣故ニヨリ元興寺ノ末寺トナレリ、  
事東大寺文書今同寺ニ亡シ小杉榎ニ見ユ、

左辨官下元興寺

應停止末寺豐良寺妨平均令充行東大寺訴申寺領清澄庄宇富川上津堰下津堰水事  
右得東大寺今月二日奏狀稱彼庄解狀云件兩井者已爲寺領所載繪圖也仍每年春時以  
官物用途所塞上也而今年彼寺末寺字豐良寺庄民始所押妨也仍觸示彼寺之處返答云  
件水從豐良寺庄中依流下可有分水也者所申無謂若然者先觸本寺可隨進止而猥遺惡  
僧何致濫吹哉加之興福寺夏衆同始所押妨也無他所之異論已歷三百餘歲者早被下宣  
旨同欲被停止者權大納言源朝臣雅俊宣奉 勅宜停止彼妨平均令充行者寺宜承知依  
宣行之

永久五年七月七日

大史小槻 宿 福判

少辨藤原朝臣判

嘉元記法隆寺ニ康永三年甲申豐浦寺供養在之舞樂奈良樂人ト見ユ興廢詳カナラス。

登美寺廢 續日本紀ニ寶龜四年十一月勅大和國登美寺捨當郡田三町ト見ユ已廢シ址詳ナ  
ラス。

興福院廢 附興福尼院址 興福院ノ事諸書所見ナシ唯七大寺巡禮記ニ云ク

興福院 大和國平城右京五條三坊內添下郡  
件寺者藤原百川大臣建立也金銅藥師如來三尊安之或記云寶龜元年光仁天皇御宇建立

之本尊誤寫カ者輪立氏弘繼大臣之御妻云云中尊藥師如來持石頭光七佛藥師身光中十

二神將左右日光月光也本願誓云破戒人者不可入堂中云云此寺在招提寺之西

ト見ユ已廢シ今興福院村ノ名ヲ存ス按スルニ添上郡佐保村ニ興福尼院アリ古ハ本郡菅

原ノ伏見里ニ在リシヲ寛文五年彼地ニ移セルモノナリ彼院ノ傳説ニ云フ往古ハ添下郡

伏見里ニアリ伏見里ハ今ノ尼ヶ辻ナリ則チ尼ヶ辻ノ西ニ興福院ト稱スル村アリ此村ニ

當院奥ノ院ト云フ舊跡アリト此尼ヶ辻ハ即チ興福尼院ノ舊跡ニシテ所謂奥院ソ正ニ興

福院ノ廢址ナルヘキ

濟恩寺廢 志ニ齊音寺村延曆十一年十一月聽捨故入唐大使藤原清河宅爲寺號曰濟恩寺即

此清河贈太政大臣房前第四子也勝寶五年奉使入唐禮畢還日偶遇海運漂到驩州國人反通

船被害清河僅以身免遂不還後十餘年薨於唐國寶龜十年贈從二位ト是レナリ當村蓮生寺

大念佛宗 興福寺末ニ鼻鐘アリコレ古ヘノ濟音寺ノ物ナリ其銘ニ云ク

諸行無帝 是生滅法 生滅々已 寂滅爲樂

右之施主十方檀主以助成命鐘鑄造立伏願十方施主三界萬靈六道四生有緣無緣一切含識

等爲往生佛國頓生菩提乃至法界平等利益造之願以此功德普及於一切我等與衆生皆共成

佛道 和州添下郡四條村濟恩寺承曆三天十一月十五日和州南都筑前大掾作

按スルニ銘文中四條村今其名稱ヲ亡フ蓋齊音寺村ノ舊名ナルヘシ

超昇寺廢 佐紀村ノ超昇寺ニアリ平城帝ノ皇子高岳法名眞如親王弘法大師ノ弟子トナルノ建立ニシ

テ金剛五佛ヲ本尊トス

添下郡

巡禮記曰、寺者平城天皇第三子真如親王建立也。又永延年中、興福寺清海上人始法華三昧。延曆年中、始七々日阿彌陀念佛。八月六日始念佛。七日七夜也。云々、又此阿彌陀堂、仁真如親王御影在之。法體也。俗名高岡親王。

諸寺緣起集曰、平城天皇第三皇子弘法大師付法大弟子真如親王建立之。云々、本堂金剛界五佛、本願真如親王也。北有法花三昧堂、有淨土曼荼羅其下銘。

沙門清海爲奉圖繪極樂淨土并兩界曼荼羅召善女尼令續織藕絲功了、納匣蓮花坐現感。懷四忘寫取彼樣、令畫外儀志知。于時長德二年景申十月二十二日。

三代實錄ニ貞觀二年十月大和國平城京中水田五十五町四段六百八十八步施捨不退超昇兩寺トアリ、後チ漸ク衰微シ、天正中井戸若狹ノ兵燹ニ燒失シ、寛文延寶ノ頃マテハ纔ニ一宇ノ板底ニ大日如來ヲ安置シ、其名殘ヲ留メシカ今ハ廢絶ニ屬セリ。

和州寺社記曰、超勝寺ハ平城天皇ノ皇子真如親王ノ御建立ナリ、。、。、されともいづれの頃よりか悉く破壊して民舎ノ地となり、僅か一間許ノ板底ノ内に昔ノ大日如來ましますとなり。

舊迹幽考曰、超昇寺又超勝寺ともかけり、真如法親王ノ御建立ナリ、天正年中に絶果て今は形ばかりなるいはりに、大日如來一軀あり、。、。、念佛堂は正曆年中夢ノ告にまかせ清海法師超昇寺ノ院内に造立あり、。、。、かゝるめでたき靈寺も終に天正年中井戸若狹守ノ兵亂にかゝり跡なくなり、。、。、

### 城 壘

筒井城 片桐村大字筒井ニアリ、永享二年筒井順永ノ築ク所ニシテ、子孫世々コレニ居ル、國民郷士記ニ筒井平城、永享二年筒井順永城築ク、天正十三年ニ秀吉ヨリ滑トアル即此ナリ。

筒井氏ハ舊説ニ藤原氏ニシテ近衛家ノ支流ニ出ツト、然トモ大倭武士春日大宿所願主人勤番次第ト題スル古文書ニ、

乾等 添下郡居城筒井村 十二萬石 姓大神

#### 大宿所五年目勤之

ト見ユ。全文添上郡春日若 夫レ筒井城ニ居リ、十二萬石ヲ領スルモノハ筒井氏ヲ除キ他ニ其人アルヲ聞カス、且姓某ト記シ、苗字ヲ記セサルハ、當時著名ノ巨族ニシテ一國ノ稔聞スル所ナレハ殊ニ其名ヲ省略セルモノナリ、サレハ筒井ノ本姓ハ大神氏ニシテ大物主神ノ苗裔ナリシヲ後チ興福寺ノ衆徒トナルニ及ヒ、藤原氏ヲ冒セルモノナラン、例セハ辰市氏ノ本姓亦大神氏ナルヲ筒井ト姻ヲ結フニ及ヒ、藤原氏ヲ稱スルカ如キ是ナリ、而シテ筒井諸記ニ筒井順武ヨリ順永マテ、四十餘代ノ系譜ヲ載スレトモコレヲ他ノ記録ニ徵スルニ悉ク信スヘカラサルヲ以テ今コレヲ取ラス、順永以下ノ世次及宗族等ノコトハ國民郷士記ニ詳カナリ、曰ク

筒井順永法印 其子際春房光宣法印 其子明舜房順政法印 其子良舜房順興法印 其子榮舜

添下郡

房順昭法印其子陽舜房順慶法印其子羽柴伊賀守從四位下侍從定次是ヲ寺家ト云フ

一族

- 筒井主殿守定慶
- 筒井助宣信
- 同四郎
- 同左馬頭
- 同甚次郎
- 與力三十六人各二百石宛
- 筒井與左衛門
- 同兵庫貞祐
- 同覺道
- 同圓順
- 同宗助胤順
- 同利慶
- 同宗徹
- 同宗傳
- 同見春
- 同紀伊守慶之
- 同次郎春虎
- 同五郎善兼
- 同內藏助
- 同五郎兵衛
- 同大膳元信
- 同三郎順清
- 同六郎
- 同千代松
- 同道元
- 同豐前
- 同八郎善順
- 同象祐
- 同尊盛
- 同德圓
- 同宗祇
- 同藤四郎宗慶
- 同春道
- 同正欣定次
- 同虎福丸
- 同春勝
- 福住山邊郡
- 箸尾廣瀨郡
- 十市氏十市郡
- 善提山長勸坊
- 多武峯善勸坊
- 同意心
- 山田氏山邊郡
- 飯田氏奈良
- 明山宇陀郡
- 小田切郡山
- 法隆寺普門院善光坊
- 多武峯淨心院光胤

- 同德清
- 同清賀
- 慈明寺高市郡
- 越智氏高市郡
- 片岡葛下郡
- 小泉添下郡
- 信貴山寶院賴秀坊
- 興福寺成心院右之外寺社觀族略之右者筒井之親族也
- 筒井三老臣
- 森志摩守
- 筒井惣麾下
- 清須美葛下郡所記
- 中ノ坊奈良郡所記
- 杉菅政
- 與力法蓮十郡內源內
- 超昇寺中ノ坊所記
- 富地甚左衛門
- 相川與市
- 島左近
- 松倉右近
- 井戸辰市之
- 檜原周防守俊久
- 喜多孫兵衛吉兼
- 今井善右衛門
- 奧田左近
- 木田左近吉實
- 萬財與二記

- 檜原葛下郡所記
- 今井其所二記
- 辻和泉
- 北市次郎
- 柏木日向
- 赤松作内
- 與力額田武藏森林彌一郡
- 添下郡
- 同大炊助道成
- 同祐賀
- 同清源
- 同春賀
- 同尊順
- 同新六政順
- 同宗順
- 同淨繼
- 同宗善
- 同祐可



布施奥ニ記

小林光之

長井奥ニ記

吉村小兵衛

八條相摸入道々也

向井十郎兵衛

大津三左衛門重次

大津主膳好重

芳野又左衛門清兼

與力贈山清助

澤藏人治之

與力石田監物

ト見ユ、以テ其世系及ヒ一族麾下ノ姓名ヲ知ルヘシ、而シテ和州諸將軍略傳ニ載スル同家ノ事跡ヲ他ノ古記録ニ參考シテ其大要ヲ記サンニ、蓋順永ハ應永六年四月ヲ以テ筒井庄ニ生ル、父ヲ順快ト稱シ即チ順武ノ四十二世ノ孫ナリ、人トナリ豪邁ニシテ武略アリ、應永二十年順永歳甫メテ十五ニシテ島十市、秋山、澤、芳野ト共ニ慈明寺、越智、箸尾、土佐、八木、飛鳥、布施、南郷、寺田、百濟、唐院、巨勢、葛野、中村等ト戰ヒ大ニ之ヲ破ル、是ヨリ順永ノ威名中外ニ著ラハル、案スルニ應永二十七年筒井順覺ナルモノ西大寺領ヲ狼藉セシコト、彼寺ノ古文書ニ見ユ、年代ヲ推スニ順覺ハ即チ順永ナルヘシ、二十四年興福寺ノ衆徒トナル、是レ筒井氏其衆徒タルノ始メナリ、同年上洛シ將軍義量ニ謁シ、律師ニ補セラレ、永享二年二月筒井城ヲ經始シ、十閏月ニシテ成ル、嘉吉元年赤松滿祐其君義教將軍ヲ弑シ、逃レテ白旗城ニ據ル、山名細川之ヲ攻ム、順永亦足利氏ノ爲メニ兵ヲ出シ大ニ功アリ、子順秀一ニ光宣ト稱シ、彌勒院ト號ス、亦能ク兵ヲ用フ、嘉吉三年十月興福寺領五箇關ヲ押領シ、大ニ興福東大二寺ヲ關カス、幕府使ヲシテ之ヲ禁セシム。

東大寺藥師院日記曰嘉吉三年十月二十二日興福寺五箇關ヲ彌勒院永舜實名光宣ウチテ所  
 □沙汰ナシ仍觀修坊宗壽院普賢院等其外一□同心シテ官領ニ申御教書捧書ヲ申テ取

返スヘキ由申處ニ壬戌十月三十日夜勸修坊下□家ヲ打破ル、同十一月一日七堂伽藍ヲ閉門亦宗壽院下人ノ處ヲ破却ス東大寺モ同ク閉門アレトテ重々ノ問答アリテ、同四日夜大佛講堂閉門五日ニ法華堂中門堂閉門スルナリ、、、、、四月八日上使三人下

向依筒井彌勒院セメノ用ナリ。

文安三年十月古市氏ト兵ヲ交フ、同十二月窪庄某ノ女ヲ養ヒ十市氏ニ嫁セシム。

同記曰文安三年二月十六日薪猿樂、、、、、十月十一日□御社ニアリ、是ハ古市ト彌勒院ト合戰ニ依テナリ、、、、、十二月十二日窪庄息女ヲ筒井殿之養子ニシテ十市殿ニ嫁ス。

寛正六年河内守護代遊佐長直ト戰フ、尋テ女ヲ長直ニ妻ハシ和ヲ講ス、文正元年畠山義就ノ大和ニ來奔スルヤ、國中ノ豪族相黨援シテ戰フ、光宣箸尾布施高田談峯等ハ幕府ノ教命ヲ奉シ畠山政長ヲ援ク、事大乗院尋尊僧正記ニ見ユ、文明元年十二月歿ス、圖証寺ノ先塋ニ葬ル、光宣ノ弟順春ハ出テ山邊郡福住ノ山田氏ヲ繼ク、實ニ山田氏ノ祖ナリ、藥師院日記ニ永享六年甲寅八月十四日福住筒井打死トアルハ、蓋順春ヲ謂ヘルカ、順政ハ明舜坊ト號ス、光宣ノ二子ナリ、大永四年四月卒ス、長子順興立ツ良舜坊ト號ス、順興ハ興福寺英俊法印日記ニ筒井良舜坊唄賢ト見エ、永正ノ頃、成身院布施、箸尾、越智、吐田、万財、檜原、十市、片岡、俱尸、羅高田ノ諸氏ト共ニ國判衆ト稱セラレ、相並ンテ國務ニ參署セリ、天文四年七月卒ス、子女多シ、長女ハ小田切春次、二女ハ飯田頼直、三女ハ家老森好之ニ嫁シ、二男順國ハ慈明寺氏三男

順弘ハ福住氏ヲ繼キ、末女ハ十市遠忠ノ妻トナリ、更ニ伯母ノ子ヲ養ヒ、明山直國ノ室タラシム、是ニ於テ筒井ノ家門益盛シ、他日全國ヲ席卷セントスルノ勢、隱然茲ニ成レリ、榮舜房順昭法印ハ順興ノ長男ニシテ、母ハ山田城主民部順貞ノ妹ナリ、資性勇武善ク衆ヲ懷ケ、版圖日ニ大ニ本領麾下合セテ二十萬石ヲ有スルニ至ルト云フ、此時ニ當リ三好ノ執權松永久秀大和ノ豪族ヲ服シ、全國ヲ平吞セントスルノ志アリ、先ツ筒井ヲ亡サントス、順昭之ヲ聞キ亦士卒ヲ練リ糧食ヲ峙ヘ之カ備ヲナシ、天文十三年正月使聘ヲ奈良北小路ノ城主飯田氏ニ通シ、遂ニ順興ノ二女ヲ頼直ニ妻ハシ以テ松永ノ聲威ヲ殺ク、然ルニ天文十八年順昭病ミ自ラ起タサルヲ知り、三老及宗族ヲ召シ曰ク、吾夙ニ一國ヲ平均セントセシニ不幸病ニ嬰リ、餘命幾何モナシ、一旦死セハ松永虛ニ乘シ以テ我カ家ヲ亡サンコト鏡ヲ懸ケテ明ナリ、吾レ死セハ三年ノ間深ク喪ヲ秘スヘシ、奈良ニ盲人默阿彌ナルモノアリ、常ニ吾レニ伺候シ、容貌音聲亦我レニ酷似セリ、宜シク彼レヲ臥内ニ入レ存在ノ狀ヲ示シ以テ敵國ノ隙ヲ塞キ各同心戮力孤兒藤勝後子順ヲ輔ケ松永ヲ滅シ以テ我カ志ヲ成スヘシト、言畢リ終ニ卒ス、時ニ天文二十年六月二十日也、是ニ於テ宿老宗族遺命ニ遵ヒ窃ニ尸ヲ林小路ニ歛メ彼默阿彌ヲ延キ供給一ニ順昭ノ生ケル時ノ如クセリ、二十二年ニ至リ初メテ喪ヲ發シ、長男藤勝ヲ立テ、城主トナシ、彼ノ默阿彌ニハ厚ク資ヲ給シ、郷里ニ歸ラシメ、元ノ默阿彌トナス、今ノ世ニ物ノ故態ニ復スルヲもとのもくあみト稱スルハ、實ニコ、ニ起レルモノナリトシ、順昭ニ子女多シ、長女ハ筒井順國、慈明寺二女ハ福住順弘、四女ハ箸尾高春、五女ハ片岡春利、六女ハ山田順清ノ室トナシ、更ニ姪ヲ養ヒ小和泉秀元ニ妻ハス、而シテ此

等女子ハ皆妾腹ニシテ男子藤勝ノミハ嫡出ナリト云フ、藤勝ハ天文十八年三月三日ヲ以テ筒井城ニ生ル、母ハ山田道安ノ妹ナリ、三歳ニシテ父ヲ亡ヒ、五歳ニシテ家ヲ繼キ、永祿三年三月剃髮シ、陽舜坊順慶法印ト稱ス、既ニ長シテ學ヲ好ミ唯識論ニ通シ、兼テ神書儒學ニ達シ、又和歌ヲモ善クセリ、是時松永ハ既ニ大和河内ノ堺ナル信貴山ニ城ヲ築キ、更ニ又東大寺ノ僧徒ト謀リ、多聞山ニ城キ西南相應ノ勢威ヲ張リ反ツテ主家ヲ凌クノ志アリ、三好コレヲ惡ミ、永祿十年細川某ヲシテ松永久通子秀ガ守レル信貴山城ヲ綴セシメ、更ニ大軍ヲ以テ南都ニ入り、大佛殿ニ屯シ將ニ多聞城ヲ攻メントス、久秀コレヲ聞キ、夜半襲ヒ討テ大ニ三好ノ兵ヲ敗リ、遂ニ大佛殿ヲ燒キ、勢ニ乘シ筒井ヲ攻メント欲シ、永祿十二年麾下岡古市、菅田、高山及ヒ東大寺ノ僧兵ヲ以テ多聞城ヲ守ラシメ、志貴山城ニハ山僧龍田ノ社人等ヲ驅リコレニ在番セシメ、自ラ一族麾下ノ兵七千餘ヲ率ヒ出テ、法隆寺ニ陣ス、順慶コレヲ聞キ、飯田直宗ヲシテ筒井城ヲ守ラシメ、亦自ラ四千ノ兵ヲ以テ梅檀木村ニ屯ス、兩軍並松ニ相進ミ開戦スルヤ衆寡敵セス、順慶大ニ利ヲ失ヒ僅ニ身ヲ以テ免レ、筒井ニ歸ラントセシカ敵兵既ニ城ヲ圍ムト聞キ、更ニ宇陀郡ニ走リ明山氏ニ投ス、明山直國、澤芳野ノ兵ヲ以テ迎ヘ納レ、且山田順清ニ牒シ其兵ト共ニ半坂ニ關ヲ設ケ固ク之ヲ守ル、既ニシテ十市、飯田、越智、井土、慈明寺、福住、中ノ坊、今井、興福寺等交々來リ出兵ヲ促カシ聲援大イニ振フ、順慶宇陀ニ棲ミ旦暮會稽ノ耻ヲ雪カントセシカ、是レヨリ先キ辰市城主井戶國秋ハ松永ノ領地ニ接近スルニモ拘ハラス、筒井ノ爲メニ備ヘヲナス、久秀コレヲ嫉ミ先ツ井戶ヲ屠リ後チ宇陀ニ及ホスヘク多聞城ニハ東大寺ノ僧兵ヲ在番セシメ、信貴山城ニハ一族永種

ニ法隆寺龍田ノ僧祝ヲ附シテ之ヲ守ラシメ、自ラ一萬ノ大軍ヲ率キ元龜二年七月ヲ以テ先ツ辰市城ヲ攻ム、是ニ至テ順慶ハ明山澤芳野ヲ宇陀ニ留メ、三老慈明寺、山田、水間、別所、福住、十市、越智、箸尾、多武峯、吉野ノ兵大凡五千ヲ以テ井戸ノ後援トシテ宇陀ヲ出ツ、小林、片岡、吉村、下田、染井、竹内、當麻ノ兵二百餘ハ信貴山城ノ應援ヲ遮リ、小田切、小泉ノ勢ハ法隆寺ノ敵ヲ阻ミ兼ネテ井戸ノ應援ヲナサントス、松永謀知シ麾下入江岡高山ノ兵ヲシテ辰市城ヲ攻メシメ自ラ七千餘ノ兵ヲ率キ、順慶カ五千ノ兵ニ當リ兩軍辰市ノ東山ニ相戰ヒ、遂ニ順慶ノ爲ニ敗ラル、此時織田信長兵ヲ西シ、京師ニ號令セントス、乃チ佐久間、明智ヲシテ筒井松永ノ和ヲ成サシム、二氏命ヲ領シ和ヲ結ヒ各本城ニ還リ和州暫ク小康ニ屬セリ、幾ナラスシテ松永事ヲ以テ織田氏ヲ怨ミコレニ反クニ及ヒ、信長其子信忠ヲ將トシ細川父子明智ノ兵ヲ以テ討伐セントス、順慶ノ地理ニ熟スルヲ以テ命シテ之レカ先鋒タラシム、天正五年順慶慈明寺福住島森ヲ留守トナシ、自ラ兵五千ヲ率キ、法隆寺ニ出ツ、松永ノ麾下海老名森等兵一千餘ヲ以テ片岡城ヲ守リ以テ筒井ノ兵ヲ阻セントス、順慶圍ミテコレヲ拔キ勢ニ乘シテ信貴山ニ薄リ遂ニコレヲ陷ル、松永氏コ、ニ至テ亡フ、信長其功ヲ賞シ松永ノ所領大和ニ在ルモノヲ順慶ニ與ヘ以テ一國ノ領主タラシム、織田氏武鑑ニ和州二十四萬石筒井陽舜坊順慶トアル是レナリ、既ニシテ明智光秀其君織田父子ヲ弑シ使ヲ筒井ニ來タシ咎ハスニ利ヲ以テシテ己レヲ援ケシメントス、順慶諸將ヲ會シ向背ヲ諮フ、諸將皆曰フ三州大和、河内、紀伊併有センコト此一舉ニアリ、速カニ明智ヲ援ケ大功ヲ樹ツヘシト、獨老臣松倉コレヲ否トシ曰ク光秀ハ弑逆ノ罪人ナリ、寧ロコレニ與スヘケンヤ、然レトモ年來

ノ好誼モ亦、遽カニ捐ツヘカラス、如カス、陽ハニ來意ヲ領シ暫ク軍ヲ城州八幡山ニ懸ケ、天下ノ事變ヲ觀以テ去就ヲ決センニハト、衆更ニ之ヲ贊シ厚ク使者ヲ勞シテ遣リ歸ス、順慶乃チ義子定次ヲ留守トナシ、三老麾下ノ兵一萬餘ヲ率キ出テ八幡山ニ陣ス、是ヨリ先キ羽柴秀吉中國ニアリテ、毛利氏ト相持シ未タ決セサルニ會々本能寺ノ計至ル、秀吉毛利氏ト和ヲ講シ歸リ、諸將ヲ攝州尼ヶ崎ニ徵シ將ニ光秀ヲ誅シ以テ君仇ヲ報セトシ聲焰甚盛ンナリ、是ニ至テ順慶島左近ヲ秀吉ノ陣ニ遣リ機ヲ窺ヒ、明智ノ背ヲ拊ツヘキノ意ヲ致サシム、而シテ羽柴明智ノ兵山崎ニ相戰フヤ、中川清秀ハ明智ノ先鋒ヲ挫キ勝敗ノ兆既ニ形ハル、順慶乃チ兵ヲ淀川ニ出シ其敗卒ヲ追捕シ以テ秀吉ノ恩ヲ市フ、秀吉コレヲ知り其行ヲ薄ウスト雖トモ、亦罰スヘキニアラサレハ舊ニ仍リテ一國ヲ領セシム、世ニ首鼠兩端ノ計ヲ持スルモノヲ目シテ順慶流ト稱スルハ蓋コ、ニ起ルナリ、天正十二年八月十一日順慶病ンテ卒ス、享年三十六、筒井城外ニ葬ル。

因ニ云フ筒井諸記ニ左ノ古文書ヲ載ス本項ニ直接ノ關係ナキカ如クナレトモ、他ノ城主ノ世次及ヒ麾下ノ姓名ヲ徵スヘキ材料ト認ムルヲ以テコ、ニ附記ス、曰ク、

天正十二年十月 順慶公御葬式目錄

- 青清、橋本主馬、柏木、大和田、廣瀬郡今中平群郡清須美半介、森五郎治郎、喜田助七、山邊郡菊田掃部添上郡島左近平群郡井戸若狹守山邊郡龍田平群郡龍田入道爲定、福西平群郡見城主筒井福西、山田山邊郡山田太郎、嘉幡今市添上郡岸田伯耆守山邊郡古市播磨守添上郡清須美春藤添下郡飯田新八郎能直南都井上治部式下郡乾、豐浦彦三添下郡中坊左近南都布

添下郡

施新七葛下郡鷹山藤光平群郡福住十市兵部大輔十市城主

順慶子ナシ嘗テ慈明寺順國ノ長子定次ヲ養フ定次既ニ立テ天正十二年正月ヲ以テ大阪ニ祇シ秀吉公ニ謁ス秀吉命シテ筒井ノ封ヲ伊賀ニ移シ其國ニ於テ十二萬石伊勢ニ五萬石山城ニ三萬石合セテ二十萬石ヲ與ヘ從五位ニ敍シ伊賀守侍從ニ任シ氏ヲ羽柴ト賜ハルト同時ニ秀吉ノ舍弟秀長ニ大和和泉紀伊三國百餘萬石ヲ與ヘ更ニ郡山城ニ治セシム羽柴定次ノ伊賀ニ入部スルヤ島松倉父子小和泉清須美及ヒ嬖臣桃谷國仲河村正之松浦祐次等之レニ隨ヒ慈明寺福須美山田十市越智箸尾明山片岡小田切等ハ留リテ秀長ニ仕フ其後家老中坊左近三嬖ト權ヲ爭ヒ國政亂レ定次亦罪ヲ獲テ慶長十三年奥州岩城平ニ配セラレ國除カル十九年冬大阪ノ難起ル筒井ノ浪士箸尾秋山片岡布施萬財巨勢吉村等大野主馬ノ招キニ應シ城中ニ入りシカ定次コレト内通セシト嫌疑ヲ獲元和元年三月五日其子順定ト共ニ自殺セリ筒井主殿頭定慶ハ藤五郎ト稱シ同紀伊守慶之ハ藤六郎ト稱シ共ニ福須美順弘ノ子ニシテ母ハ順慶ノ異母姉ナリ是ヨリ先キ順慶子ナキヲ以テ前キニ定次ヲ養ヒテ惣領トナシ更ニ定慶兄弟ヲ養フ定次伊賀ニ移ルニ及ヒ舊臣多ク從ヒ往ク定慶兄弟ハ三嬖ト相善カラサルノ故ヲ以テ辭シ去テ福住莊ニ居ル幾ナラスシテ定次罪アリ國除カレ尋テ郡山城主大久保長久亦事ヲ以テ移封セラレ郡山城ニ主ナシ徳川家康筒井ノ名族ニシテ血食セサルヲ愍ミ定慶兄弟ヲ召シ一萬石ヲ賜ヒ與力三十六人ヲ附シ郡山ノ舊城ニ居ラシム然ルニ慶長十九年夏大阪ノ亂起リ大野使ヲ郡山ニ遣ハシ舊臣ヲ糾合シ來援セシメントスルニ定慶徳川氏ノ恩義ヲ思ヒコレヲ謝絶シ城守ノ計

ヲナシ其來攻ヲ俟ツ既ニシテ箸尾布施萬財細井ノ諸舊臣大阪ノ爲メニ來攻スト聞キ自ラ敵スヘカラサルヲ知リ脱レテ福須美ニ歸リ慶之ハ奈良ニ隱ル定慶ノ福須美ニ歸ルヤ舊臣ヲ糾合シ敵來ラハ一戰スヘシト盛シニ守備ヲナセシカ其兵引去ルト聞キ大ニ望ヲ失ヒ且世ノ嘲弄ヲ恥チ五月十日遺書ト傳家ノ刀ヲ以テ慶之ニ貽リ終ニ自殺ス慶之南都ニアリテ亦竊ニ時變ヲ觀興復ヲ圖ラントセシモ當時ノ勢日ニ乖キ復タ爲スヘカラサルヲ知リ徒ラニ生存シ家聲ヲ汚スヲ屑トセス其十二日從容從士ト訣飲シ刀ニ伏ス是ニ至テ筒井氏亡フ

郡山城

天文永祿間小田切春政ノ城ク所ナリ國民郷士記ニ郡山平城小田切宮内ト即此小田切氏其出ツルヲ詳カニセサルモ法隆寺藏永祿四年五月ノ文書ニ辰巳春政ト見エ又筒井諸記ニ筒井氏一家衆辰市井戸家、、、、井戸春政郡山城主辰巳氏、、、、トアリテ本ト春政ハ筒井順政ノ子ニシテ出テ井戸氏ヲ冒セシヲ更ニ小田切氏ヲ繼キタルモノナリ案スルニ至徳中ノ長川流鏑馬日記ニ大和武士ノ交名ヲ載セ郡山殿トアリ又御兵士引付大乗院ニ八月上旬番條中郡山下十市ト見ユ此郡山氏何人ナルヲ詳カニセス疑クハ春政ノ繼キタル小田切氏ノ先人ナルヘキカ後考ヲ俟ツ春次ヨリ以來ノ世系ハ左ノ記錄ニ據リ其ノ大略ヲ知ルヘシ

國民郷士記曰郡山小田切宮内少輔春次郡山辰巳之助春政永祿年麾下高田又助五條左内大和諸將軍略傳曰小田切宮内少輔藤原春次和州添下郡郡山城主一萬七千石順興ノ婿麾下高田五條六條尼ヶ辻等合テ三千石

筒井諸記曰和州郡山城主、筒井氏、小田切和泉守、小田切所左衛門、郡山宮内少輔、筒井順政○郡山ノ城主ニアラス春政ノ實父ヲ郡山辰巳之介春政、筒井順慶法印ノ城主ニ

アラハス藤四郎ノ養父、筒井藤四郎、大和納言秀長公家士福智三河守宇陀郡人也、其盛時ニ當テハ一萬七千石ヲ領シ、門望頗ル隆カリシカ天正十三年豊臣秀吉筒井定次ヲ伊賀ニ移シ舍弟秀長ヲ大和紀伊和泉ニ封シ郡山城ニ治スルニ及ヒ春政ノ子春之喜太郎ト稱ス、次清喜助ト稱ス、共ニ之ニ仕フ、爾後小田切氏寥寥聞ユルナシ、十九年秀長卒ス、子秀俊嗣テ天死シ國除カル、更ニ増田長盛ヲシテ在番セシメ、三州ノ政務ヲ攝行セシム、尋テ關原ノ役アリ長盛敗レテ高野ニ走ル、餘衆疑懼シ城ニ嬰リ東軍ヲ拒マントス、會々説客渡邊勘兵衛ナルモノ城中ニアリ、内外周旋以テ兵ヲ解キ城地ヲ入レシム、徳川家康命シテ筒井定慶ニ一萬石與力三十六騎ヲ附シ郡山城ニ居ラシム。

筒井諸記曰郡山小田切氏城地田中村ト申候由柳町村之内ニテ御座候哉相分兼候得共御當家様御内柳澤權大夫様御屋敷則往古之郡山御城となり申候。元和元年大阪ノ難起ル、定慶爲メニ出奔シ城地ヲ棄ツ、事筒井城ノ下ニ詳カナリ、家康依テ水野日向守ニ六萬石ヲ賜ヒ、之ヲ守ラシム、居ル六年ニシテ事ニ坐シ封ヲ備後ニ移サレ更ニ松平下總守ニ十二萬石後十五萬ヲ賜ヒコ、ニ治セシム。

小泉城 片桐村大字小泉ニアリ、小泉一ニ小和泉ニ作ル氏コレニ據ル、氏ハ本姓藤原氏其居住年代詳カナラス、享德二年大乘院御領段錢日記ニ  
外川庄給主松林院 三井庄下司小泉 長屋庄小泉 龍華院新田下司小泉

ト見エ御兵士引付ニ

一衆徒國民等給分之事、小泉分、新木庄二名三丁六反半、田下司、三井庄、小泉庄、若槻庄米内十五石、、、、此外在々所々且年貢諸公事等無其沙汰一向如私領致知行輩不知其數者也徒懸名字不及國役剩致不忠緩怠事無是非次第也

ト記シ寺家ヨリ使ヲ小泉全祐ノ許ニ遣ハシ其緩怠ヲ督責セシ事同記ニ見エタリ、以テ享徳以前小泉氏既ニコ、ニ住シ、興福寺領ノ莊官トナリ、且應仁ノ頃ハ亂離ニ乗シ庄園ヲ押領シ暫ク自大ノ計ヲナシツ、アリシヲ知ルヘシ、永正ノ比小泉圓盛等アリシモ事跡記録ニ所見ナシ、天文中ニ秀元アリ筒井順昭妻ハスニ姪ヲ以テス、是ヨリ小泉氏筒井ノ姻戚ヲ以テ其幕下ニ屬シ、毎ニ順慶ヲ輔ケ軍功ヲ以テ一萬千石ヲ領シ、麾下市場滿願寺等ノ所帶ヲ合セ一萬三千石ヲ有セリ。

國民郷士記曰小和泉平城、小泉四郎左衛門  
又曰小和泉助兵衛、同市助、小和泉四郎左衛門藤原秀元一萬石順昭ノ姪也天正五年三月伊賀上野城下ニテ死去歳六十  
九十六 麾下市場滿願寺等二千石同一萬三千石

筒井諸記曰小泉領主、筒井圓盛西大寺記錄、小泉廣重同斷、小泉助兵衛、同市助、小泉四郎左衛門、永祿四年二月十五日菅川ニテ討死ト云フ、小泉四郎左衛門秀元天正十五年三月朔六日病死、小泉四郎秀之天正元年八月上旬越前刀藏山、和大納言殿御老中、羽田長門守數五軒屋敷也、中ヨリ片桐主膳正様、同碩卷曰添下郡小泉領主小泉圓盛正ノ比

筒井氏伊賀ニ移封ノ際秀元族ヲ擧ケ之ニ從フ、豊臣秀長其臣羽田長門ニ四萬八千石ヲ與ヘ當城ニ居ラシメシカ元和ノ初幕府更ニ片桐眞隆内膳ニ一萬石ヲ與ヘテコ、ニ治セシム。

菅原壘

伏見村大字菅原ニアリ、菅原氏コレニ據ル、永正中澤藏軒大和ニ入ルヤ、寶來衆郡山城ニ楯籠リシコト興福寺英俊日記ニ見ユ、寶來衆ハ菅原氏ナルヘシ、國民郷士記ニ菅原平次郎、菅原右京亮、寶來春竹、寶來三郎四郎、寶來甚三郎、寶來主計ナトノ人名ヲ載スルモ事跡詳カナラス。

超昇寺壘

都跡村大字佐紀ニアリ、超昇寺氏コ、ニ據ル、國民郷士記ニ超昇寺平城超昇寺左近ト即チ此、至徳中ノ長川流鏑馬日記ニ大和武士ノ交名ヲ記シテ超昇寺殿又春日社石燈籠御間東側南端ニアリト銘ニ長享三己酉年卯月三日超昇寺良憲トアルモ良憲ノ事記録ニ所見ナシ、而シテ所謂左近ナルモノ亦何人ナルヲ知ラス、郷士記筒井惣ノ坊ノ又添下ニ尊勝寺超昇寺氏ト見ユ、更ニ添上郡中坊氏ノ條ヲ閱スルニ中之坊飛驒守藤原秀國、中之坊飛驒守秀行、同左近秀政、同讚岐守盛祐トアリ、之ヲ和州諸將軍傳ニ參考スルニ超勝寺與八郎案ルニ超ハ尊ノ誤寫ニシテ郷士記ニ所謂尊勝寺ナルヘシ超昇寺帶刀ハ中坊秀國ノ麾下ニ屬セリ、然ラハ中坊左近ハ本姓超昇寺ニシテ南都ニ移住スルニ及ヒ一族コ、ニ留ルモノアリテ仍超昇寺氏ヲ稱シ中坊ノ麾下トナレルモノナラン、記シテ後考ヲ俟ツ。

秋篠壘

平城村大字秋篠ニアリ、秋篠氏コレニ據ル、國民郷士記ニ秋篠平城、秋篠口ト即チ此、應永ノ頃秋篠英尊ナルモノ筒井順覺ト共ニ西大寺領ヲ狼籍セシコト、彼寺ノ古文書ニ

見ユ、郷士記ニ秋篠春彦同太一權四郎アリ、和州諸將軍傳ニ秋篠内記アリテ中坊ノ麾下ニ屬セリ、秋篠氏ハ本ト土師氏ニシテ菅原氏ト祖ヲ同ウス、野見宿禰ノ子孫菅原ニアルモノハ菅原氏ヲ稱シ秋篠ニアルモノハ因テ氏トシ子孫コ、ニ住ス、事國史ニ詳カナリ、壘主ハ即チ其苗裔ナルヘシ、然ルニ筒井順慶葬式目錄ニ清須美春藤トアルハ如何、倘クハ清須美ノ一族コ、ニ住スルモノアリテ因テ氏トセシカ、將タ秋篠氏他ニ源因アリテ殊ニ彼レヲ冒セシカ亦後考ヲ俟ツ。

矢田壘

矢田村大字矢田ニアリ、矢田氏コレニ據ル、氏ハ姓氏錄大和ニ矢田部、饒速日命七世孫大新川命之後也ト見エ、本ト物部ノコ、ニ住スルモノ其地名ヲ氏トナセルモノニシテ子孫相繼キテ矢田殿ト稱セラレ豪族タリ、弘安延慶ノ際矢田若狹父子アリ。

嘉元記法隆寺所藏曰延慶四年辛亥二月五日矢田播磨殿爲親父若狹殿之佛事西室所藏、多摩、萬陀羅ヲ可借給之由所望申サル、ノ間院主中院定朝申并西室供養衆僧借用申之處無子細借給畢。

伊豆ニ至リ壘ヲコ、ニ築キ居ル、伊豆ハ若狹ノ後ナルヘキカ、矢田系圖ニ越前アリテ伊豆ナシ、疑ラクハ同人ナラン、越前ノ子ニ信濃アリ、郷士記ニ所謂矢田中村信濃守トコレナルヘシ。

國民郷士記曰矢田平城矢田伊豆又曰矢田伊豆守物部新川四世孫印世等ノ末孫○物部系圖ヲ案スルニ大新田中村信濃守矢田ノ近傍ニ中村アリコレニ住セシカ矢田下司三橋氏

添 下 郡

信濃ハ筒井ノ與力ニシテ定次ニ從ヒ、伊賀ニ赴キ病ンテ其地ニ死ス、子彦市ハ自ラ所領ヲ棄テ宇智郡ノ松倉氏ニ投セリ、三橋氏ハ矢田家ノ臣ナリ、子孫高市郡鴨公村大字高殿ニ住シ今尙三橋ヲ稱シ現ニ彼地ノ村長タリ、家ニ矢田三橋ノ系圖ヲ藏ス録シテ參考ニ供フ。

矢田殿并三橋家系圖

一越前殿御他界 次信濃殿寶藏院椿藏院賢聖院娘二人一人ハ佐川甲斐殿嫂入一人ハ津田備中殿嫂入

次彦市殿信濃殿ノ御子也爰ニ順慶ノ定次伊賀國へ御取替被成候故矢田信濃殿彦市殿此矢田殿ハ順慶ノ與力也國替以後ニ信濃殿ハ伊賀ニテ御他界也彦市殿御代也但御知行三百石雖然少分ノ知行其上知行處モ惡敷處成故五條ノ松倉豊後守殿へ渡し御退城有之此松倉ハ順慶之御内衆則寶藏院ノために伯父也其後彦市殿松倉殿之御内衆と少しの口論ニ付敵人出向彦市殿ヲ圍ミ打ニ致ス其時與作ト申者御供仕敵打畢此與作ハ松倉殿ノ御内衆ノ子也此與作ハ法隆寺ノ大工ノ内ニ親類有之故大工ヲ學ヒ名ヲ與右衛門ト云ヒ又一説ニ弓始トモ云也次彦市殿妹ニおや、と云有之此片桐市正殿エノ御妾ニ被成候其已後市正殿三橋之家被送候則三橋處ニ十日程居住被成寶藏院へ御越し候寶藏院被果候て以後賢聖院へ御越し被成候其時分石川伊豆殿ノ御内衆清兵衛と申へ嫂入候て御子一人有之其名を御かな殿と申也此御子矢田ノ大宮ニテ矢田之百姓衆へ御酒を被下候次信濃殿舍弟法隆寺ノ椿藏院ハ被爲還俗京都ニ而子二人有之一人ヲ賢聖院ノ弟子ニ居上られ候處ニ此御弟子口道ノ依意趣猿猴ノ松ノ本ニテ果テ候故又弟

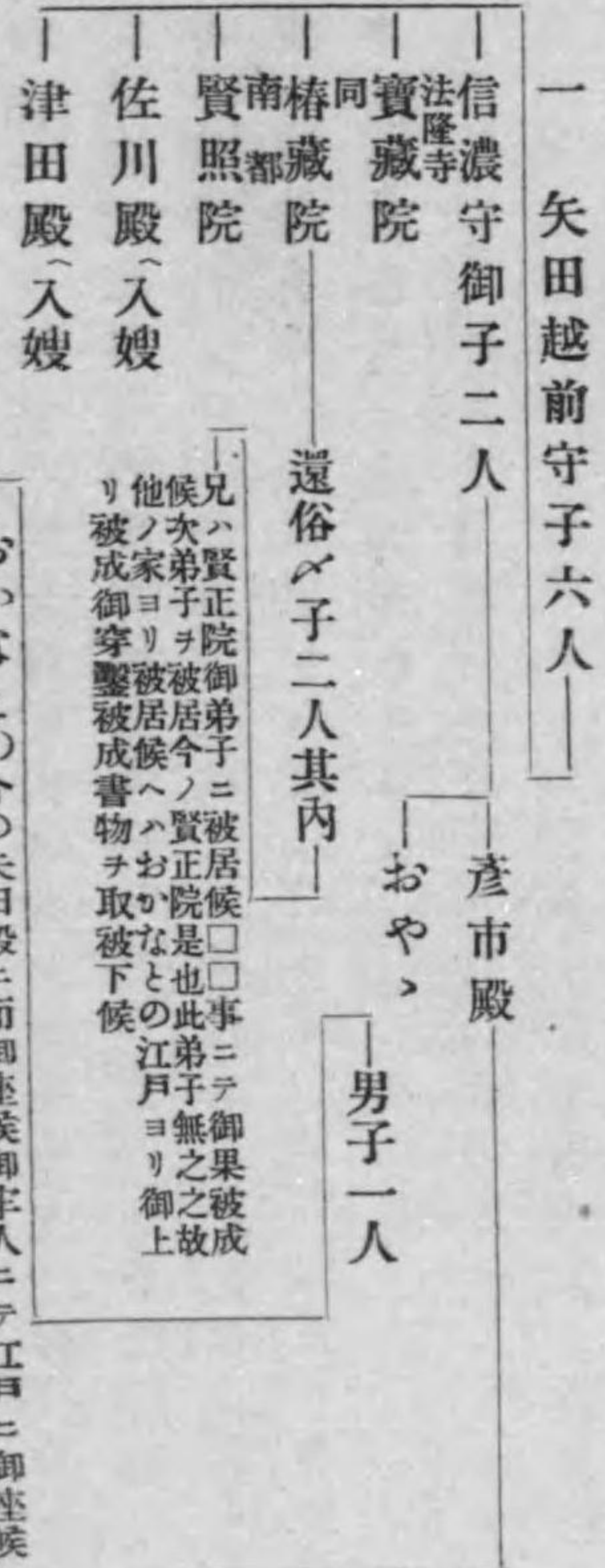
ヲ弟子ニ被居候其後賢聖院可持人無之故他家ノ弟子ヲ御取候ニ付彼のおかな殿寶藏院賢聖院之家本ヲ穿鑿被成此兩院ヨリ狀ヲ取江戸へ御下リ被成候。

三橋家之系圖之事

- 一 三橋ハ信濃ノ三橋也一説ニハ伊勢國田丸ノ城主與云
- 一 三橋家ノ紋ハ茗荷ノ丸也又ハ七ツ輪違モ用ユル也
- 一 三橋家ノ勘狀數通在之然共右衛門失ヒシ也
- 一 三橋家、、、、

右條々三橋一類寄會候而荒増書付畢

矢田殿系圖



御穿人ニテ板倉殿ニ御をりして御座候所矢田へ御歸り被成候時風ノ森ニテたき打ニ付御果候

添下郡

高山壘

北倭村大字高山ニアリ、國民郷士記ニ高山平城高山主殿ト即此氏其出ツル所ヲ詳ニセス、文龜中ニ高山弘頼アリテ其女ヲ三輪神官巨勢正處ニ妻ハセシコト、巨勢系圖ニ見ユ、頼春ニ至リ松永ニ與シ筒井氏ノ爲メニ滅セラル。

國民郷士記曰高山勝治郎家老東四郎右衛門同自性房同民部宗砌同主殿佐頼春松永ニ組天正

田原壘

同村ニアリ、北田原ハ坂上氏之ニ據リ志奥田原ハ奥田原兵藏同源右衛門ノ據ル郷士記所ナルモ共ニ事跡詳カナラス。

舊蹟

羅城門址

續日本紀ニ天平十九年六月於羅城門零ト、羅城ハ通鑑注ニ外之大城也ト見ユ、即チ此レ平城宮城ノ外廓門ナリ、志ニ在郡山東菅耕田者見其礎石マタ名所圖會ニハ其礎石ニ羅城門ノ銘アリシト云ヘリ、北浦氏ノ大和國古班田坪割略圖解ニ野垣村ト下三橋村トノ界ニ今ライセ墓ライセ川トヨノ地名アリ、コハ羅城ノ訛ニテ羅城門ノ跡ナリトイヘリ、則チ門外村ヨリ此所マテハ朱雀大路ノ跡ナリトアリ、尙平城ノ圖參考スヘシ。

藥園

天平勝寶元年十一月藥園ノ新宮ニ於テ大嘗會ヲ行ヒ、其二年正月群臣ヲコニ饗セシコト續日本紀ニ見ユ、蓋藥園宮ハ平城ノ典藥寮ノ藥園ヨリ名ケラレタルモノニシテ東大寺要錄ニ長徳四年諸國諸庄田地注進文ニ藥園宮内田地十三町四段九十五步在大和國添下郡田十町三段百九十步畠三町二百五十六步トアレハ、當時尙地名トシテ其名稱ヲ存セシナリ、同寺ノ古文書ニ

左辨官下藥師寺

應合言上子細東大寺所司訴申妨當寺領大和國清澄庄内藥園村事

右得彼寺所司等去年九月二日奏狀備謹檢案内件村天平勅施入以後至于久安年中爲

寺領之條敢無疑……去久安年中爲藥師寺惡僧觸事被燒失一庄在家畢……彌成

猛惡所殘本庄并寺領郡山等皆以押領……

應保二年五月一日

添下郡



少辨藤原朝臣  
又東大寺要錄ニ建保二年五月ノ寺領藥園庄田畠所當注進文ヲ載ス云ク  
藥園庄

畠現作二十三町七段六十步

不作七町九段三百步

常荒二町四段百八十步

所當地子

田五十二町四段百五十步内建仁三年檢田帳定

常荒三町一段三百步

不作五町二段三百三十步

現作田四十三町三百步

除

一町二段神田

三町預所給

二町二條下司給

二町公文給

一町案主給

六段寺田

二町定使給

二町三條下司給

一町圓師給

一町職仕二人給各五段

一町年預五師免

二町權寺主供田

一町勾當増慶給

二段小綱給

一町圓修房己講給

一町權近江得業給

一町五段公人五人給各二反

一町大進得業仁和寺

定田十七町一段三百三十步内

損田七町八段三百五十步

得田九町二段三百四十步

所當官物二十石三斗六升六合八勺一斗代二斗五升  
三斗代相交代

ト見エ應保ノ頃藥園村ナルモノアリシモ已廢シ郡山材木町八幡社ニ其名稱ヲ存セリ所  
謂藥園八幡社即チ是ナリ。

陵墓

狹木寺間陵 垂仁帝ノ皇后日葉酢姫命ノ山陵ナリ、聖蹟圖志ニ超昇寺村字ゴレウト、陵墓一隅抄ニハ土俗訛曰神功皇后陵、々々頂石棺蓋露、在超昇寺字御陵ト記セルモノ即チ是ナリ。狹木ハ此邊ノ惣稱ニシテ寺間ハ超昇寺若クハ西大寺ニ因レル名稱ナルヘシ。菅家御傳記ニハ日葉酢媛命狹城墓今狹城盾列池前陵是也トアレハ成務帝ノ御陵ヲ狹城盾列池後陵ト稱スルニ對シ、一ニ狹城盾列池前陵トモ稱セシナラン。因ミニ云フ彼ノ野見宿禰カ初メテ土物ヲ以テ殉死ニ代ヘシハ實ニ此陵ニ關係セル事跡ナリ。今其大略ヲ記シ考古ノ一助ニ供セン。垂仁天皇紀ニ二十八年冬十月天皇母弟倭彥命薨十一月葬于身狹桃花坂高市郡於是集近習者悉生而埋立於陵域數日不晝夜泣吟遂死而爛臭之犬鳥聚噉焉天皇聞此泣吟之聲心有悲傷詔拜卿曰夫以生所愛令殉亡者是甚傷其雖古風之非良何從自今以後議之止殉トアル悉生而埋立於陵域ハ如何ナル形狀ヲナシテ埋立テシヤ此文面ノミニテハ知ルニ由ナキモ古事記ニハ之レヲ倭日子命王此王之時始而於陵立人垣ト記セリ所謂人垣トハ人ヲ以テ垣ノ如ク周圍ニ立テ繞スノ義ニシテ大神宮延曆儀式帳御遷宮ノ條ニ人垣仕奉男女等仁太玉申令持捧互左右分立互、、、トアル人垣ハ生死趣ヲ異ニスルモ亦同一ノ形狀ナルヲ推知スヘシ蓋生人ヲ以テ殉埋スルハ靈魂ニ對シテ至重至敬ノ義ヲ盡ステフ意思ヨリ出テ古ヘヨリ其風習アリシコトハ雖古風之非良何從自今以後議之止殉トアルモ未タ人垣ヲ立ツルノ太甚シキニ至ラサリシカ倭彥王ヲ葬ムルニ及ヒ初メテコレヲ立

テラレシナリ。

同記ニ三十二年七月皇后日葉酢命薨臨葬有日焉天皇詔曰從死之道前知不可今此行之葬奈何於是野見宿禰進曰夫君王陵墓埋立生人是不良也豈得傳後葉乎願今將議便事而奏之則遣使者喚上出雲國之士師壹佰人自領土師等取地以造作人馬及種々物形獻于天皇曰自今以後以是土物更易生人樹於陵墓爲後葉之法則天皇大喜之詔野見宿禰曰汝之便議寔合朕心則其土物始立于日葉酢媛命之墓仍號其土物謂地輪亦名立物和名抄曰地輪波瀾和形日本紀私記山陰線邊作地人形立如車輪也仍下令曰自今以後陵墓必樹是土物無傷人焉天皇厚賞野見宿禰之功亦賜鍛地即任土師職因改本姓謂土師臣是土師連等主天子喪葬之緣也

續日本紀ナル土師宿禰古人等カ奏狀ニモ亦此事ヲ記シテ曰フ土師之先出天穗日命其十四世孫名曰野見宿禰昔經向珠城宮御宇垂仁天皇世古風尙存葬禮無節每有凶事例多殉埋于時皇后薨帝願群臣曰後宮葬禮爲之奈何群臣對曰一遵倭彥王子故事時臣遠祖野見宿禰進奏曰如臣愚意殉埋之禮垂仁政益國利人之道仍率土師三百餘人云々帝既ニ殉葬ノ仁政ニアラサルヲ知リコレヲ禁セシモコ、ニ至リ轉々哀悼ニ忍ヒ給ハサルモ尙慎終ノ禮ヲ厚ウセント欲シコレヲ群臣ニ諮フ群臣聖旨ノ在ル所ヲ知リ咸一ニ倭彥王ノ例ニ遵ヒ人垣ヲ立テントス此際野見宿禰更ニ地土ヲ以テ人馬物形ヲ造リコレニ代用シ永ク殉死ヲ禁セシメタルモノニシテ其恩澤大ナリト謂フヘシ固ヨリ彼ノ備ヲ作ルモノトハ共ニ日ヲ同ウシテ語ルヘカラス。

添下郡

五二一

菅原伏見東陵 垂仁帝ノ陵ナリ、續紀和銅七年四月節見山陵生日入彥伊佐天皇之陵也充守陵三戸マタ

日本靈異記ニ諾樂京活目陵北之佐岐村ナト見ユ、伏見村大字寶來ノ東ニアリテ寶來山ト字ス。

菅原伏見西陵 安康帝ノ陵ナリ、同村大字寶來ノ西字城ノ内ニアリ、俗ニホテングダウサマト

狹城盾列池後陵 成務帝ノ陵ナリ、平城村大字山陵ニアリテ石塚山ト字ス。

小泉保敬氏所藏古圖中ニ成務帝山陵所出瓦器ト題シ左圖ヲ載ス。



徑三寸

狹城盾列池上陵 神功皇后ノ陵ナリ、後陵ノ西北五町許ニアリ、五社神ト字ス。

奈良坂上陵 平城村大字歌姫ノ常福寺ノ東北ニアリ、ヒシヤケト字ス、仁德帝ノ皇后磐足姫

命ヲ葬ル所ナリ、北浦定政曰フ常福寺村ノ東北二町斗ニ字ヒシヤケト云フ平城陵ト云フ

アリ、ソハ山陵志ニ陵制時代ニ當ラス宮車ニ象リテシカモ溝ニ二重アリ、溝ニ二重アル仁

德陵ノ外ニナシ、コハ皇后磐足姫ノ平城坂上墓ナルヘント云ヘルハ實ニ叶ヘリ、古ヘノ奈

良坂ハ山城國相樂郡相樂ヨリ當國歌姫村ニ登ル阪ナリ、此ヒンヤケト云フ古墳實ニ平城

坂上ト云フ地勢ニ叶ヘリト

高野陵 稱德帝ノ山陵ナリ、平城村大字山陵ニアリ、ミサ、キト字ス。

楊梅陵 平城帝ノ山陵ナリ、都跡村大字佐紀ニアリ、ネチ山ト字ス。

河上陵 淳和帝ノ御母贈皇后藤原氏諱旅子ノ陵ナリ、志ニ在小和田村東富小川ト見ユ、一隅

抄ニハ砂村、坤三町許、富川之西、往還、南方今字茶磨山トアリ、就レカ是ナルヲ知ラス。

村國墓 贈正一位命婦阿倍氏ノ墓ナリ、當郡ニアルヘキモ、所在詳カナラス。

新田部親王墓 志ニ在伏見東陵北六十歩許、冢上有小祠、村民祭焉ト見ユルモ未タ確定セラ

レズ。

豐臣秀長墓 郡山町大字新木ニアリ。

眞弓塚 北倭村大字上村ノ長久寺ノ東邊ニアリテ又弓塚トモ呼ヘリ、上村ハ和名抄ニ所謂

添下郡鳥見郷ノ内ニシテ南田原高山ト共ニ今尙鳥見谷ト稱セラル、有名ノ鳥見小河、富一ニ

川ニハ源ヲ高山ノ龍王山ニ發シ鳥見谷鳥見庄、村ノ舊惣稱ヲ經テ平群郡ニ入ル、而シテ長

久寺ハ河ノ東邊ニアリテ塚ハ寺ノ東ニアリ、其形穹窿ニシテ墳壠ノ如ク丘陵ノ如シ、寺號

ヲ眞弓山長弓寺ト稱スルハ即チ此塚ニ因メルモノニシテ饒速日命ノ遺物弓矢等ヲ歛メ

シ所ナリト云ヘル傳説ニ本ツケルモノナラン。

饒速日命天祖ノ詔ヲ奉シ、天孫瓊々杵尊ニ先チ河内ノ河上峰ニ降臨シ、更ニ鳥見白庭ニ

遷リ、土倉長髓彦ニ推サレ、其妹登美彌比女、炊屋姫ヲ妻リ、味間治命ノ物部氏ヲ生ミテ薨シ給

フ、登美彌比女其遺物ノ弓矢衣帶等ヲ鳥見白庭邑ニ歛メ、以テ墓ヲ築カレシコト舊事本紀

ニ見ユ、曰ク

天祖以天璽瑞寶十種授饒速日尊則此尊稟天神御祖詔乘天磐船而天降坐於河內國河上  
哮峯則遷坐於大倭國鳥見白庭山天降之儀明天神紀饒速日尊便娶長髓彥妹御炊屋姬爲  
妃誕生宇摩志麻治命、、、  
汝子如吾形見物即天璽瑞寶矣亦天羽々弓天羽々矢復神衣帶手貫三物葬歛於登美白庭  
邑以此爲墓者也

前後ノ事跡本書ニ詳カナリ宜ク就テ見ルヘシ抑々舊事紀ナルモノハ聖德太子蘇我馬  
子ノ選修スル所ナルモ其書ハ既ニ蘇我蝦夷ノ火ニ滅ヒ現存流布ノ本ハ全ク後人ノ著作  
ナリト云フ其何人ノ手ニ成リシヤ詳カナラスト雖モ舊說ニ物部氏其家門ノ寒微ヲ慨キ  
自己ノ本系譜牒ヲ基本トシテ之ヲ作りタルモノト云ヘリ其レ或ハ然ラン故ニ物部氏ノ  
事跡記シ得テ詳カニ一部八卷中コレニ關スルモノ多キニ居レリ要スルニ饒速日命降臨  
ノ事跡ハ頗ル奇恠ニ涉リ悉ク信スルニ足ラサルモノナキニシモアラスト雖トモ兎ニ角  
物部氏累世相承ノ傳説ナルヘシ  
饒速日ノ降臨スト云フ河内ノ川上哮峯ハ河内志ニ彼國ノ讚良郡西田原ニアリ今磐船山  
ト稱ス峽中エ石アリ長五丈許和州南田原ノ石船明神ノ神輿コ、ニ遷幸ス因テ岩船岩ト  
呼フ今其禮式廢スト雖トモ每歲六月晦日村民相集リ禊事ヲ修スト見ユ即チ今ノ岩船山  
ノ舊名ニシテ南田原ト東西腹背ヲ相爲セリ又鳥見ハ饒速日ノ未タ降臨ナカリシ以前ヨ  
リ長髓彥ノ據有セシ所ニテ長髓ノ一名ヲ登美比古ト云フモ亦此地ノ酋長タルノ義ナリ  
古ヘハ其區域頗ル廣ク中世立テ一郷トナシ名クルニ鳥見ヲ以テシ且郷己廢ノ後モ尙

南田原高山上村ヲ鳥見谷ト稱シ木鳥三碓中村ヲ鳥見庄ト呼ヒシヲ以テ其方域ヲ推知ス

南田原高山上村ヲ鳥見谷ト稱シ木鳥三碓中村ヲ鳥見庄ト呼ヒシヲ以テ其方域ヲ推知ス  
ヘシ白庭山ハ鳥見谷ノ上村ニアリ  
テ即チ此眞弓岡ノ舊名ナリ饒速日  
川上哮峯ニ降臨スルノ後鳥見ノ白  
庭山ニ遷リシカ長髓彥ニ推サレ暫  
クココニ居リシカ薨スルニ及ヒ妃  
登美彌姬其遺物天羽々弓天羽々矢  
等ヲ此岡ニ歛メ墳墓トナセシニヨ  
リ更ニ眞弓塚トモ弓塚トモ稱セル  
モノニシテ是ヨリシテ終ニ白庭ノ  
名稱ヲ失ヘリ此レ編者ノ臆説ニア  
ラス之ヲ記録ニ徵スルニ歷々證憑  
アリ下ニ大和國陳迹名鑑圖居南都鳥  
但法隆寺本ニハ名ノ中ヨリコレニ係  
鑑舊跡圖ト題セリ  
且山邊郡石上神宮ハ物部氏ニ關係  
ヲ有スル舊社ナルニ今其舊神官森  
氏所藏ノ布留神宮舊記ト題スルモ

添下郡

大和國陳迹名鑑圖所載長久寺近傍之圖說

代天岩船地神其御  
子寶及日尊授命二  
神乘岩相添河二  
川上ニテ降玉國ハ  
是カト見倭國ノ鳥  
見移玉此里ニ  
長髓彥カ妹御炊屋  
娶此産映御中屋  
速日尊神崩玉ハ  
天命ヲ引上御骸ハ  
ニ夢ノ告有御矢  
白峯ニ御ナ鳥見  
今ハ字ニ御塚也命  
申ス物麻志是御留  
ニ祭物也部間治命  
眞弓御弓ノ祖布兒  
矢御衣日ハ弓塚ト  
見ノ御速ナ寺也  
鳥見長衣是治也  
坊長御弓是治也  
社尊御彦カ寺也  
皇御立ハ炊屋武天



ノヲ閱スルニ曰ク

略上先河内國哮峯或人云哮ハ今ノ天降高貴寺ナルヘシ其後大和國鳥見白庭山今ノ鳥見谷真弓山長久寺ノコトナリニ遷リ給

ヒテ長髓彦妹御炊屋姬ヲ妃トシ御子宇麻志摩治命ヲ生給フ

又石上考前ノ人照井名柄ニ與ヘタルモ森氏ノ先人ナリ此書ハ故給木重胤森氏ヨリ寫取リ之ヲ羽

略上從夫大和國鳥見白峯ニ移玉ヒ其里ニ長髓彦有リ其妹炊屋姬ヲ娶リ映伝ノ中ニ速日

尊神去玉フ夢御告有御弓矢ニ及御衣ハ鳥見白庭ニ葬リ陵トナス今ニ鳥見ノ弓塚ト云

トアリテ其言フ所陳述舊鑑圖說ニ符節ヲ合スルカ如シ亦以テ其誣ユヘカラサルヲ知ル

ヘシ

然ラハ則チ真弓岡ハ鳥見白庭ノ地ニシテ其塚ハ饒速日命ノ遺物ヲ歛メシ所ナルハ更ニ

疑ヲ容ルヘカラス而シテ圖說ニ鳥見長弓寺坊舎八坊長髓彦カ舊迹饒速日尊御炊屋姬席

社有リ觀音ハ聖武天皇御建立トアル文義ヲ推スニ長弓寺地ハ長髓彦ノ舊跡ニシテ饒速

日命夫妻ノ廂社モ此所ニ在リト云ヘルニ外ナラス案スルニ延喜式神名帳ニ添下郡登美

神社トアリ大和志ニ在木島村與近隣六村共預祭祀ト見エ今ハ富雄村大字石木ノ村社ヲ

以テ式内登美神社トナス石木モ亦古ヘノ鳥見ノ地方ナルヘキモ元來鳥見ノ本處ハ南田

原高山上村ニシテ河内ノ私市ニ越ユル坂路即チ岩船越ニ沿ヘル山間ノ部分ノ惣稱ナリ

故ニ古ヘハ岩船越ヲ上津鳥見路ト稱セリ事春日若宮神主千鳥家ノ古文書ニ見エタリ然

ラハ式内登美社ハ當ニ鳥見ノ本處長久寺邊ニアルヘキナリ石上神宮舊記舊神官森氏藏ト題ス

ルモノニ櫛玉饒速日尊大和國鳥見明神河内國岩船明神是也ト文意ヲ玩味スルニ饒速日

尊ヲ大和ニテハ鳥見明神ト祭り河内ニテハ岩船明神ト祭ルノ謂ナリ今南田原ニ岩船社

ト稱スルアルモ他ニ鳥見明神ト稱スルモノナシ蓋南田原ノ岩船社ハ饒速日ノ初メテ大

和ニ入り給ヒシ舊迹ニ就テ祭レルモノ鳥見明神ハ圖說ニ謂エル饒速日夫妻ノ廂社ニシ

テ是ソ正シク式内登美神社ナルヘキ

今長久寺邊ヲ求ムルニ鳥見明神ト稱スル社頭ナキモ當寺ノ鎮守ニ牛頭天王八王子アリ

牛頭天王ハ大宮ト稱シ八王子ハ若宮ト稱セラレ古來寺家三郷ノ上中下ノ最モ尊崇セシ社

頭ナリ同寺藏假名縁起中卷ニ附録スル長弓寺年中行事鎮守祭ニ

一若宮八王子 八月十七日祭禮

一一言主 九月九日祭禮

右兩社之神職者上郷下郷頭人座上隔番任之諸役免除之也

一大宮牛頭天王 九月十一日祭禮

神職者衆僧一薦之任也三郷各有頭人一箇年中精進潔齋至九月十一日奉供圓鏡饗膳

奏幣帛神馬之渡也

トアリテ祀典頗嚴重ナリ當社ノ創始ハ同寺縁起ニ據ルニ天平十八年聖武帝行基ニ勅シ

テ伽藍ヲ造ラシムルニ當リ其鎮守トシテ牛頭天王八王子ヲコニ祀リタルモノナリト

云フモ寺家ノ縁起悉ク信スヘカラサルハ既ニ彼ノ寺ノ下ニ全文ヲ引キ辯スルカ如シ往

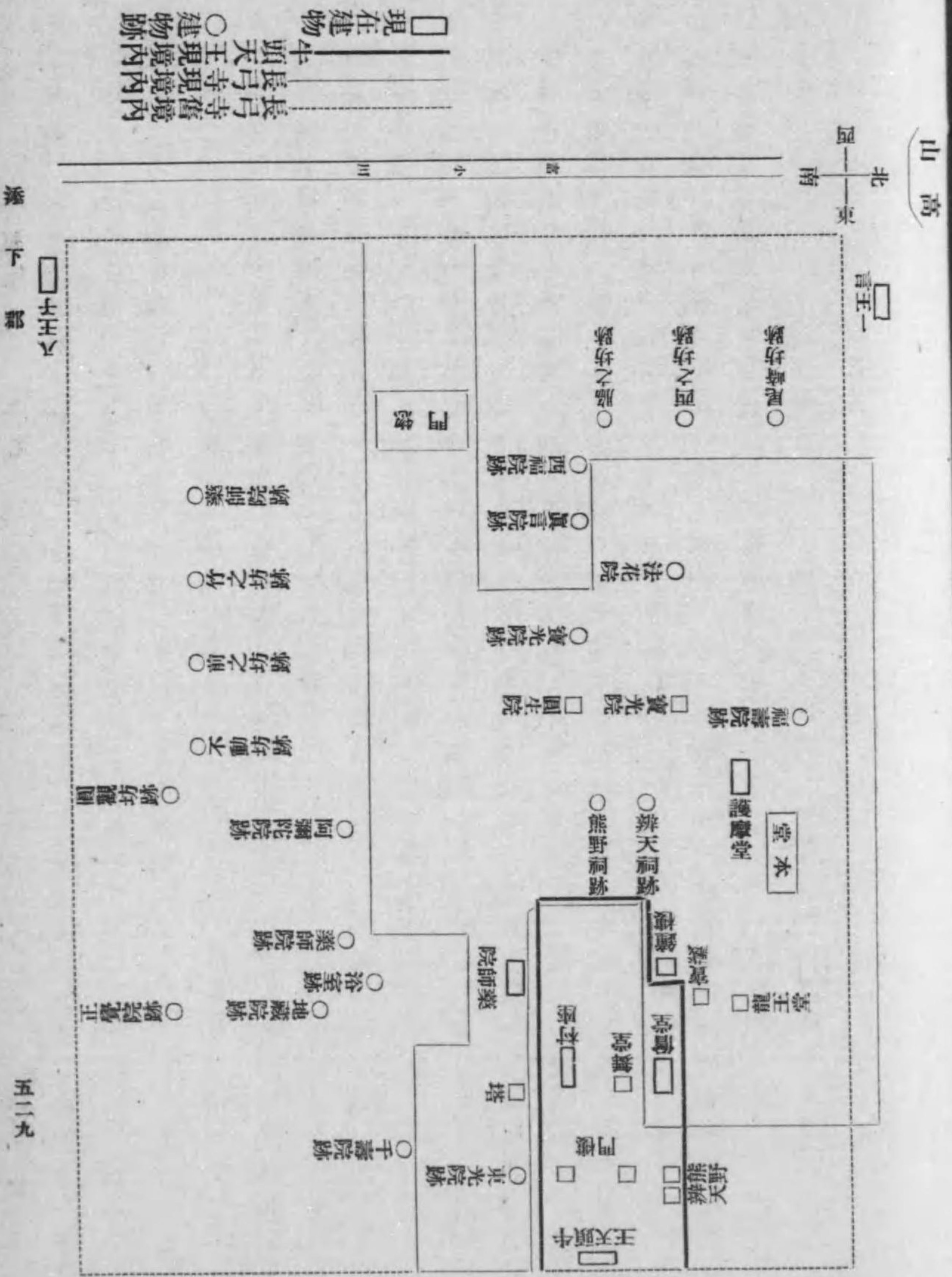
添下郡

五二七

昔空海ノ徒本地垂跡ノ説ヲ唱ヘ神佛ヲ習合セシヨリ有名ノ社頭ニハ神宮寺ヲ立テ社僧ヲ置キ其祭事ニ與ラシメ終ニハ天王ト名ツケ或ハ八幡ト稱シ以テ伽藍ノ鎮守タラシムルモノ全國至ル處比々之レ有リ願フニ大宮ハ式内登彌神社ニシテ即チ圖説ニ謂ユル鳥見長弓寺、、、、、饒速日尊御炊屋姫庶社有ト云ヘルモノ若宮ハ其子宇麻志麻治命ヲ祭レルモノナルヘキヲ中世浮屠氏神地ニ伽藍ヲ建立シ行基ノ作テフ白檀觀音像ヲ安置シ彼真弓塚ニ因ミ之ヲ真弓山長弓寺ト稱セシヨリ終ニ牛頭天王ト稱セラレ伽藍ノ鎮守神トナルニ至レルモノナラン此事殊ニ記録ニ所見ナシト雖トモ地理相合フノミナラス下ニ掲クル同寺ノ伽藍圖ヲ展セハ蓋何人モ首肯スル所ナルヘシ

長久寺ノ舍坊祠堂ハ普通ノ伽藍ト變則ヲナセルモノナリ先ツ惣門ノ前ニ大鳥居アリ是レ正ニ大宮牛頭天王ニ屬セルモノニシテ以テ全境内ヲ總括セリ而シテ社殿ハ東端ニアリテ堂塔坊室ハ其道敷ヲ開キテ南北ニ散在シ皆大鳥居ヲ經由シテ出入スルヲ常トナス是レ實ニ大宮ノ既ニ長久寺創始以前ニ成リ境内悉ク神地タリシ的證ニシテ所謂饒速日夫妻ノ庶社長久寺ニ在リトスルモノ大宮ヲ措テ將タ安クニカ在ル故ニ今天羽々弓等ヲ歛メシ處ハ即チ此真弓塚ナリト確定スルト同時ニ式内登彌神社モ亦大宮牛頭天王ナラント假定シ以テ後考ヲ俟ツ

長久寺境内坊舍祠堂之圖



# 平群郡

神武帝ノ東征スルヤ先ヅ難波ニ抵リ流ニ溯リ河内ノ草香邑ノ白肩津ヨリ上陸シ兵ヲ勒シ龍田ヲ經テ大倭ニ入ラントスルモ道路狹峻ニシテ並行スルヲ得ス故ニ更ニ東シ膽駒山ヲ踰エ中州ニ入り鳥見ノ會長長髓彦ト戰ヒ給フ龍田膽駒ノ地名夙ニ紀元前ニ知ラレ永ク著名ノ處トナレリ景行帝西征シ日向ノ兒湯縣ニ幸シ遙ニ京師ヲ懷ヒたゞみこも平群ノ山ト詠ス是平群ノ稱ノ國史ニ見ユル始ナリ平群山ハ即チ今ノ平群谷ノ諸山ニシテ其間ノ諸邑ヲ平群里ト稱ス武内宿禰ノ子木菟宿禰嘗テコヽニ住シ子孫平群臣ノ氏姓ヲ負フ而シテ其東南部ニハ天津彦根命ノ子孫額田氏及同族菅田氏等コレニ住ス因テ其地ヲ額田部村ト稱セリ推古帝ノ朝ニ聖德太子宮室ヲ斑鳩ト飽波トニ造ル尋テ伽藍ヲ斑鳩宮ニ起ス之レヲ法隆寺ト稱ス其飽波ニ於ケルハ蘆垣宮ト稱ス飽波ハ今ノ安堵以西ノ地方ナリシト云フ大化中所在ノ私領ヲ收メ更ニ國郡ヲ立ツルニ及ヒ平群飽波ノ二郡ヲ置カル後チ飽波郡ヲ廢シ那珂飽波平群夜麻坂門額田ノ六郷ヲ以テ一郡トナシ名ツクルニ平群ヲ以テス爾後沿革記録ノ徵スヘキナシ降テ足利氏ノ季世ニ至リ菅田龍田立野鳥見島ノ諸豪族各城壘ヲ築キコレニ據ル是時ニ當リ三好ノ宰松永久秀信貴山ニ城キ筒井氏ト抗衡シ大和ヲ平吞セントス其勢頗猖獗ナリ菅田コレニ與シ後チ共ニ相亡フ島氏ハ累代筒井ノ麾下ニ屬シ其三老ノ一トシテ椿井ニ治シ勢力甚タ旺ンニ郡中ノ諸豪概ネコレニ服從セシト云フ筒井諸記ニ平群郡馬上 雜兵文祿御改高村數七十二ヶ村高貳萬八千九百六拾九石餘ト是當時ノ形勢ナリ

德川氏ニ至リ本多氏及ヒ院家俗人等之ヲ分領シ幕府ノ直領モ亦其間ニ相錯ナル大和國郷

帳ニ據リ村名石高及ヒ領主ヲ記スレハ左ノ如シ

菅田村

内

百九十六石八斗七升貳合

幕府直領

一、四百貳石二斗二升

幕府直領

一、七百四十一石七斗三升五合

同

一、三百八十九石一升三合

同

一、五百七拾五石一斗三升五合

本多唐之助

一、百四拾六石七斗三升四合

本多唐之助

一、四百二石八斗五升一合

本多唐之助

一、六百二十四石一斗

同

一、六百四拾二石四斗二升六合

同

一、八百四拾四石四斗四升五合

幕府直領

内

二百八石六斗五升六合

土屋甚助

百三十六石六斗二升二合

同 忠左衛門

百三十六石六斗二升四合

同 甚兵衛

十二石

額安寺領

宮堂村 八條村 長安寺村 馬司村 柏木村 池澤村 今國府村 稚木村 額田村

一、十八石一斗

内

五石一斗三升二合

土屋忠右衛門

五石一斗三升二合

同 甚兵衛

一、二百四十二石三斗一升一合

幕府直領

一、九百四十四石四斗九升九合

同

一、三百六十八石八斗三升四合

同

一、千四百五拾七石四斗七升八合

同

一、六百八拾四石三斗二升一合

同

一、四百拾六石三斗四升

同

一、四百五十二石二斗三升

同

一、六百三十四石一斗七升一合

音樂人

一、九百四十六石九斗一升

幕府直領

一、四百十三石八斗二升三合

同

一、百拾六石一斗二升

同

一、二百五十四石二斗五升九合

本多唐之助

内

七十五石 幕府直領

平群郡

西窪村 岡崎村 東安塔村 西安塔村 笠目村 高安村 目安村 興富村 河波村 東福前寺村 幸村

會ヶ嶺村 額田支郷





九十九石二斗 樂人

- 一、百九十八石五斗七合
- 一、百三十九石一斗八升五合
- 一、七拾七石八斗三升五合
- 一、二百八十五石七斗九升
- 一、五百五拾四石二斗六升三合
- 一、七拾三石壹斗三升
- 一、三百九石八斗七升三合

内

二十五石二斗九升 本多唐之助

- 一、四百九十七石八斗五升
- 一、八百七十五石一斗六升二合
- 一、三百三十七石五斗一升一合
- 一、百三十八石八斗五升
- 一、七百二十六石二斗五升八合
- 一、二百七十四石七斗九升
- 一、貳百石六斗五升
- 一、九十七石四斗九升八合

同 同 同 同 同 同 同

乙 鳴 樺 樺 樺 西 上  
 田 川 原 原 木 向 庄  
 村 村 村 村 村 村 村

本多唐之助 同 同 同 同 同 同 同

鬼 大 有 壹 藤 萩 小 小  
 取 門 里 分 尾 原 平 瀬  
 村 村 村 村 村 村 村 村

- 一、二百七十七石七斗三升六合
- 一、八十七石六斗六升三合
- 一、六百十八石七斗八升六合

内

百九十二石三斗七升五合

- 一、二百八十三石六斗二升七合
- 一、二百八十四石八斗八升七合
- 一、二百二十八石二斗九升
- 一、三百六石九斗四升
- 一、四百二十三石一升

合高三萬千七百五十六石九斗三升二合九勺

村數七十七

明治二十一年町村制ヲ布カル、ニ及ビ郡中ノ町村ヲ分合シテ更ニ平端、安堵、龍田、南生駒、明治、法隆寺、北生駒、富里、本多、三郷ノ十町村トス。

同 同 松平近江

西 小 菜  
 畑 倉 畑  
 村 村 村

本多唐之助 本多唐之助 松平近江 同 同 同

山 谷 辻 小 俵  
 崎 田 村 明 口  
 村 村 村 村 村

村里

龍田町 龍田山ハ神武天皇紀ニ見エ龍田立野ハ天武天皇紀延喜式祝詞ニ見エ名區タリ足

利氏ノ季世龍田氏コレニ據ルコト城壘ノ下ニ述フ明治二十一年龍田五百井神南服部稻

葉車瀬目安小吉田ヲ以テ一町トナシ龍田町ト稱ス。

生駒村 日本惣國風土記ニ平群郡生駒郷公穀八百九十五束三字田假粟七百三十七丸五毛

田トアル是ナリ中世西畑藤尾萩原小平尾乙田小瀬一分有里大門鬼取小倉寺榮畑山崎辻

谷田俵口小明ノ十七村落ヲ生駒谷ト稱ス明治二十一年町村制ヲ布カルニ及ヒ之ヲ分

チ南北生駒村ト稱ス。

立野 龍田立野ノ稱既ニ天武天皇紀ニ見ユ立野氏ハ物部ノ苗裔ニシテ世々コニ住シ富

豪ヲ以テ聞ユ世ニ立野殿ト稱ス。

長川流鏑馬日記至徳中曰大和武士、、、立野殿、、、

大和國名鑑舊軌圖寺法隆曰龍野氏宇麻志麻治ヨリ十四世孫物部建彦龍野橫廣高橋荒百

ノ祖也大和侍地神ヨリ在々村々ヲ受領而在名ヲ以テ名字ヲ稱ス

應仁ノ頃立野信親ナルモノアリテ大乘院領小吉田服越田尻立野等ノ下司タリ爾後聞ユ

ルナシ蓋松永ト共ニ滅ヒシナラン。

御兵士引付曰正月下旬立野信親

又曰立野分 小吉田庄給主下司服庄給主越田尻庄冬夫賃三貫文中山口口立野庄下司

上立野庄、宇多ノ福智庄、、、此外在々處々右年貢諸公事等無其沙汰一向如私領、

椿井 明治村ノ大字タリ此處ニ椿井アリ志ニ椿井椿井村旁有春日祠ト即此ナリ地名實ニ

コニ出ツ隣村ニ若井アリ二者皆其由來詳カナラス添上郡椿尾井ハコレヨリ移シ南都

椿井町ノ井ハ椿尾ヨリ移セルモノナリト云フ享保九年郡山領分帳ニ曰ク

樂人領平群郡 椿井村

當村氏神下藏大明神

祭神 伊勢八幡春日之三社也

合殿島左近友之ノ靈 神祕々々

島左近友保城地不詳

島左近友之城跡村中并山々三ヶ所ニ御座候

椿井寺 眞言宗

本尊十一面觀世音菩薩當寺往古ハ六坊在之候由當

鎮守春日大明神

椿井 此井廻リ三間餘

世俗ニ此井ノ移シ添上郡椿尾ノ井也其移シ南都椿井町ノ井是也ト云

ト見ユ島氏ハ當村ノ城主ニシテ筒井氏ノ老臣ナリ城壘ノ下ニ椿井寺已廢ス。

額田郷 仁賢天皇紀ニ六年日鷹吉士還自高麗獻工匠須流枳奴流枳等今額田邑熟皮高麗是  
其後也ト額田邑後チ郷名トナル和名抄ニ額田郷惣國風土記ニ額田庄公穀六百九十二束  
假粟五百九十二九三毛田ト即此郷已廢シ今額田部ヲ平端村ノ大字ニ存ス古ヘ額田部氏  
コ、ニ住セシ事額安寺古班田圖ニ見ユ氏ハ天津彦根命ヨリ出テ額安寺ノ開基道慈モ亦  
其苗裔ナリ。

姓氏錄曰額田部湯坐連天津彦根命子天御影命之後也允恭天皇御世被遣薩摩國平隼人  
復奏之日獻御馬一疋額有町形廻毛天皇喜之賜姓額田部也

飽波郡 和名抄ニ飽波郷惣國風土記ニ飽波庄公穀七百八十二束三毛田假粟六百七十五丸  
ト見ユ郷已廢シ今安塔村大字東安塔ニ飽波ノ小字ヲ存ス案スルニ天武天皇紀五年ニ倭

國飽波郡トアリ當時此邊ヲ以テ一郡トナシ飽波郡ト稱セシナリ廢郡ノ年代詳カナラス  
平群郷 和名抄ニ平群郷惣國風土記ニ公穀九百六十二束假粟八百九十六丸三字田ト見ユ

已廢ス中世中宮平堂寺安明寺吉田新家上莊西宮下垣内越木塚若井福貴西向椿木樺原鳴  
川榎原ノ諸村落ヲ平群谷ト稱ス。

耶麻郷 和名抄ニ見ユ延長中ノ法琳寺資財帳ニ法琳寺在平群郡夜麻郷ト法琳寺ハ三井ニ  
アリ又大和名勝圖會ニ高安寺ノ事ヲ記シテ曰フ安塔村の乾にあり此地飽波郷夜麻郷兩

界にして東安塔領地なりト以テ郷ノ方域ヲ概知スヘシ已廢ス。

坂門郷 法隆寺流記資財帳和名抄等ニ見ユ日本惣國風土記ニハ平群郡坂門庄公穀六百九  
十五束三毛田假粟五百六十三丸九二字田トアリ志ニ已廢存立野村ト何ニ據ルヲ知ラス小

杉氏所藏文書ニ本郷ニ係ルモノアリ錄シテ參考ニ供ス。

牒 平群郡坂門郷刀禰并郡廳

欲被依實證署家地肆段玖拾步本公驗紛失狀

在八條九里二十六坪内 此内辰巳角三段藤原仲子處分之

四至 限東法隆寺法師安美地 限南長田宅垣 限北中垣并故安若地

件家地者右京二坊戶主正六位上當國大目原朝臣茂行男自真利手副代々公驗買

得即立券已了而不意之外件本驗他雜書共紛失也因茲可加證署狀如件乞察□□狀依

實以被加證署之以牒

天慶六年七月七日

權少掾 □ 岑在判

件紛失之由聞所被觸愁仍加署名刀禰

平 群 在 判  
平 群 部 統  
丈 部 部  
子 部 部  
三 統

斑鳩里 法隆寺地方ヲ惣稱ス舊迹幽考ニ斑鳩の里は常に斑鳩群居せしより此名あり推古  
天皇九年聖德太子宮をたて給ひて斑鳩の宮といへり今の法隆寺の東院の地これなりか  
の斑鳩の宿せし木は福居といふ所の民家の内にありしが一むかしにやなりけむなさけ  
なく斧をくだして伐けるとぞ聞えしト見ユ。

平 群 郡

神奈備里 三郷村大字立野ニ於ケル神奈備山并杜川ノ方域ヲ汎稱ス、

萬葉

清き瀬に千鳥妻呼ひ山の間に

霞立つらむ神奈備の里

高安里

舊名富小川村ト稱ス、圖會ニ高安里舊名富小川村といふ、承和年中在原業平河内國

高安里に通し時此富小川村に夜々休みし跡なり、然後正暦の比高安村と改めかへたりト

即此高安今富里村ノ大字ニ屬ス、富里ノ新村名ハ蓋義ヲ富小川ノ村里ニ取レルモノナラ

玉

立田山嵐の音も高安の

里はわれにし寺とこたへよ

阿 一 上 人

打廻里

志ニ在神南村、南龍田、河陽ト、神南今龍田町ノ大字ニ屬ス、

萬葉

神なひの打廻のくまの石淵に

かくれてのみやわれ戀ひおらん

因幡里

志ニ在稻葉村、天平神護元年閏十月天皇自弓削行宮還到于此ト、稻葉亦龍田町ノ大

字ニ屬ス、

哥 枕

立わかれいなはの里に長居して

さやはちきらし待そわひしき

山 川

龍田山

立野ノ上方ニアリ、山勢雄偉巨川麓ヲ遠リ山秀テ水清ク名勝タリ、紅葉ヲ以テ世ニ

著ハル、其河内國大縣郡ニ達スル坂路ヲ立田越ト稱シ又龜ノ瀬越ト云フ、即チ大和ヨリ難

波ニ至ルノ古道ナリ、神武天皇紀ニ遡流而上、至河内國草香邑青雲白肩津、、、皇師

勒兵步趣龍田而其路狹險人不得並行乃還更欲東踰膽駒山而入中州、、、ト是ナリ、

萬葉

白雲の龍田の山の瀧の上の小鞍の山に、開きをゝる櫻の花は、山高み風し止まねは、春

雨の繼て降れば、上枝は散過にけり、下枝に残れる華は、暫くは散るな亂れそ、草枕旅

行我か、歸り來るまでに反哥我ゆきて七日は過し龍田彦ゆめ此花を風にちらすな

古 今

大伴の三津の泊に舟は出て龍田の山をいつかこえいかむ

からにしき立田の山も今よりは

紅葉なからにときはならなん

生駒山

生駒谷ノ西ニアリ、半ハ河内ニ跨ル、東ニ小峰アリ岩船山ト呼フ、

萬葉

平 群 郡

妹かりと馬にくら置て射駒山

うち越來れは紅葉ちりつ、

平群山 平群谷ノ諸山ヲ稱ス、

日本紀 景行天皇十七年三月幸子湯縣、

はしきよし、わきへのかたゆ、くもるたちゐる、やまとは、國のまほら、た、なつく、あをかき  
やまは、こもれる、やまとし、うるはし、いのちの、ましけんひとは、た、みこも、へぐりのやま  
の、このこ

萬葉

韓國の、虎てふ神を、いけとり、に、八ツとりもちて、その皮をた、みにさして、八重た、み、平  
群の山に、四月とや、五月はほとに、藥狩、つかふる時に、あしひきの此片山に、ふたり立ち、い  
ちひがもとに云云

小倉峰 兩處アリ、一ハ立野ノ西ニシテ土人ヲクンロト稱ス、古歌ニ所謂龍田の山の瀧の上  
の小倉の山ハ即此、一ハ小倉寺ノ上方ニアリ、

新古今集

白雲の春は重ねて立田山

小倉の峯の花匂ふらし

夫木

立田路の小倉の峯に散る花は

瀧の上より越ゆる波かも

棕嶺

南生駒村大字西畑ニ屬ス、大和ヨリ難波ニ達スル古道ナリ、北ニ生駒山、南ニ小倉峰ア  
リ小倉峰ヲ略シテ倉嶺ト稱シ更ニ倉銀棕嶺ノ文字ヲ假用ス、俗ニ之ヲクラガリト呼フ

ハ轉訛ナリト云フ、圖會ニ

三室山

一名神奈備山 龍田神社ノ敷地及ビ近傍ヲ汎稱ス、舊迹幽考ニ本宮より四町許三室  
は神の社をいへり註抄三室山は神のいます山なり願注ト見ユ是ナリ、密勘

古今

立田川紅葉なかる、神なひの

三室の山に時雨ふるらし

千はやふる神なひ山の紅葉ゝに

おもひは掛けし移らふものを

拾遺

神なひのみひろの岸やくつるらん

立田の川の水の濁れる

占手山

在所詳カナラス、蓋三室山ノ陰ヲ惣稱セルナラン、

名歌集

ふく風にすさひやすらん神なひの

うらての山の峯の紅葉

平群郡

信貴山 信貴畑ノ上方ニアリ、舊名ヲ井上山ト稱ス、萬葉ニ所謂春霞井上ヨ直に道はあれト

ト即此。

奈良志丘 龍田名勝志ニ平群川川今ノ龍田ヲ云フノ東岸車瀬ノ傍ニアリト。

萬葉

神なひの磐瀬の杜の蜀魂

ならしの丘にいつか來鳴かむ

神奈備社 龍田神社ノ杜ヲ謂フ、

古今

神無月時雨もいまたふらなくに

兼てうつらふ神なひの杜

詞

紅に見えし梢も雪ふれは

白木綿かくる神なひの杜

金葉

龍田姫千重の錦をそめたて、

梢にさらす神なひの杜

磐瀬社 龍田名勝志ニ神奈備社ノ南四丁許龍田川ノ北岸ニアリ、此邊水中ノ岩ハ黒色ノ埋

木ナリト。

舊迹幽考曰四月四日祭禮に岩瀬に築をうち此日神供の魚をとるの舊例今の世に絶へ

す

行囊抄曰岩瀬ハ自路左ニ流ル、河瀬ヲ云此瀬ニ築ヲ掛テ魚取リ神ニ供フ岩瀬杜ハ川

邊ニアリ名所也

本宮社記諺解曰天和三年除地改ノ節森三十間ニ九間有之四月四日瀧祭魚番小屋材木

此森ノ木ニテ致候様片桐被仰付尤先格ニ依テ也

萬葉

神なひの岩瀬の杜の喚子鳥

痛くな鳴きそ我が戀まさる

後撰

立田川立なは君か名を惜しみ

石瀬の杜の謂はしとそ思ふ

千種

載後

神なひの石瀬の森の冬枯に

三室の山は雪降りにけり

柏木社 舊迹幽考ニ柏木杜ハ額安寺の坤十町はかりト。

六帖

柏木の森の下草年ふとも

平群郡

立野小野

奉氏、

古 今

光をいつか見んとたのみし

龍田神社ノ地ヲ謂フ、延喜詞式ニ御名波天乃御柱乃命國乃御柱乃命止御名者悟

龍田乃立野乃小野爾吾宮波定奉氏、

小野といふ處に住侍りける時紅葉を見てよめる

貫 之

秋の山紅葉を幣とたむくれは

すめる我さへ旅こちする

壬 二

行まゝに立野の野邊の霞かな

わくとやよその人は見るらん

額田野

萬 葉

額田部ニアリ。

さぬか田の野邊の秋はき時なれば

今さかりなり折てかさゝん

浅小竹原

夫 木

在所詳カナラサルモ澄月歌枕ニ神奈備ノ部ニ編入セシヲ以テ姑クコ、ニ掲ク。

枯ぬるか衣の秋の神なひの

浅小竹原の霜の下草

龍田川

志ニ詳カナリ就テ見ルヘシ。

平城御製

立田川紅葉亂れて流るめり

わたらは錦中やたえなむ

古 今

神なひの山を過行秋なれば

立田川には麻は手向る

平群川

龍田町ノ西ニアリ、今龍田川ト稱スルモノ即チ古ヘノ平群川ナリ。古今目錄抄ニ法隆寺之西南方在龍田大明神當寺鎮守也其西有河名平群川ト以テ證スヘシ。源ヲ平群谷ニ發シ龍田ヲ過キ神南ニ至リ神奈備川ト稱セラレ大和川即チ龍田川ニ入ル。ハ龍田川ノ神奈備川

モナリト

萬 葉

蛙なく神なみ川に影見えて

今や咲くらん山吹のはな

同

暫くも行て見てしか神なひの

淵は淺ひて瀬にか成らむ

平 群 郡



紅葉川 龍田名勝志ニ坂根ヨリ久度ニ至ルノ途ニ板橋アリ此處ヲ云フト、圖會ニハ立野ノ西ノ小溝ナリト云ヒ舊跡幽考ニハ紅葉川ハ立田川ノ異名ナリト云フ、孰レカ是ナルヲ知ラス。

月清集

秋風の龍田山よりなかれきて

紅葉の川をくゝる白波

富小川 源ヲ添下郡龍王山ヨリ發シ二名三碓ノ間即チ鳥見地方ヲ流レ郡山ノ西ヲ經、小泉ニ至リ本郡ニ入り高安ニ於テ大野川トナリ笠目ニ至リ廣瀬郡ニ入ル、  
日本書紀

いかるかの富の小川の絶えはこそ

我大君の御名わすれえめ

萬葉

眞薦かる大野川原のみこもりに

戀にし妹がひもとくわれは

垣津田池 圖會ニ法隆寺の鎮守天滿宮の前の池也里人は天滿池といふトアレトモ此天滿池ノ事ハ古今一陽集ニ猪名部池廣三此池者去金光院源當今ノ宗寺ノ地之北壹町也康和中築之抄取意案今俗曰天滿池是乎ト見エ垣津田池トハ自異ナルヘシ、本宮名所記ニハ三室山ノ麓今叶田池ト云フトアリ、下ニ載スル古歌ニ據レハ本宮名所記ノ説是ナルニ近シ、

萬葉 神なひの清き三田屋の垣津田の池の堤の百たらず世槻枝に水枝さし、秋のもみちは、、、、、、、、、、、

萬葉

因可池 法隆寺ニアリ、幽考ニ「いつくといふこと尋ねしにしれす、當世蓮池院の池はひかし蓮池にて侍りしより此院號ありもし爰の事にや侍なん、法隆寺の寺中にあり」ト即此。

斑鳩のよるかの池のよろしくも

君をいはねはおもひそわかする

夫木

いかるかやよるかの池は氷れとも

とみの小川を流れたえせぬ

菅田池

幽考ニ二階堂村の南菅田にあり俗にこもが池といふト。

久安百首

戀をのみすかたの池にみえさえて

すまてや見なん名こそおしけれ

竹原井 在所詳カナラス、但法隆寺々要記ニ延文五年ノ龍田宮八講御供田注文ニ一反竹原田源次後家一反竹原田平二耶作ト見ユルモ亦其處ヲ知ラス、

萬葉 平群郡

五五一

上宮聖德太子出遊竹原井也時見龍田山死人悲傷御作歌一首  
家ならば妹か手まかん草枕

客にふしたる此旅人あはれ

夫木

朝な〜立つ朝霧の寒きにも

たかはら山の紅葉そめけん

歌枕

たかはらの石井の水やあまるらん

龍川の山の五月雨のころ

神社

龍田神社

三郷村大字立野ニアリ延喜式神名帳ニ龍田坐天御柱國御柱神社二坐 並名神大  
新トアル即是ナリ俗ニ龍田ノ本宮ト稱スニレ新宮ニ對スルノ稱ナリ中世二十一社ノ其  
一ニ居リ今ハ官幣大社タリ祭神自明カナリ但天御柱ハ志那都比古國御柱ハ志那都比賣  
ノ別名ニシテ即チ風ノ靈ヲ祭レルモノナリ

鎮座

延喜式龍田祭詞曰龍田爾稱辭竟奉皇神乃前爾白久志貴島爾大八島國所知志皇御孫命乃遠御  
膳乃長御膳止赤丹乃穗爾聞食須五穀物乎始氏天下乃公民乃作物乎草乃片葉爾至万豆不成一年  
二年爾不在歲真尼久傷故爾百能物知人等乃ト事爾出牟神乃御心者此神止白止負賜支此乎  
物知人等乃ト事乎以氏ト止母出留神乃御心母無止白止聞食氏皇御孫命詔久神等乎波天社國  
社止忘事無久遺事無久稱辭竟奉止思志行波須乎誰神會天下乃公民乃作々物乎不成傷神等  
波我御心會止悟奉禮止宇氣比賜支是以皇御孫命大御夢爾悟奉久天下乃公民乃作々物乎惡風  
荒水爾相都々不成傷波我御名者天乃御柱乃命國乃御柱乃命止御名者悟奉氏吾前爾奉奉  
幣帛者御服者明妙照妙和妙荒妙五色乃物楯戈御馬爾御鞍具氏品々乃幣帛備氏吾宮者朝  
日乃日向處夕日乃日隱處乃龍田乃立野乃小野爾吾宮波定奉氏吾前爾稱辭竟奉者天下乃  
公民乃作々物者五穀物乎始氏草乃片葉爾至万氏成幸爾奉奉止悟奉支是以皇神之辭教悟奉處  
仁宮柱定奉氏此皇神能前爾稱辭竟奉爾皇御孫命乃字豆乃幣帛乎令捧持氏王臣等乎爲使

氏稱辭竟奉久止皇神乃前爾白賜事乎神主祝部等諸聞食止宣ト一篇ノ祝詞以テ當社ノ創立ヲ知ルヘキ縁起文トナスニ足レリ志貴宮能大八島國所知志皇御孫命ハ即チ崇神帝ナリ案スルニ帝ノ即位五年風雨相乖キ五穀登ラス加フルニ疾疫流行シ人民多ク天亡ス帝以テ神祇ノ所爲トナシ七年大ニ群神ヲ祭リ爲メニ天社國社ヲ定メ神地封戸ヲ寄セシコト國史ニ見ユ今此祝詞殊ニ年月ヲ言ハサルモ其七年ノ創祀ニ係ルモノナルコト復タ疑ヲ容ルヘカラス

神 戸

天平二年大和國大稅帳正倉院曰龍田神戶稻肆佰參拾束捌把租壹拾束合肆佰肆拾束捌把新抄勅格符抄曰龍田神三戸大和

祭 祀

天武天皇紀曰四年四月癸未遣小紫美濃王小錦下佐伯連廣足祠風神於龍田立野

大寶神祇令曰孟夏風神祭義解云謂廣瀨龍田二祭也欲令疹風不吹稼穡滋殖故有此祭又曰孟秋風神祭義解云謂孟夏祭同以下廣瀨社

奉 幣

三代實錄曰貞觀元年九月八日大和國龍田神遣使奉幣爲風雨祈焉

又曰元慶二年七月廿六日大和國廣瀨龍田兩社造立各倉一字爲納神寶也 又曰元慶三年

六月十四日奉遣使於大和國龍田社奉神財

延喜臨時式曰凡龍田社庫鑰匙者納置官庫祭使官人臨祭請取事畢返納

雜 事

大同類聚方曰阿豆散藥アツサクサリ 大和國平群郡龍田乃神社乃巫之家仁傳不流藥 痰氣甚肩息二而吐食痰水咽喉塞不通額仁汗出大便不便者二用于流方 可奈岐五分非女久差二分以波加豆良三分木良以志二分奈流波自可美三分

宇陀町ノ某氏藏温古聚卷一ニ左ノ打本ヲ載ス蓋古升ノ銘ナラン今當社ニ亡シ

〔龍田明神寶庫收〕

黃器盃一  
釣舛百合一  
慶雲二己年

往馬坐伊古麻都比古神社 南生駒村大字一分ニアリ神名帳ニ往馬坐伊古麻都比古神社二座並大月ト見ユ古ヘハ大社ニシテ月次新嘗ノ官幣ニ預レリ中世以來神宮寺ト稱スル社

坊十一院アリテ祭事ヲ掌リ生駒谷ノ諸村コレニ預レリ今郷社タリ 寬文寺社記曰略上生駒明神の御社七所有本地神功皇后同母皇葛城高賴姫の御社なるよ

平 群 郡

五五五

し、生駒谷十七郷の氏神なり、されとも寛文五年正月二日の夜焼失す、天火なりと聞えし、樓門所々の小社残りて今に在り。

大和志曰在一分村生駒谷共預祭祀其稱神宮寺者凡十一、曰大坊曰東坊在祠旁曰安明寺在萩原村曰圓福寺在有里村曰寶幢寺在小平尾村曰岡坊曰大門坊曰中坊曰新坊在小倉村曰福田寺在西畑村曰西福寺在鬼取村。

祭 神

上ニ引ケル寺社記ノ説ニハ神功皇后高額媛命ヲ祭ルト云フモ信シ難シ、日本惣國風土記ニ平群郡伊古麻津比古神社圭田五十六束所祭饒速日命也雄略三年五月始奉神田行式祭有神家巫戸等トコレニヨレハ饒速日命ヲ祭レルニ似タルモ他ニ徴スヘキ證左ナケレハ未タ確説トナスニ足ラス、考證ニハ伊奘諾伊奘冊ノ二神トスルモ亦據ナシ、案スルニ龜相記ニ曰ク、

行馬社一名鴨駒社在大和國平群郡火燧木神也大嘗御代々採此社灼ト用水龜元住池

トアリ、更ニ他ノ憑據ヲ求ムルニ北山抄會條曰召火燧木事生駒社神主ニ又元要記ニ往馬坐伊古麻都比古神社二座並大月次新嘗、火燧木神ト見ユ、龜相記北山抄等ハ共ニ信ヲ措クヘキ記録ナルニ三者ノ云フ所符節ヲ合ハスルカ如シ、然ラハ當社ハ大嘗會ノ龜トニ供スル燧木ヲ靈トシ地名ニ依リ伊古麻津比古神ト稱シ祭リタルモノナリ、但配祀ノ神名詳カナラス。

神 戸

大和國大稅帳曰往馬神戸、稻貳佰壹拾玖束漆把、租壹拾參束陸把、合貳百參拾參束參把、新抄勅格符抄曰伊古麻神三戸、大和。

伊古麻山口神社大月次新嘗明治村大字襟原ニアリ、俗ニ瀧宮ト稱ス、延喜式ニ伊古麻山口神社大月次新嘗日本惣國風土記曰伊古麻山口神社圭田五十六束七字所祭大山祇也、舒明三年辛卯三月始奉圭田行神禮有神家巫戸等ト即此、當國山口十處ノ其一ニ居リ、古ハ大社ニシテ月次新嘗ノ官幣ニ預レリ、今村社タリ、祭神自明カナリ。

平群坐紀氏神社名神大月次新嘗明治村大字上莊ニアリ、俗ニ辻宮ト稱ス、延喜式ニ平群坐紀氏神社名神大月次新嘗ト見ユ、今村社タリ、祭神詳カナラス、姓氏錄ニ紀朝臣石川朝臣同祖建内宿禰男紀角宿禰之後也、又曰紀朝臣石川宿禰同祖屋主忍雄建猪心命之後也トアレハ紀氏ノ祖ヲ祭レルナラン。

平群神社並大月ト見ユ、今村社タリ、祭神詳カナラス。明治村大字西宮ニアリ、俗ニ西宮ト稱ス、延喜式ニ平群神社五坐並大月ト見ユ、今村社タリ、祭神詳カナラス。

平群石床神社新嘗明治村大字飯塚ニアリ、延喜式ニ平群石床神社新嘗ト見ユ、今村社タリ、祭神ハ日本惣國風土記ニ平群石床神社圭田八十二束三毛田所祭饒速日命也、舒明三年辛卯三月始奉圭田行神禮歲祭トアルモ信シ難シ、案スルニ志ニ在越木塚村曰巖上祠々旁有巨石曰石床トアリ、石床ハ一ニ乳床ト稱シ、鐘乳中ヨリ出ツルモノナリト云フ、然ラハ古ヘ此

巨石ニ乳床ヲ産出スルアリテ當時其靈ヲ祭リ直チニ社名トナセルモノナルヘシ、確録ニ云フ本草和名曰石牀一名乳床一名逆石出鐘乳中往古ハ此地石床の出てたる所にて其靈

平群郡